

(5) 海外の洋上風力発電事業

1) 各事業の概要

洋上風力発電事業の先進地である欧州諸国等においては、それら事業実施に当たって環境影響評価が必須となっており、洋上風力発電開発に係る環境影響評価の事例が多い。

本項では規模が大きく、数多くの洋上ウインドファーム開発が進むイギリス・ドイツ・デンマーク・オランダ・カナダ・アメリカ等における洋上ウインドファームプロジェクトの概要を整理した。

表3.2.5-1～表3.2.5-8には事例として取り上げた洋上ウインドファームの事業概要を列記した。

表3.2.5-1 欧州・欧米の洋上ウインドファーム事業概要一覧

No	事業名称	国	基数	規模
①	Beatrice Demonstration	イギリス	5.0MW×2 基	10MW
②	Dudgeon OWF	イギリス	10MW (56 基) ~ 3MW (168 基)	560MW
③	Egmond aan Zee	オランダ	3.0MW×36 基	108MW
④	Horns Rev	デンマーク	2MW×80 基	160MW
⑤	Nysted	デンマーク	2.3MW×72 基	165.6MW
⑥	CAPE Wind	アメリカ	3.6MW×130 基	468MW
⑦	NaiKun	カナダ	3.6MW×110 基	396MW
⑧	London Array	イギリス	3.6MW×175 基	630MW
⑨	Barrow	イギリス	3MW×30 基	90MW
⑩	Alpha ventus	ドイツ	5.0MW×12 基	60MW
⑪	Kriegers flak II	スウェーデン	5MW×128 基	640MW
⑫	Anholt	デンマーク	3.5MW×111 基	400MW
⑬	Northwind	ベルギー	3MW×72 基	216MW

表 3.2.5-2 欧州・欧米の洋上ウィンドファーム事業概要一覧（1）

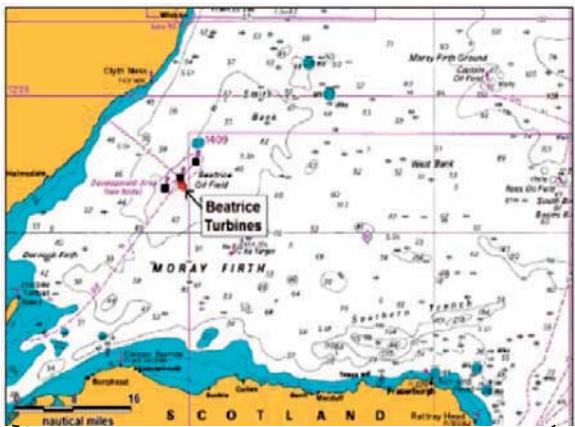
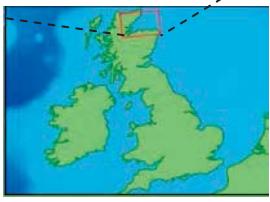
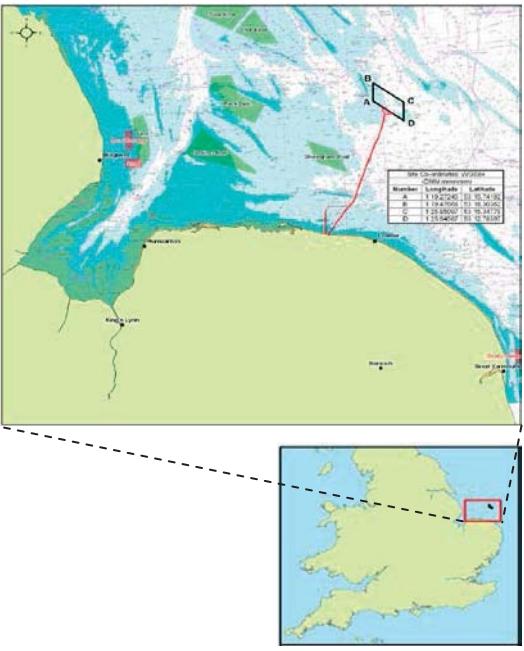
名称	Beatrice Demonstration	Dudgeon OWF
国	イギリス	イギリス
地域	スコットランド (Highland)	イングランド
事業者	Talisman Energy (UK) Limited、Scottish and Southern Energy (SSE)	Dudgeon Offshore Wind Ltd.
事業海域	<p>離岸距離：23 km 面積：1k m² 水深：45m</p>   <p>出典 : Beatrice Demonstration Environmental Statement, Talisman Energy</p>	<p>離岸距離：32 km 面積：35k m² 水深：18m～25m</p>  <p>出典 : Dudgeon Offshore Wind Farm Environmental Statement, Royal Haskoning, 2009</p>
発電所・付帯設備等	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機：5M (Senvion) ●出力：10MW ●基数：5MW×2 基 ●ハブ高：107m ●ローター直径：126m ●基礎：ジャケット ●洋上変電所：無し（陸上変電所） ●海底ケーブル：2.9km 	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機：6MW Siemens ●出力：402MW ●基数：6MW×67 基 ●ハブ高：110m ●ローター直径：160m ●基礎：モノパイル ●洋上変電所：未定 ●海底ケーブル：184km
設置工事方法	<p>●44m の海底に打ち込んだ4本足の鋼のジャケットで支持されている。各足は 120t の重量で杭打ちされている。</p>	<p>●杭打ち方式</p>
時期・期間	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価： ●工事：2006年7月～2007年 ●稼働：2007年8月 	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価： ●工事：2015～2017年 ●稼働：2017年末
公表時期	<p>●2005年申請書提出</p>	<p>●2009年6月申請書提出</p>

表 3.2.5-3 欧州・欧米の洋上ウィンドファーム事業概要一覧（2）

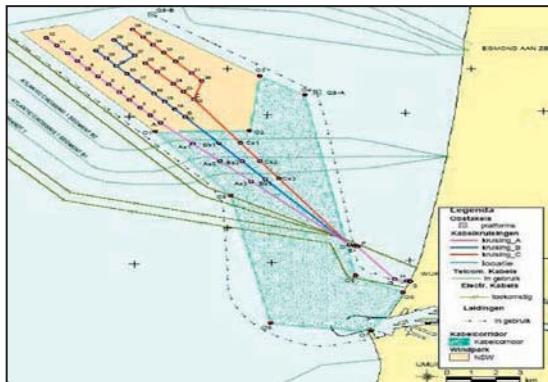
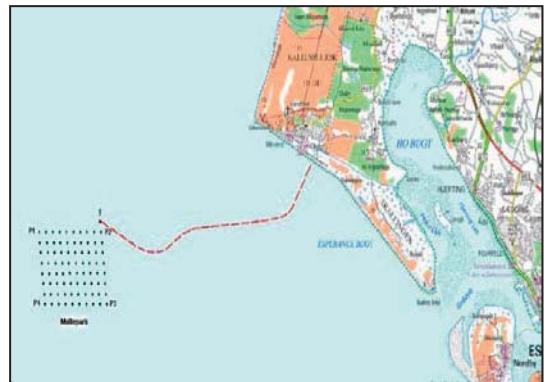
名称	Egmond aan Zee	Horns Rev 1
国	オランダ	デンマーク
地域	Noord-Holland	Blavandshuk
事業者	Nuon (Vattenfall AB), Shell Wind Energy Ltd	E DONG Energy 社
事業海域	離岸距離：10～18 km 面積：24k m ² 水深：15～18m  	離岸距離：15 km 面積：27.5k m ² 水深：6.5m～13.5m  
	出典：The environmental monitoring program at the Offshore Wind farm Egmond aan Zee, Neeltje Muselaers et al.	出典：Review Report2003, The Danish Offshore Wind Farm Demonstration Project:Horns Rev and Nysted Offshore Wind Farm Environmental Impact Assessment and monitoring, Elsam Engineering and ENERGI E2, 2004
発電所・付帯設備等	●風力発電機：Vestas 社（ドイツ）製 3.0MW 機 ●出力：108MW ●基数：3MW×36 基 ●ハブ高：70m ●ローター直径：90m ●基礎：モノパイル ●洋上変電所：無し ●海底ケーブル：65.4km	●風力発電機：Vestas 社（ドイツ）製 2.0MW 機 ●出力：160MW ●基数：2.0MW×80 基 ●ハブ高：70m ●ローター直径：80m ●基礎：モノパイル ●洋上変電所：1 基（マルチパイル） ●海底ケーブル：97km
設置工事方法	●杭打ち方式 基礎のために海底に 250t のスチールが沈められた。	●杭打ち方式
時期・期間	●環境影響評価： ●工事：2006年4月～2006年8月 ●稼働：2007年	●環境影響評価： ●工事：2002年3月～2002年8月 ●稼働：2002年12月
公表時期	●2005年5月認可	●1999年6月申請書提出

表 3.2.5-4 欧州・欧米の洋上ウィンドファーム事業概要一覧（3）

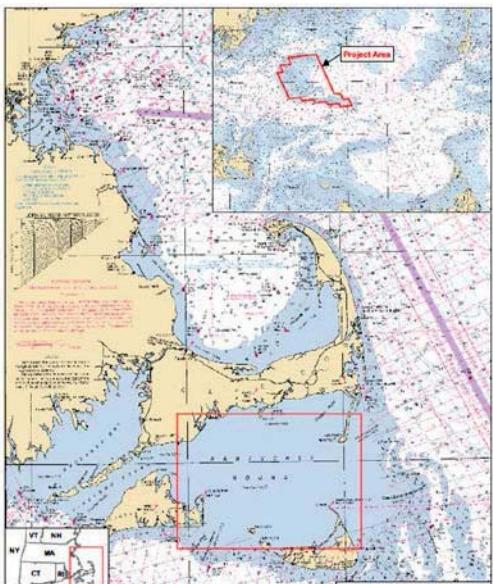
名称	Nysted	CAPE Wind
国	デンマーク	アメリカ
地域	Sydfalster	マサチューセッツ州 (ニューイングランド)
事業者	DONG Energy 社	Energy Management Inc.
事業海域	離岸距離：13 km 面積：26k m ² 水深：6～9m	離岸距離：7 km 面積：77k m ² 水深：1m～18m
	 	
	出典：Review Report 2003, The Danish Offshore Wind Farm Demonstration Project:Horns Rev and Nysted Offshore Wind Farm Environmental Impact Assessment and monitoring, Elsam Engineering and ENERGI E2, 2004	出典：Cape Wind, Elsam Engineering and ENERGI E2, 2004
発電所・付帯設備等	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機：Siemens 社 (ドイツ) 製 2.3MW 機 ●出力：165.6Mw ●基数：2.35MW×72 基 ●ハブ高：69m ●ロータ一直径：82m ●基礎：重力式 ●洋上変電所：1 基 (重力式) ●海底ケーブル：76.5km 	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機：Siemens (SWT3.6-107) ●出力：468MW ●基数：3.6MW×130 基 ●ハブ高：78.5m ●ロータ一直径：107m ●基礎：モノパイル ●洋上変電所：1 基 ●海底ケーブル：80km
設置工事方法	●海底は10m以内の泥および砂は除去され砂礫層と入れ替えられた。基礎は+/-30cm および+/-1° の精度である。構造物は0.3-9.5m沈下している。	●杭打ち方式
時期・期間	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価： ●工事：2002年1月～2003年1月 ●稼働：2003年12月 	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価： ●工事：2014年～ ●稼働：未稼働
公表時期	●2001年申請書提出	●2001年申請書提出

表 3.2.5-5 欧州・欧米の洋上ウィンドファーム事業概要一覧（4）

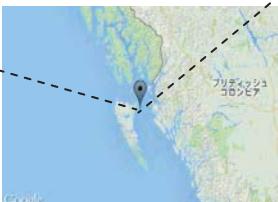
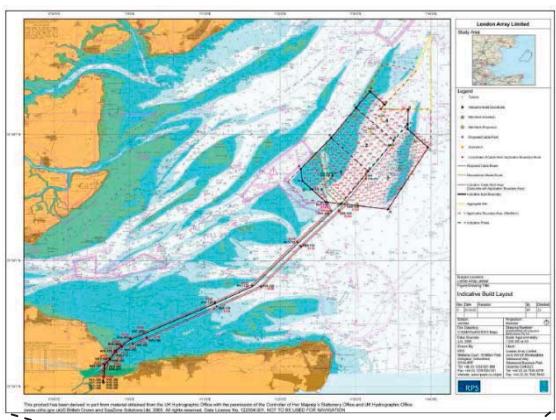
名称	NaiKun	London Array
国	カナダ	イギリス
地域	ブリティッシュ コロンビア	南東イングランド
事業者	ENMAX Corporation 社	DONG Energy 社、Masdar 社他
事業海域	離岸距離：9 km 面積：98k m ² 水深：7～20m	離岸距離：20 km 面積：100k m ² 水深：0～23m
	 	 
	出典：Naikun Offshore Wind Energy Project, Executive Summary	出典：Environmental statement, London Array limited, 2005
発電所・付帯設備等	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機：Siemens (SWT4.0-130) ●出力：400Mw ●基数：4MW×100 基 ●ハブ高：不明 ●ロータ一直径：130m ●基礎：未定 ●洋上変電所：未定 ●海底ケーブル：209km 	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機：Siemens 社 (ドイツ) 製 3.6MW 機 ●出力：630MW ●基数：3.6MW×175 基 ●ハブ高：87m ●ロータ一直径：120m ●基礎：モノパイル ●洋上変電所：2 基 (モノパイル) ●海底ケーブル：450km
設置工事方法	●未定	<ul style="list-style-type: none"> ●杭打ち方式 モノパイル海底 40m まで打ち込まれている。
時期・期間	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価：2003～2009 年 ●工事：未定 ●稼働：未定 	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価： ●工事：2010 年 5 月～2013 年 3 月 ●稼働：2013 年
公表時期	●2002 年 FS 調査開始	●2005 年 5 月申請書提出

表 3.2.5-6 欧州・欧米の洋上ウィンドファーム事業概要一覧（5）

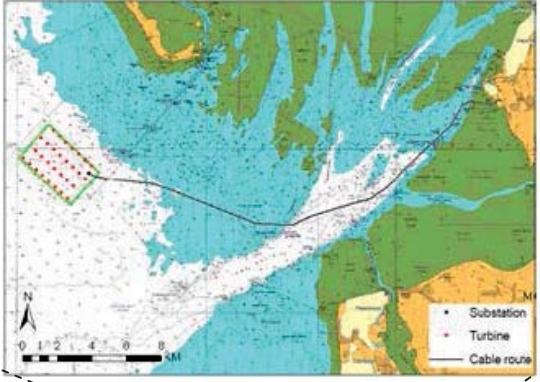
名称	Barrow	Alpha ventus
国	イギリス	ドイツ
地域	北西イングランド	ドイツ北西沖
事業者	Barrow Offshore Wind Ltd 社	E.ON Climate &Renewables GmbH 他
事業海域	離岸距離 : 23 km 面積 : 1k m ² 水深 : 45m  	離岸距離 : 56 km 面積 : 4k m ² 水深 : 28m～30m 
	出典 : Barrow Offshore Wind Farm 1st Annual Report, Department of Business Enterprise and Regulatory Reform, 2008	
発電所・付帯設備等	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機 : Vestas 社 (ドイツ) 製 3.0MW 機 ●出力 : 90MW ●基数 : 3MW×30 基 ●ハブ高 : 75m ●ローター直径 : 90m ●基礎 : モノパイル ●洋上変電所 : 1 基 (モノパイル) ●海底ケーブル : 52km 	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機 : AreavaWind 社製 5MW 機 (M5000-116) ●出力 : 60MW ●基数 : 5MW×12 基 ●ハブ高 : 92m ●ローター直径 : 116m ●基礎 : トリポット及びジャケット ●洋上変電所 : 1 基 (ジャケット) ●海底ケーブル : 76km
設置工事方法	●杭打ち方式	●杭打ち方式 海底 25m-45m まで打ち込まれている。
時期・期間	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価 : 2003 年～ ●工事 : 2005 年 3 月～2006 年 1 月 ●稼働 : 2006 年 9 月 	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価 : ●工事 : 2008 年 1 月～2009 年 11 月 ●稼働 : 2010 年 4 月
公表時期	●2002 年 2 月申請書提出	●1999 年 9 月申請書提出

表 3.2.5-7 欧州・欧米の洋上ウィンドファーム事業概要一覧（6）

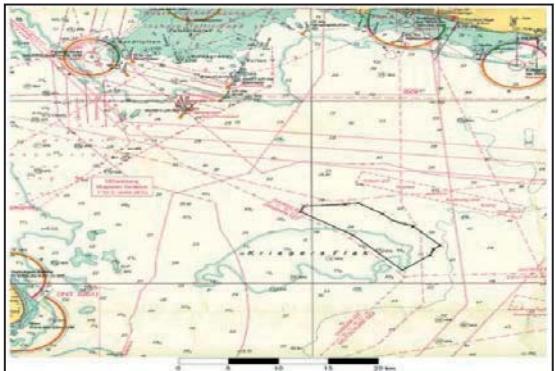
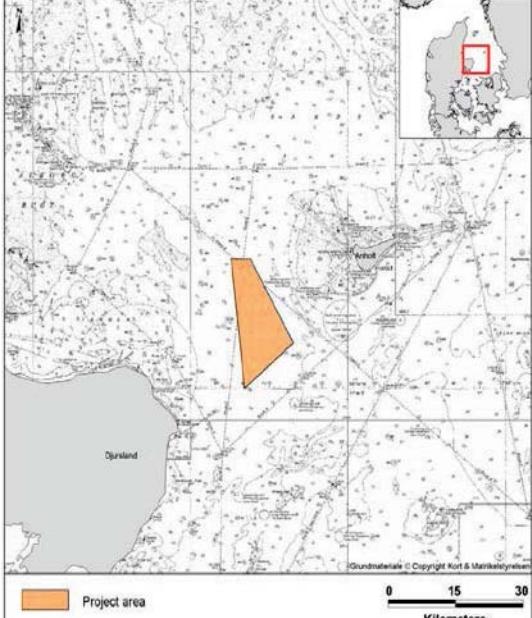
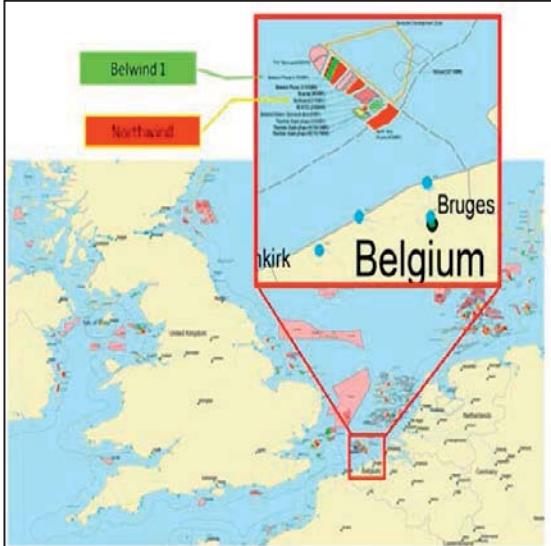
名称	Kriegers flak II	Anholt
国	スウェーデン	デンマーク
地域	Trelleborg Kommun	Djursland Anholt
事業者	VATTENFALL 社	DONG Energy
事業海域	離岸距離 : 32.7 km 面積 : 63k m ² 水深 : 16~39m	離岸距離 : 15 km 面積 : 145k m ² 水深 : 14m~17m
	 	
	出典 : Wind Farm – Kriegers Flak ENVIRONMENTAL IMPACT ASSESSMENT, Sweden offshore wind ab	出典 : Anholt Offshore Wind Farm, DHI, 2009
発電所・付帯設備等	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機 : 未定 ●出力 : 640MW ●基数 : 5MW×128 基 ●ハブ高 : 不明 ●ロータ一直径 : 不明 ●基礎 : 未定 ●洋上変電所 : 不明 ●海底ケーブル : 不明 	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機 : ●出力 : 399.6MW ●基数 : 3.6MW×111 基 ●ハブ高 : 81.6m ●ロータ一直径 : 120m ●基礎 : モノパイアル ●洋上変電所 : 1 基 (ジャケット) ●海底ケーブル : 174.5km
設置工事方法	●未定	<ul style="list-style-type: none"> ●杭打ち方式 海底 18m~36m まで打ち込まれている。
時期・期間	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価 : ●工事 : 未定 ●稼働 : 未定 	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価 : 2010 年公表 ●工事 : 2011 年 12 月 ~ 2013 年 5 月 ●稼働 : 2013 年 9 月
公表時期	●2002 年 4 月調査	●2008 年 11 月申請書提出

表 3.2.5-8 欧州・欧米の洋上ウィンドファーム事業概要一覧 (7)

名称	Northwind
国	ベルギー
地域	Eldepasco
事業者	Aspiravi Holding NV、Parkwind NV
事業海域	<p>離岸距離 : 37 km 面積 : 14k m² 水深 : 15~23m</p> 
	<p>出典 : 住友商事ニュースリリース, 2013 年 7 月 18 日</p>
発電所・付帯設備等	<ul style="list-style-type: none"> ●風力発電機 : V112-3.0MW(Vestas) ●出力 : 216MW ●基数 : 3MW × 72 基 ●ハブ高 : 71m ●ローター直径 : 112m ●基礎 : モノパイアル ●洋上変電所 : 1 基 (モノパイアル) ●海底ケーブル : 94km
設置工事方法	<ul style="list-style-type: none"> ●杭打ち方式
時期・期間	<ul style="list-style-type: none"> ●環境影響評価 : ●工事 : 2013 年 4 月 ~ 2014 年 6 月 ●稼働 : 2014 年 6 月
公表時期	<ul style="list-style-type: none"> ●2006 年 5 月申請書提出

2) 調査の対範囲と参考項目

海外の洋上ウィンドファームプロジェクトにおいて取り上げられている環境影響評価項目を表3.2.5-9に整理した。

環境影響評価項目としては水質・底質・流向・流速等の水環境、底生生物・魚介類・海産哺乳類・鳥類等の動物を取り上げている事例が多い。一方、大気環境、動物・植物プランクトン、卵・稚仔等の浮遊性の生物については取り上げている事例は少ない。

表 3.2.5-9 海外の洋上ウィンドファームプロジェクトの環境影響評価項目一覧

評価項目		洋上風力発電所名・国名												
		Beatrice Demonstration	Dudgeon OWF	Egmond aan Zee	Horns Rev	Nysted	CAPE Wind	NaiKun	London Array	Barrow	Alpha ventus	Kriegers flak II	Anholt	North wind
	イギリス	イギリス	オランダ	デンマーク	デンマーク	アメリカ	カナダ	イギリス	イギリス	ドイツ	スウェーデン	デンマーク	ベルギー	
大気環境	大気質	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●
	騒音・振動	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
水環境	水質	●	●	●	—	●	—	—	●	●	—	●	●	●
	底質	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	—	●	●
その他環境	海底地形	●	—	—	—	●	●	—	—	●	—	●	●	—
	流向・流速	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	—
	波浪	—	●	●	—	—	●	—	●	●	●	—	●	—
	水中騒音・振動	—	●	●	—	—	●	●	●	●	●	—	—	●
動物	動物プランクトン	●	—	—	—	—	●	●	—	—	—	—	—	—
	卵・稚仔	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—
	底生生物	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	魚介類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	海産哺乳類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	鳥類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
植物	海草・海藻	—	—	—	●	●	●	●	●	—	—	●	—	—
	植物プランクトン	●	—	—	—	—	●	●	—	—	—	—	—	—
	藻場	—	—	—	—	—	●	●	—	—	—	—	—	—
人と自然の 触れ合いの 場	景観	●	●	●	●	●	●	●	●	●	—	●	●	●
	人と自然の触れ合い の場	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—

注) ● : 考慮している項目、- : 考慮されていない項目

3) 参考項目別の調査・予測・評価方法

海外の洋上ウィンドファームプロジェクトの環境影響評価において、主に取り上げられている環境影響評価項目として、水質、底質・地形、波浪・流況、水中騒音、動物（底生生物、魚介類、海棲哺乳類、鳥類）、植物（海草・藻類）、景観を対象に調査・予測・評価手法について下記のとおり整理した。

① 水質

表 3.2.5-10 水質に関わる調査・予測・評価手法について

項目		内容	備考
調査	調査対象項目	◎工事による影響：懸濁物質(SS)、濁度等 ◎施設の存在による影響：溶存酸素濃度(DO)、栄養塩類類等	
	調査時期	予測時期（工事時、存在時・稼働時）を想定した時期	
	調査手法	◎既往調査資料等による定性的手法 ◎採水法及び水質分析による定量的手法	
予測	予測時期	工事時、存在時・稼働時	
	予測手法	◎既往調査資料等による定性的手法 ◎水質予測モデル等による定量的手法	
評価	評価手法	◎現地調査、予測結果、既往知見等に基づく定性的手法 ◎現地調査、予測結果と環境基準値等との比較・評価	

【概要】

水質に関しては 14 事例のうち 9 事例が評価対象として取り上げている。海底ケーブルの敷設、及びモノパイプのドリリング工事による濁りの影響が懸念されている。また、底質と関連付けて海底ケーブルの敷設工事による底泥中の有機物及び重金属の水質への影響が懸念されている。

調査は、ケーブルルートに沿って SS、濁度、溶存酸素 (DO)、及び化学的酸素要求量 (COD) の調査が実施されている。

予測は、他事例の調査結果を引用した定性的な予測や、シミュレーションを用いた詳細な濁度の予測を実施した事例が見られた。

評価は、“局所的でかつ短期間のものであり、全体としての影響は軽微”との評価が多く見られた。

【調査】

・項目の選定理由

<工事に伴う一時的な影響>

モノパイプ方式による工事に伴う一時的な海域生物場の擾乱や破壊に伴う生息場への影響、工事に伴う懸濁物が水中の透過光を遮り水中の基礎生産量が減少すると考えられたため選定されている。

<施設の存在及び供用>

施設の存在に伴う洗掘や濁りの影響、生息環境の変化が、基礎生産量、有機態炭素量、溶存酸素な

どの水質環境に影響すると考えられたため選定されている。

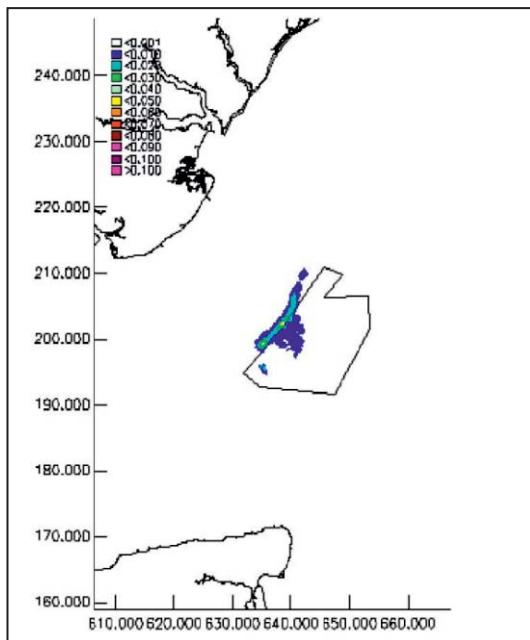
- 実施されている調査手法の事例

実施されている手法は、光学濁度センサーを用いた計測、及び海水サンプリングによるSSの水質分析が採用されている。分析項目は、濁度、SS、COD、BOD、DO等である。

【予測】

- 予測手法の事例

濁度の定量的な予測手法として、濁りの拡散数値シミュレーションモデルを利用している事例がある（図3.2.5-1参照）。



出典：Environmental statement, London Array limited, 2005

図 3.2.5-1 工事中の濁りの予測例（London Array）

Suspended sediment plume resulting from foundation spill under the monopile drilled option.
Results from the base of the water column. Concentrations in kg/m³

また、その他の数値シミュレーションモデルとしてし、供用時に風車の海中基盤に付着した*Mytilus edulis*（ムラサキイガイ）等の、ろ過食生物のフィルター効果を考慮しているモデルも利用されている。

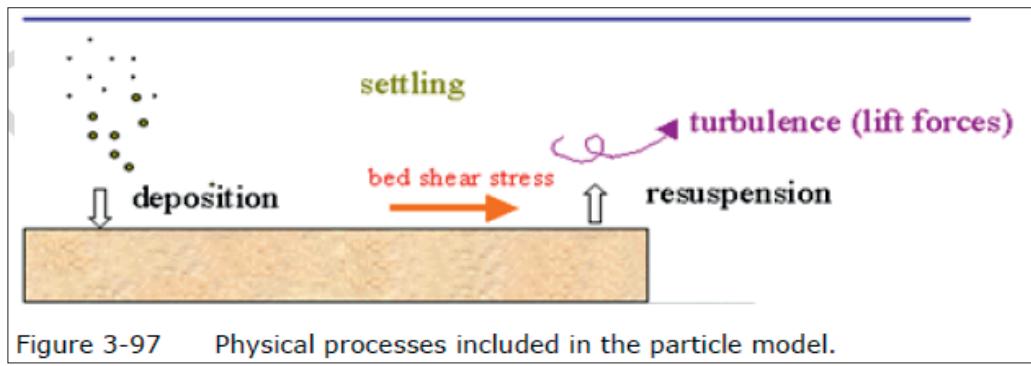
$$\text{filtration capacity} = \text{Abu} * 0.185 * (\text{L};\text{cm})^2 * 24 / 1000$$

Abu : abundance (ind/m²)

L : the shell length in cm

0.185 : scaling factor

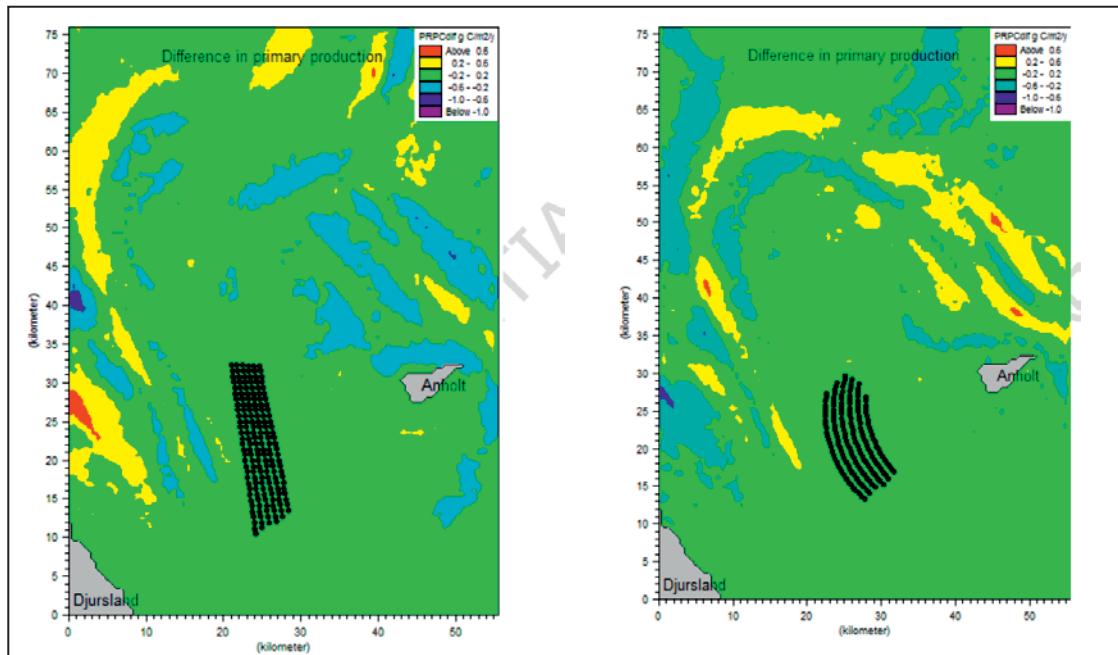
また、懸濁物の拡散はparticle model (PA)を採用している。その物理過程を図3.2.3.2に示す。



出典 : Anholt Offshore Wind Farm, Energinet.dk, Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図 3.2.5-2 物理過程のモデル例

また、風車基盤やタワー基盤がもたらす新らたな生物の生息環境を予測するため、基礎生産量、有機態炭素の堆積・無機化、海底付近の溶存酸素を考慮している詳細なシミュレーションモデルが用いられている事例もある。その予測結果例を図 3.2.5-3 に示す。



出典 : Anholt Offshore Wind Farm, Energinet.dk, Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図 3.2.5-3 シナリオ 1 と 2 (風車配置毎) における供用前後の基礎生産量の相異

Difference in modelled yearly net primary production between reference condition
and scenario 1 and 2 of operating wind mill farms.

【評価】

評価の事例を以下に示す。風車の基礎工事や海底ケーブルの埋設工事に伴う水中懸濁物濃度の変化や海底堆積状況を考慮し、水中懸濁物濃度は魚類を対象とした閾値を下回り、透視度の基準値については一時的に上回ることが予測された。また、堆積量については風車周辺以外では 1mm 程度と予測された。以上の予測結果を踏まえ、これらの現象は局所的でかつ短期間のものであり、全体としての影響は軽微と評価されている。

また、風車基盤やタワー基盤がもたらす新らたな生物の生息環境が基礎生産量、有機態炭素の堆積・無機化、海底付近の溶存酸素濃度に及ぼす影響については、予測の結果、濃度変化は長期化するが、その変化量はベースライン濃度（建設前の状態）と大きく変化することなく、また、変化の範囲も広くないことから全体的な影響は軽微と評価されている。

なお、水質の評価基準として海水浴場の基準が利用されている事例がある。

海水浴場の基準：Directive 76/160/EEC

（大腸菌、連鎖球菌、サルモネラ菌、腸内ウィルス、pH、色度、油分、フェノール、透明度、DO）

② 底質・地形

表 3.2.5-11 底質・地形に関する調査・予測・評価手法について

項目	内容		備考
調査	調査対象項目	◎工事による影響：底泥の再懸濁(重金属、粒度組成等) ◎施設の存在による影響：基礎周辺のスコアリング等	
	調査時期	予測時期（工事時、稼働時）を想定した時期	
	調査手法	◎既往調査資料等による定性的手法 ◎グラブ採泥器を使用し、有機、無機成分等による定量的手法	
予測	予測時期	工事時、稼働時	
	予測手法	◎既往調査資料等による定性的手法 ◎数値モデル等による懸濁物濃度と堆積量を推定する定量的手法	
評価	評価手法	◎現地調査、予測結果、既往知見等に基づく定性的手法 ◎現地調査、予測結果と各種閾値濃度（魚類、透視度、堆積厚）との比較	

【概要】

底質に関しては、14 事例のうち 13 事例が評価対象として取り上げている。底質については、海底ケーブルのための海底掘削、モノパイル式風車の基礎工事のドリリングにおける海底の攪乱が懸念され調査されている。地形に関しては、風車の基礎の周りに起こる洗掘（スコアリング）による地形変化に対して調査が実施されている。

底質の調査方法は、グラブ採泥器により底泥の採取を行い、そのサンプルを分析にかける方法が主流である。分析項目は、主に重金属の含有量、及び底質の粒度組成などである。予測は、数値シミュレーションモデルを利用して堆積厚などを予測する事例が見られた。

地形変化の調査は、音響測深機を用いて深浅データを取得し、スコアリングの状況等が把握されている。

【調査】

・項目の選定理由

<工事に伴う一時的な影響>

海底ケーブル敷設での海底掘削に伴う底質の擾乱、再懸濁による影響が考えられるため選定されている。

<施設の存在及び供用>

施設の存在に伴う洗掘（スコアリング）の影響、特に、スコアリングの深さが風車の安定性に影響を及ぼすことから選定されている。

- 実施されている調査手法の事例

○底質

ウインドファーム内の境界内側および周辺、およびケーブルルートに測点をとり、グラブ採泥器を用いたサンプリングを行い分析に供している。

分析項目は以下のとおりである。

表 3.2.5-12 底質の分析項目

項目	内容
金属分析	Al、Ba、Cd、Cr、Cu、Fe、Hg、Ni、Sn、V、Zn (Barrow)
重金属	主にPb、Zn (ISQG : Interim Marine Sediment Guidelineが参照される) (North Hoyle)
放射線	ガンマ線 (Barrow)
粒度分析	粒径

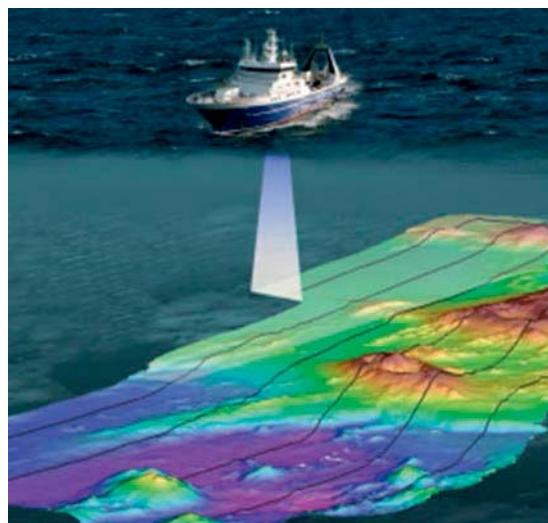


図 3.2.5-4 底質調査の状況

○地形変化（スコアリング）

スコアリングについては、パイル基礎と海底地形、海洋環境要因（例えば、波浪、潮位、流況など）、風車海域における底泥の移動などの相互関係を調査する必要があるとされている。

そのため、海洋環境条件の計測は各種の計測機器が風車本体や近傍の海底に設置された。また、スコアリングの確認（海底地形の変化）にはシングルビーム音響測深機とマルチビーム音響測深機（図3.2.5-5）を採用している。

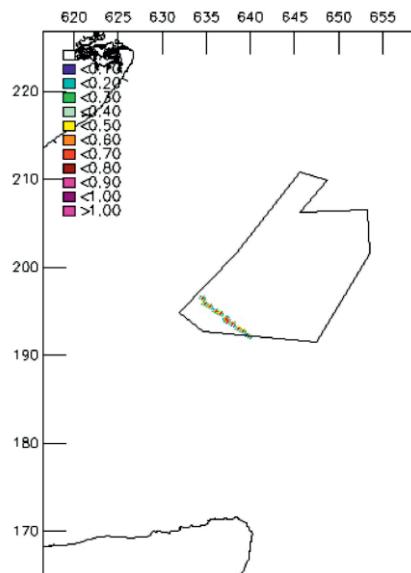


出典：<http://www.niwa.co.nz/our-science/oceans/bathymetry/further-information>

図 3.2.5-5 マルチビーム音響測深機による計測模式図

【予測】

底質への影響については数値シミュレーションモデルにより堆積厚を計算している事例がある。工事中の最悪ケースを想定し（11基の風車でモノバイルの工事を継続しているとき）、潮流データと組み合わせて堆積厚を計算している。予測結果は1mm以下でわずかであった（図3.2.5-6参照）。



出典：Environmental statement, London Array limited, 2005

Change in bed thickness (mm) at the end of a spring neap tidal cycle following the foundation spill sediment releases.

図 3.2.5-6 工事中の堆積厚の予測例（London Array）

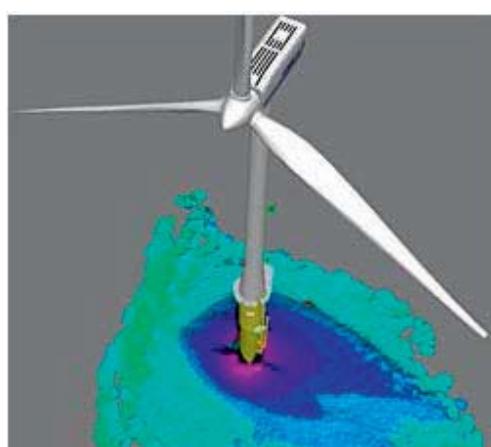
地形変化については、シングルビーム音響測深機とマルチビーム音響測深機による計測結果から予測されている。それは、スコアリングは最初の半年は30~40cm/月で進行するが、その後減少し2~5cm/月となる。始めの2カ月が極端に大きく、その後緩慢となる。スコアリングはジャケットの場所ごとに異なった状況を示し、洗掘された底泥は一定方向に堆積していた。また、基礎の形状が異なるとスコアリング状況も異なったパターンを示すことなどが明らかとなった。なお、当該調査結果から、スコアリング調査にはマルチビーム音響測深機が有効であることが示唆された。

近年では、風車のタワーにスキャナソナーを設置してリアルタイムにスコアリングを監視するシステムも開発されている(2軸スキャニングソナーシステム)。複数のソナーヘッドを動作させ、広い領域をカバーできる。出力は、3Dプロファイル点のデジタルデータで表示できる。その監視データを分析し、必要に応じて保全対策を取ることができる。



出典：Kongsberg Maritime Kongsberg Maritime Ltd (<http://www.km.kongsberg.com/renewables>)

図 3.2.5-7 2 軸スキャニングソナーシステムの概要



出典：Kongsberg Maritime Kongsberg Maritime Ltd (<http://www.km.kongsberg.com/renewables>)

図 3.2.5-8 スコアリングの監視結果例

③ 波浪・流況

表 3.2.5-13 波浪・流況に関する調査・予測・評価手法について

項目		内容	備考
調査	調査対象項目	◎施設の存在による影響：風車存在に伴う波浪・流況の変化	
	調査時期	予測時期（存在・稼働時）を想定した時期	
	調査手法	◎既往調査資料等による定性的手法 ◎ADCP による水深別の流況調査、ブイ式は波浪計による波高・波向き定量的手法	
予測	予測時期	存在・稼働時	
	予測手法	◎既往調査資料等による定性的手法 ◎数値モデル等による定量的な手法	
評価	評価手法	◎現地調査、予測結果、既往知見等に基づく定性的手法 ◎設置前後の予測結果の比較	

【概要】

波浪に関しては 14 事例のうち 8 事例、流況に関しては、14 事例のうち 12 事例が評価対象として取り上げている。波浪についてはウィンドファームの設計や施工時の海象情報として計測されている。また、ウィンドファームの存在による波の変化から海底泥の移動を引き起こす可能があるため調査を実施している。

流況に関しては、ウィンドファームの存在が流況の変化を引き起こし海洋環境に影響を及ぼすことが考えられるため調査が実施されている。

調査方法は、他の海域の類似の調査結果を引用しながら評価している事例や、シミュレーションモデルを利用しながら定量的に影響を評価している。

【調査】

・項目の選定理由

○波浪

波浪の変化はウィンドファームの建設や海底ケーブルの敷設のエンジニアリング情報になる。また、海底泥の移動を引き起す可能性があることから、これに伴い風車サイトの海底地形の変化や周辺の海岸浸食に影響を及ぼす可能性があるため選定されている。

○流況

流況については、ウィンドファームの存在が抵抗となり流況が変化し、海域環境に影響を及ぼすことが想定されるため選定されている。

・実施されている調査手法の事例

○波浪

波浪調査は、同様な環境の他の類似例をもとに影響を評価している。また、シミュレーションモデルを使った調査事例がある。現地調査ではブイ式波浪計などが利用されている(図3.2.5-9、10参照)。

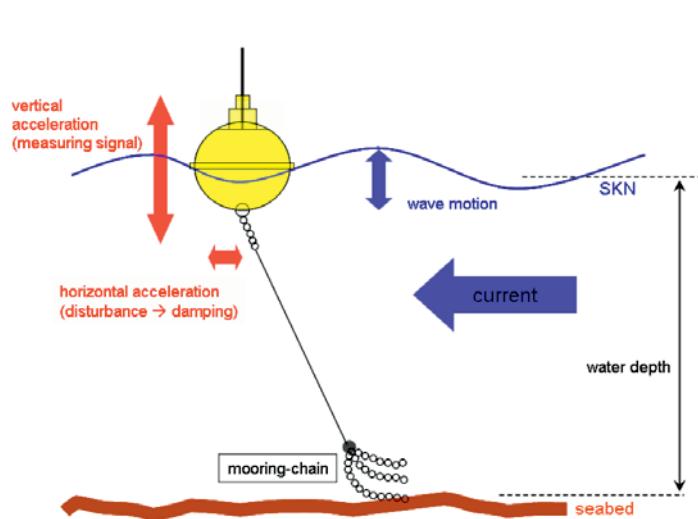


Figure 3.2.5-9: Functional principles of the measuring buoy

出典：DATAWELL 社 HP

図 3.2.5-9 ブイ式波浪計の設置状況

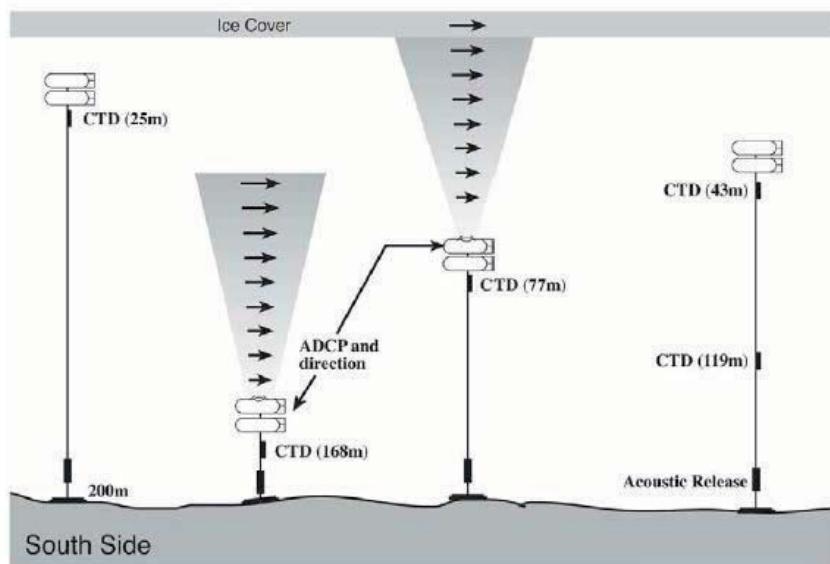


出典：DATAWELL 社 HP

図 3.2.5-10 ブイ式波浪計

○流況

流況調査には ADCP (Acoustic Doppler Current Profiler) 流速計や海洋構造を確認するため CTD (Conductivity Temperatures Depth) 計測機を併用している例がある。



出典：Moored current Meter and CTD Observations from Barrow Strait, 2000-2001, Bedford Institute of Oceanography

図 3.2.5-11 流況調査事例

【予測・評価】

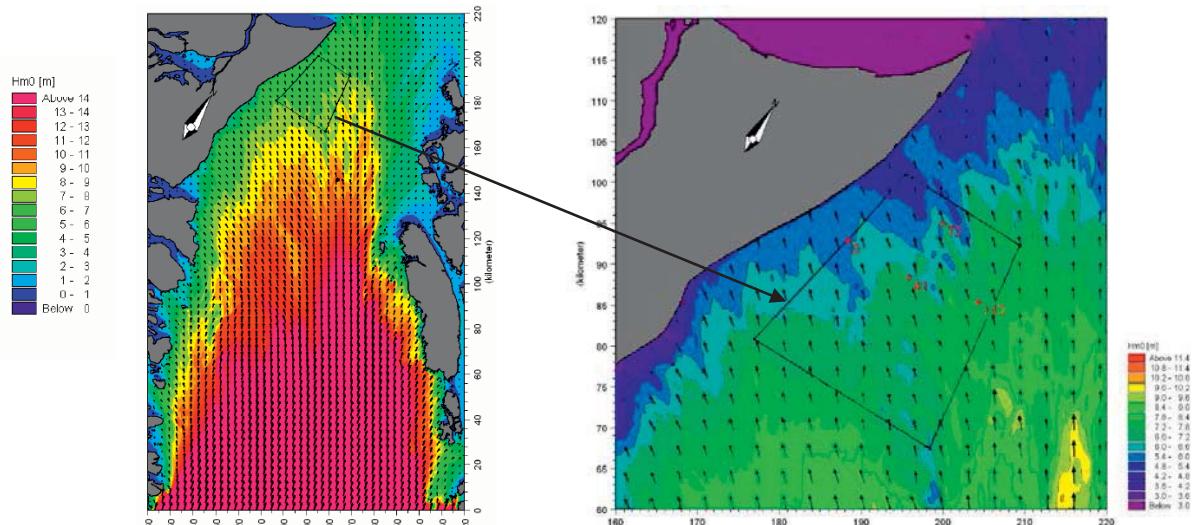
○波浪

波浪の予測ではデンマーク流体研究所 (Danish Hydraulic Institute) が開発したMIKE21NSW wave modelを採用している事例がある。このモデルは波の屈折、水深の変化に伴う浅瀬効果、波と流れの相互作用、海底摩擦や碎波に伴う局所的な風速の増大と減衰を考慮している。

流況の予測はデンマーク流体研究所 (Danish Hydraulic Institute) が開発した二次元水深統合モデルMIKE21 HDが採用されている事例がある。ただし、ここでの流況予測はウインドファーム立地後の流況変化の予測ではなく、波浪に及ぼす流況の変化を把握するために実施されている。

再現期間50年の波高と波向きの計算結果例を図3.2.5-12に示す。ウインドファーム内では風速の若干の減衰に伴って波高は減少し、この効果は風車サイトからの距離が大きくなると減衰し、遠方では周辺海域の波高に戻る。変電施設周辺では局所的に波高の変化が大きくなるが、この範囲はウインドファーム全体の影響域内に収まる。

一方、流況（潮流）が波高に及ぼす影響については、ウインドファーム海域周辺海域の潮流は小さく流況が波高に及ぼす影響は殆どないと評価されている。



出典 : NaiKun Wind Development Inc., Technical volume 3 of the environmental assessment application for the Naikun offshore wind energy project marine physical environment, April 2009

図3.2.5-12 波浪予測結果（50年再現期待値）、右：拡大図

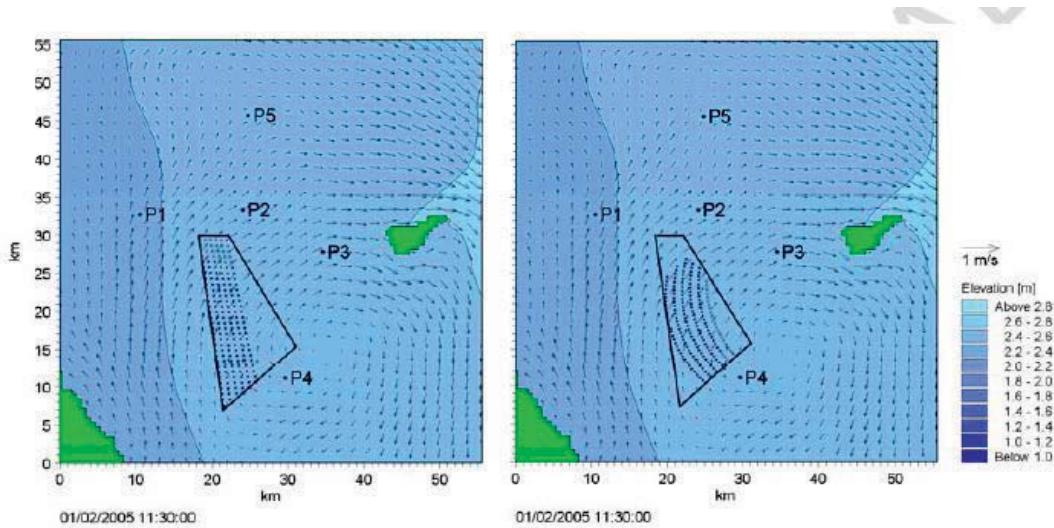
Wave Heights 1 in 50 years Waves Attenuated in Shallow Water
Significant Wave Height and Mean Direction, 1 in 50 year Storm from 165°

○流況

平年状態と荒天状態を対象にシミュレーションモデルで予測を実施している。平年状態の予測は三次元BANSAIモデル、荒天状態の予測は二次元MIKE21 FM HDモデルを適用している。

また、London Array の流れの計算ではDelft3D-HD FLOWモデルを適用し、洋上風車の着床形式の違い（重力方式、モノパイル方式）による流れの変化を計算している。

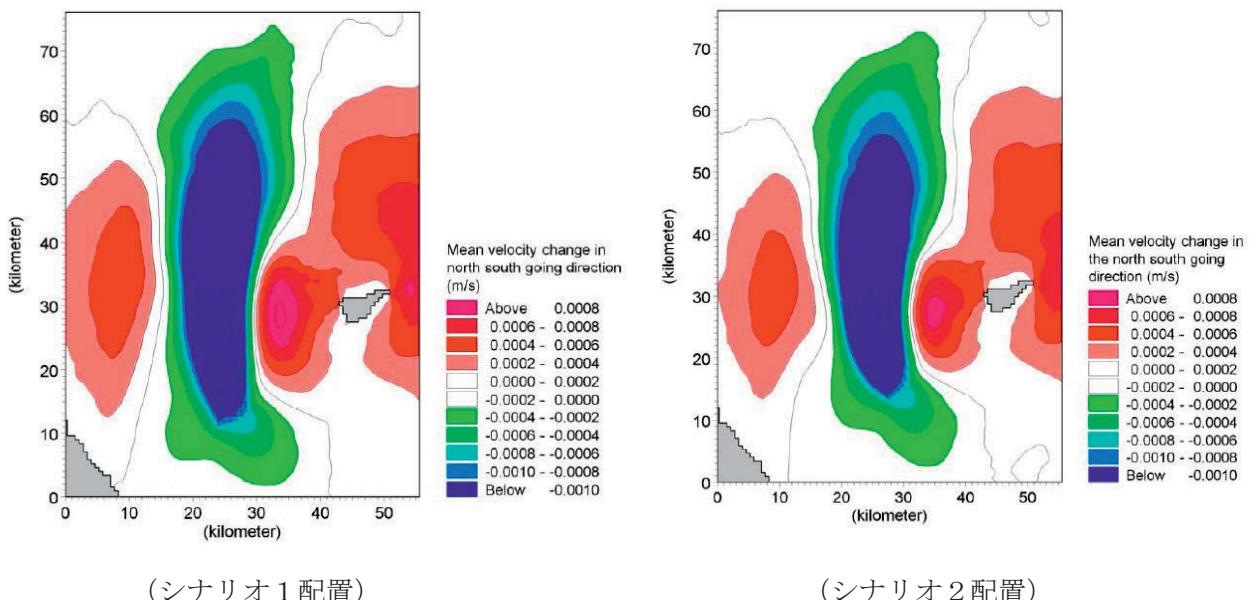
シミュレーションの結果、荒天状態の時には流速変化の影響は大きく、流速が 2%以上減衰する範囲はウインドファームサイトから 5km 以内の範囲であった。平年状態においては表層における流速変化は 0.0008m/s のオーダで、殆ど影響がなかった。シナリオ（配置）間での流況変化では、シナリオ 2 の方が若干大きくなっていた（図 3.2.5-14）。



出典 : Anholt Offshore Wind Farm, Energinet.dk, Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図3.2.5-13 シナリオ（配置）毎の流況予測結果

Modelled current speeds in the Baseline situation (local model, grid size approximately 600 m)

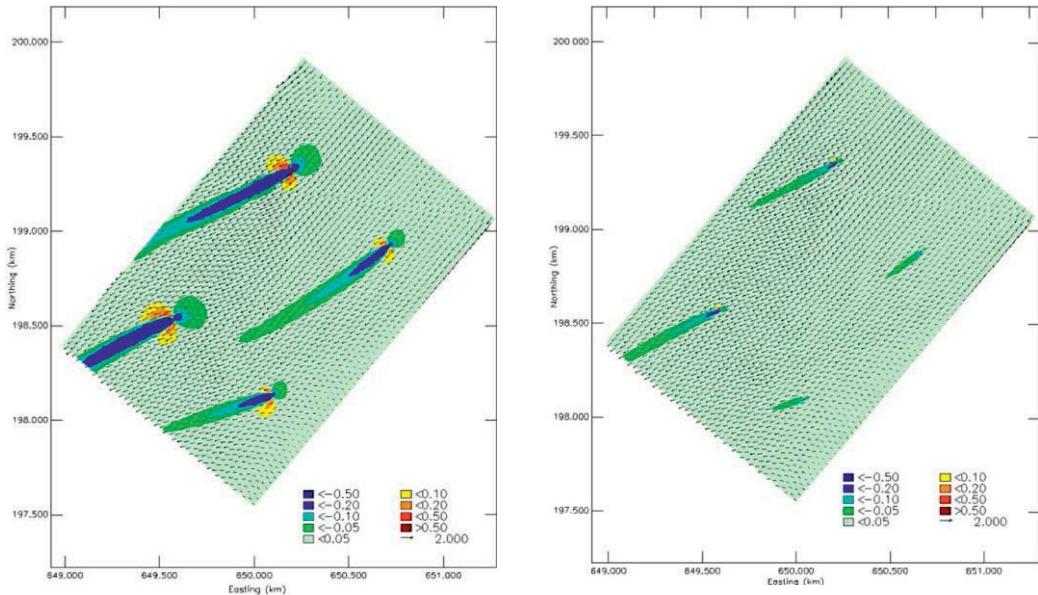


出典 : Anholt Offshore Wind Farm, Energinet.dk, Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図3.2.5-14 南北流の流況の変化状況

Annual mean surface velocity changes in the north-south going velocity component 2005. Model results from the local 3D model (grid spacing approximately 600 m). Green-blue colours indicate a velocity reduction and red colours indicate an increase in current velocity.

また、風車周辺の流れの変化も予測されており、以下の事例（London Array）では風車の下流側で流れの減少域が見られるが、その大きさは僅かで限定的であるので影響はないと評価されている。



出典：Environmental statement, London Array limited, 2005

図3.2.5-15 風車周辺の流れの変化の予測（左：重力式、右：モノパイル）

(左図) Near-field changes in flow regime at time of peak flood (spring tide).

Location = 'east' sub-area; Foundations = GBS; Depth averaged flows.

(右図) Near-field changes in flow regime at time of peak flood (spring tide).

Location = 'east' sub-area; Foundations = monopile.

④ 海底振動・水中騒音

表 3.2.5-14 海底振動・水中騒音に関する調査・予測・評価手法について

項目		内容	備考
調査	調査対象項目	◎工事による影響：工事による周辺生物環境への影響 ◎施設の稼働による影響：稼働時による周辺生物環境への影響等	
	調査時期	予測時期（工事時、稼働時）を想定した時期	
	調査手法	◎既往調査資料等による定性的手法 ◎水中サウンドレコーダー、ハイドロフォンによる計測 OBS (Ocean Bottom Seismometer) による海底振動を計測	
予測	予測時期	工事時、稼働時	
	予測手法	◎現地調査結果および既往調査資料等による定性的手法 ◎伝播予測モデルによる定量的手法	
評価	評価手法	◎現地調査、予測結果、既往知見等に基づく定性的手法 ◎距離別の水中騒音圧レベルにネズミイルカの聴覚閾値を対応させ影響の有無を評価	

【概要】

海底振動・水中騒音に関しては 14 事例のうち 9 事例が評価対象として取り上げている。工事及び稼働時の魚類、海鳥、海産ほ乳類等の生息環境への影響を考慮して選定している。

調査方法は、水中騒音は水中ハイドロフォン、海底振動は海底地震計を用いている。

水中騒音の予測は、定性的な予測の他に水中騒音 3 次元伝搬予測モデルによる定量的な予測も行われている。水中騒音で最も高い騒音レベルは、支持杭のハンマーパイルドライブのインパクトであると予測されている。また、工事船の最も大きな高い騒音レベルは、洋上風車工事船の位置制御（ポジショニング）と変電所の導入時であると予測された。

【調査】

・項目の選定理由

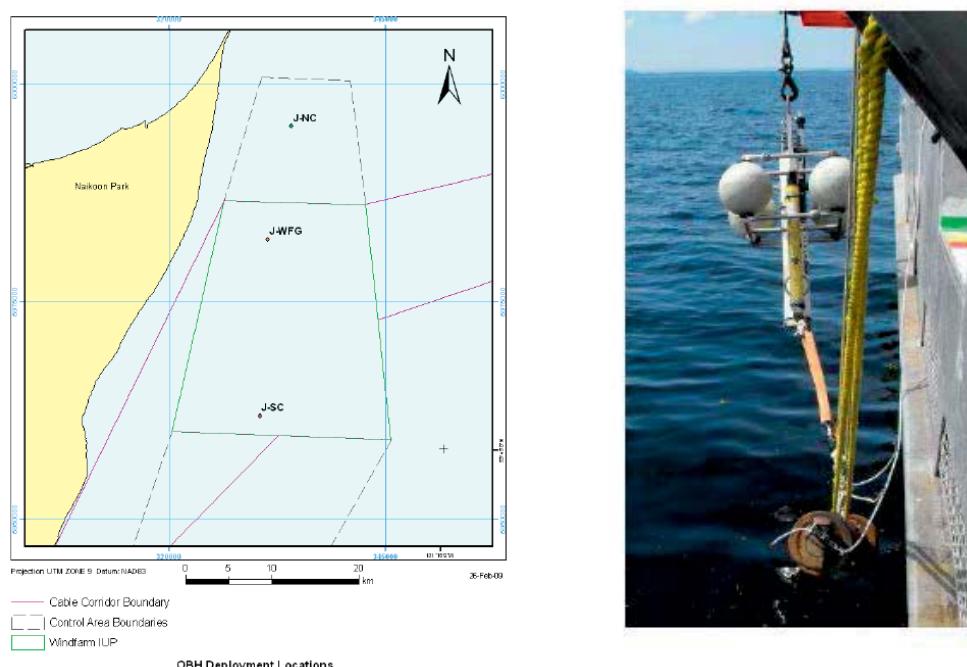
魚類、海鳥、海産ほ乳類ならびに魚介類の生息環境への影響を評価するために選定されている。

・実施されている調査手法の事例

<現地調査>

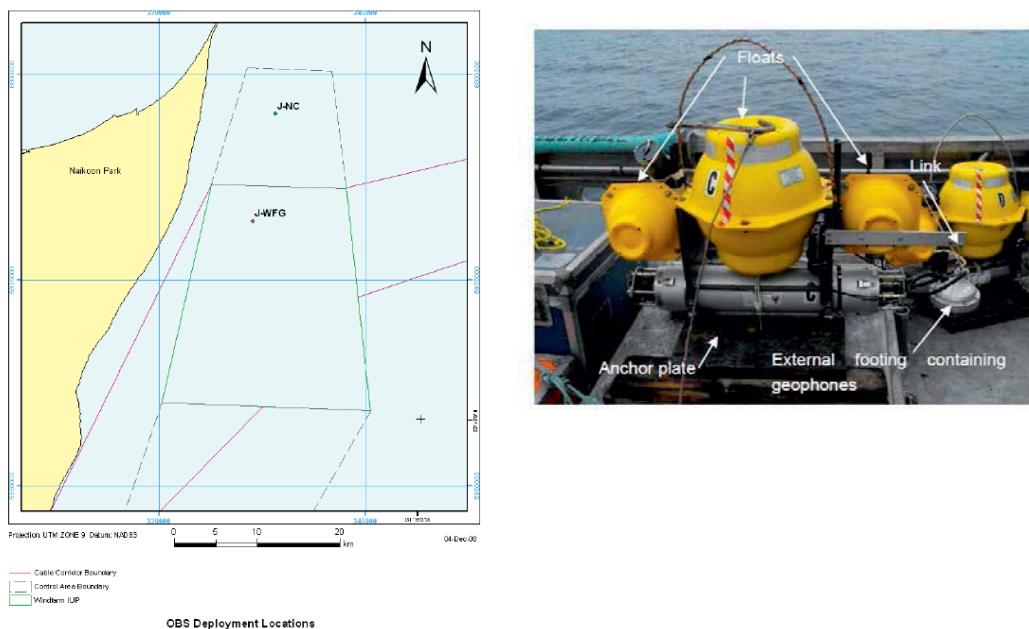
水中騒音についてはOBH(Ocean Bottom Hydrophone)により計測（図3.2.5-16の右図）。計測は風車対象海域1地点、対照海域2地点にて実施（図3.2.5-16の左図）。

海底振動についてはOBS(Ocean Bottom Seismometer)により計測（図3.2.5-17の右図）。風車対象海域1地点、対照海域1地点にて実施（図3.2.5-17左図）。



出典：NaiKun wind development Inc. Technical volume 4 of the environmental assessment application for the Naikun offshore wind energy project noise and vibration, March 2009

図 3.2.5-16 OBH の調査事例（左：計測地点、右：設置状況）

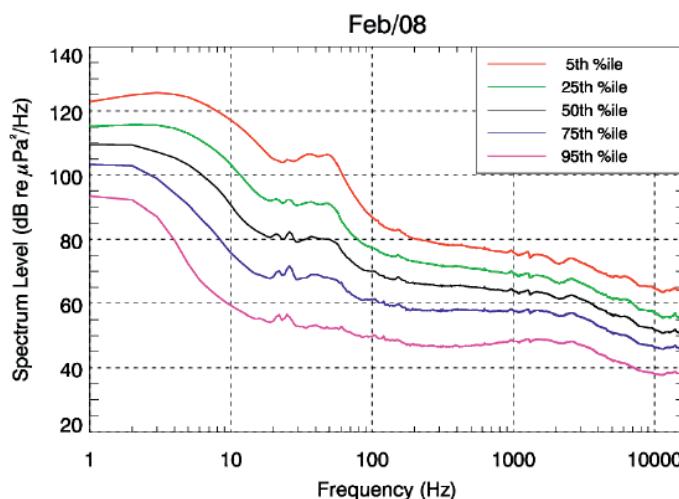


出典：NaiKun wind development Inc. Technical volume 4 of the environmental assessment application for the Naikun offshore wind energy project noise and vibration, March 2009

図 3.2.5-17 OBS の調査事例（左：計測地点、右：計測装置）

<現地調査結果：水中騒音>

水中騒音の計測結果の一例を図 3.2.5-18 に示す。計測結果から、船舶音や海産哺乳類の確認を行った。その結果、船舶音は対照区とウィンドファーム計画海域ともに少なかった。海産哺乳類としてはシャチ (Killer Whale) の鳴き声が 4 月と 6 月の始めに確認された。また、両地点の水中騒音は海象状態に依存していることが分かった。



出典：NaiKun wind development Inc. Technical volume 4 of the environmental assessment application for the Naikun offshore wind energy project noise and vibration, March 2009

図 3.2.5-18 2 月における水中騒音計測結果の例

(時間率騒音レベル：騒音レベルがあるレベル以上の時間を占める[%])

Percentile ambient noise spectral levels for the WFG site in February, 2008

<現地調査結果：海底振動>

海底振動の計測結果の一例を図 3.2.5-19 に示す。OBS による計測結果によれば、対照地点の振動伝播速度 (ground velocities) はウィンドファーム計画サイトよりも大きな値を示した。また、計画地点と対照地点の両地点で、海底の水平振動速度は鉛直振動速度を上回っていた。少ない既往知見（陸上風車）に基づけば、洋上風車は非常に低い周波数の海底振動を惹起することが想定された。

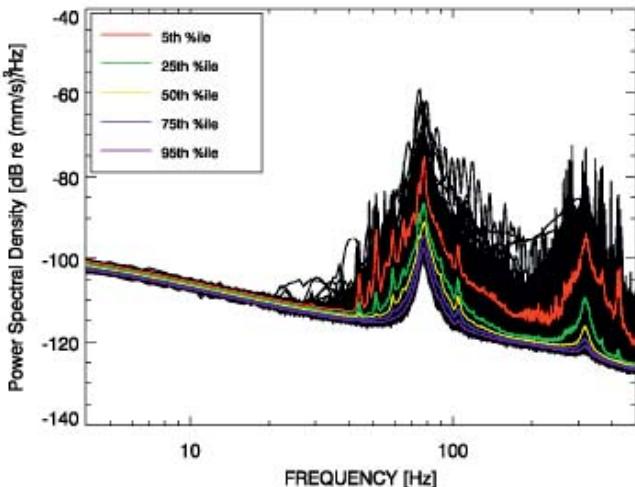


Figure 11-7 Horizontal seafloor velocity power spectral density levels recorded at J-WFG on May 30, 2008.

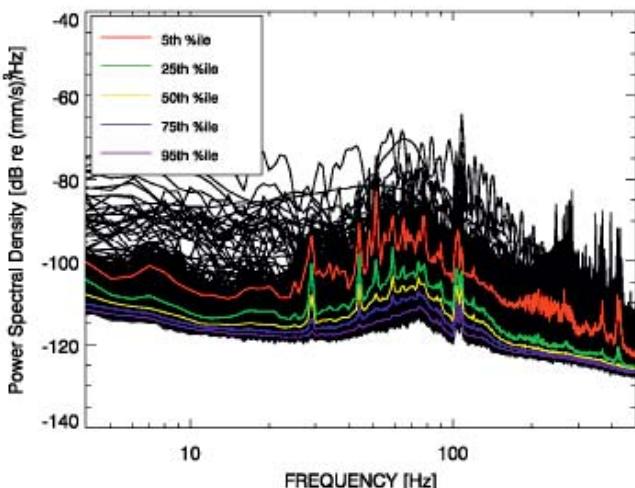


Figure 11-8 Horizontal seafloor velocity power spectral density levels recorded at J-WFG on May 30, 2008.

出典：NaiKun wind development Inc. Technical volume 4 of the environmental assessment application for the Naikun offshore wind energy project noise and vibration, March 2009
図 3.2.5-19 海底における振動計測の周波数分析結果（例）

【予測】

水中騒音の予測は JASCO Applied Sciences が開発した水中騒音 3 次元伝搬予測モデルのMONM (Marine Operations Noise Model) が採用されている事例がある。予測事象は工事時と操業時で、騒音発生事象についてはパイルの打込み、風車設置、変電所設置、ケーブル敷設と風車の通常稼働時としている。また、最も大きな騒音原となるパイル打込みについては、モノパイル (1本)、トリポッド (3本パイル)、ラティス (4本パイル) のケースについて予測している。併せてエアバブルカーテンなどの騒音低減策に対する検討も行っている。さらに、作業船舶からの騒音についても予測している。

水中騒音で最も高い騒音レベルは支持杭のハンマーパイルドライブのインパクトであると予測された。工事船の最も大きな高い騒音レベルは、洋上風車工事船の位置制御 (ポジショニング) と変電所の導入時と予測された。

予測結果の一例を図 3.2.5-20 に示す。

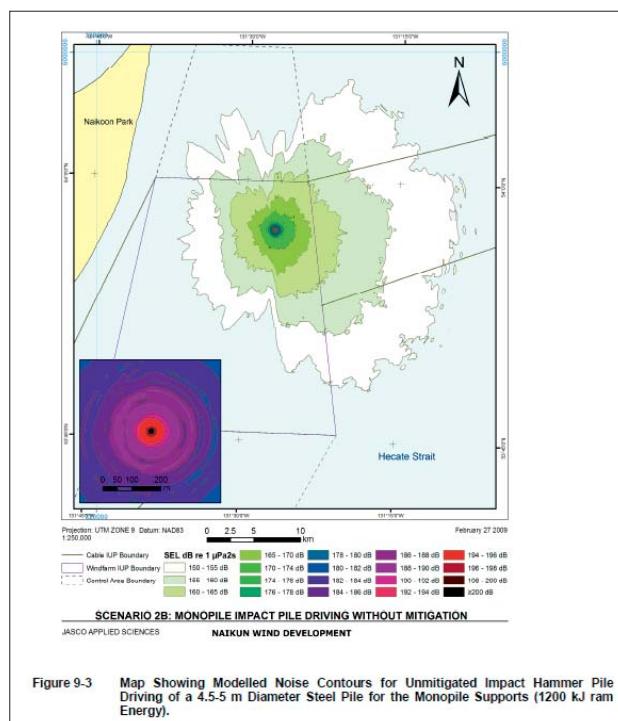


Figure 9-3 Map Showing Modelled Noise Contours for Unmitigated Impact Hammer Pile Driving of a 4.5-m Diameter Steel Pile for the Monopile Supports (1200 kJ ram Energy).

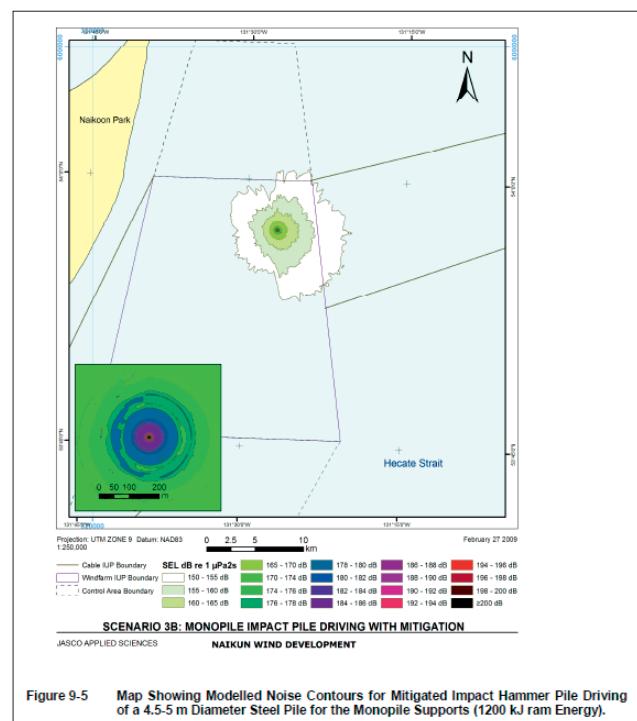


Figure 9-5 Map Showing Modelled Noise Contours for Mitigated Impact Hammer Pile Driving of a 4.5-m Diameter Steel Pile for the Monopile Supports (1200 kJ ram Energy).

出典：NaiKun wind development Inc. Technical volume 4 of the environmental assessment application for the NaiKun offshore wind energy project noise and vibration, March 2009

図 3.2.5-20 モノパイル打込み時（左：低減対策なし、右：低減対策有り）の水中騒音予測結果

⑤ 動物（底生生物）

表 3.2.5-15 底生生物に関する調査・予測・評価手法について

項目	内容		備考
調査	調査対象項目	<ul style="list-style-type: none"> ◎工事による影響：工事による攪乱や破壊に伴う生息場所への影響 ◎施設の存在による影響：施設の存在により生息場の消失と改変が考えられる。 	
	調査時期	予測時期（工事時、存在時）を想定した時期	
	調査手法	<ul style="list-style-type: none"> ◎既往調査資料等による定性的手法 ◎ビデオカメラによる映像調査、採泥器を用いたサンプリング調査等による計測 	
予測	予測時期	工事時、稼働時	
	予測手法	<ul style="list-style-type: none"> ◎現地調査結果および既往調査資料等による定性的手法 ◎統計モデル（PSL:部分最小自乗法）による定量的手法 ◎種類数、個体数の時系列変化を対照区と開発区で比較（BACI 法） 	
評価	評価手法	<ul style="list-style-type: none"> ◎現地調査、予測結果、既往知見等に基づく定性的手法 ◎応答変数をろか食者、堆積物食者、雑食者として統計解析により設置前後の差から影響を評価 	

【概要】

底生生物に関しては 14 事例のうち全事例で評価対象として取り上げている。海底の攪乱、騒音・振動等の変化が底生生物に及ぼす影響が考えられるため選定されている。

現地調査は、水中ビデオ撮影による観察、グラブサンプリング等による採泥分析の調査が実施されている。

予測は、既存資料等による定性的な手法や統計的（定量的）な手法がある。

評価は、現地調査結果等に基づいた評価手法や、底生生物の影響を変化度合い（死亡/傷害、集団の変化等）に応じて点数化し評価している事例も見られた。

【調査】

・項目の選定理由

ウインドファームの工事、稼働、解体に伴う環境影響事象として、海底や海底生息環境の攪乱、騒音・振動、電磁界・温度障害、底生生物環境の変化、水理学上の変化などを取り上げ、これらの事象が底生生物に及ぼす影響を評価するために選定している。

・実施されている調査手法の事例

<現地調査>

現地調査地点は対照海域と計画海域に図 3.2.5-21 に示すように設定されている。

Figure 6.2-1 Study Area on Dogfish Banks

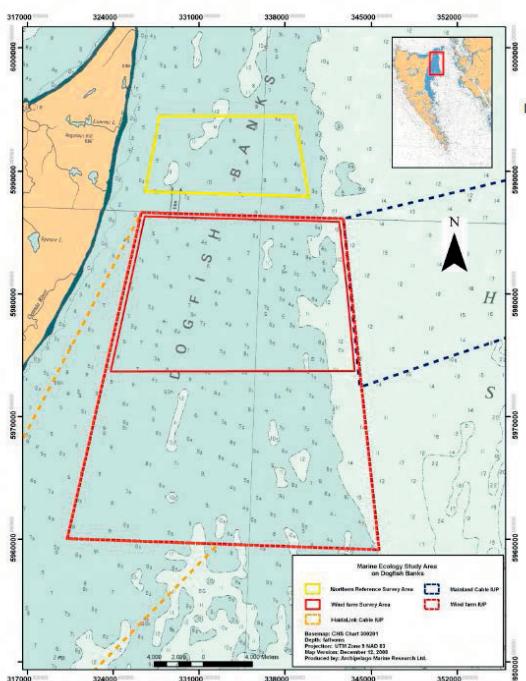
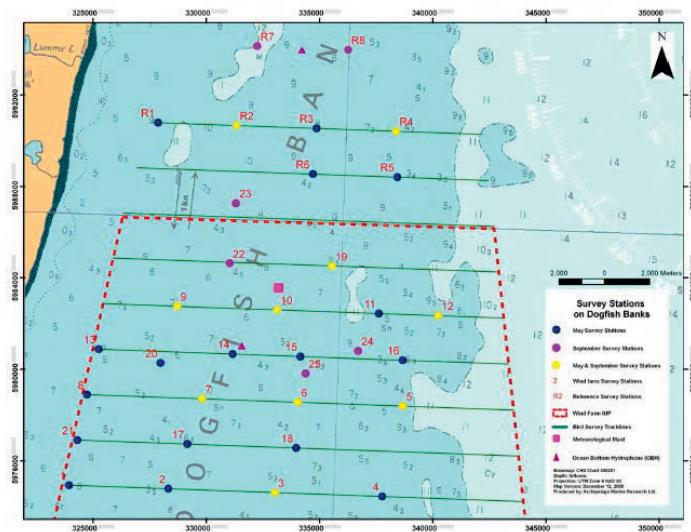


Figure 6.2-2 May and September Survey Stations



出典 : NaiKun Wind Development Inc. Technical volume 6 of the environmental assessment application for the Naikun offshore wind energy project marine aquatic ecology April 2009

図 3.2.5-21 調査対象海域と観測地点の配置（他の調査項目も含む）

調査方法は以下 3 種類の方法が採用されている（図 3.2.5-22 参照）。

- ・Towed Underwater Video（水中曳航ビデオ撮影）：500mのトランセクトラインに沿って各地点で 30 分間撮影。必要に応じてサンプリングも実施。
- ・Van Veen Grab（グラブサンプル、 0.1m^2 ）：内生ベントスを対象に1地点あたり数回サンプリング。篩別は1mm目会い。一部のサンプルは粒度組成分析に供した。
- ・Epibenthic Dredge（ドレッジサンプリング、 $1\text{m} \times 0.30\text{m}$ ）：水中曳航ビデオ撮影中に 5 分間実施している。ドレッジサンプリングの目的はビデオ撮影結果に対して、海底底質と表生ベントスの関係を定量的に確認するためである。

Figure 6.2-3 Photographs of Sampling Events

Photo A. Towed Underwater Video (SIMS).	Photo B. Sampling with Van Veen Grab Sampler.
	
Photo C. Epibenthic Dredge.	Photo D. Modified Epibenthic Dredge for Sand Lance Sampling.
	

出典 : NaiKun Wind Development Inc. Technical volume 6 of the environmental assessment application for the Naikun offshore wind energy project marine aquatic ecology April 2009

図 3.2.5-22 各種調査方法の実施状況

(上左図 : 水中曳航ビデオ撮影、上右図 : グラブサンプル、下図 : ドレッジサンプリング)

<現地調査結果>

現地調査結果の一例としてドレッジサンプルの例を表 3.2.5-16 と図 3.2.5-23 に示す。また、底質性状ごとにとりまとめた表生ベントスと内生ベントス概要を表 3.2.5-17 に示す。

表 3.2.5-16 玉石や砂利基盤における無脊椎動物のドレッジサンプル結果(例)

Table 6.3-9 Invertebrate Species Encountered in Epibenthic Dredge Samples in May and September 2008 at Gravel and Cobble-Boulder Habitats

Common Name	Substrate	Gravel	Cobble-Boulder	
			May	September
Sponges	Porifera			
Breadcrumb Sponge	<i>Halichondria panicea</i>		P	
Anemones	Actinaria	P	C	C
Anemone	<i>Urticina</i> sp.	P		
Anemone	<i>Metridium senile</i>			C
Painted Anemone	<i>Urticina grebelnyi</i>		P	
Hydroids	Hydrozoa			
Hydroid	<i>Selaginopsis cylindrica</i>			P
Bryozoans	Bryozoa		C	
Bryozoa	<i>Alcyonidium pedunculatum</i>	A	P	
Polychaetes	Polychaeta			
Polychaete Worms	<i>Nereis</i> sp.			P
Scaleworms	Polynoidae			
Scaleworms	<i>Halosydna brevisetosa</i>			P
Tubeworms	Sedentaria	P		P
Tubeworms	<i>Nephtys caecoides</i>			P
Tubeworms	Maldanidae			P
Tubeworms	<i>Pista pacifica</i>			P
Gastropods	Gastropoda			
Lewis Moon Snail	<i>Polinices lewisii</i>		P	P
Bivalves	Bivalvia	P		
Nuttall's Cockle*	<i>Clinocardium nuttallii</i>			P
Butter Clam*	<i>Saxidomus giganteus</i>	P		
Bivalves	<i>Tellina nucloides</i>			P
Bivalves	<i>Zirphaea pilsbryi</i>		P	
Bivalves	<i>Simomactra falcata</i>			P
Jingle Shell*	<i>Pododesmus macrochisma</i>	P		
Barnacles	Cirripedia			
Acorn Barnacle	<i>Balanus nubilus</i>			P

A = abundant; C = common; P = present

*Shell fragments only

出典 : NaiKun Wind Development Inc. Technical volume 6 of the environmental assessment application for the Naikun offshore wind energy project marine aquatic ecology April 2009

Figure 6.3-7 Invertebrate Species Encountered in Epibenthic Dredge Samples in Cobble-Boulder Habitat

<p>Photo A. Epibenthic dredge sample. Note high shell content.</p> 	<p>Photo B. Epibenthic dredge sample showing substrate size and abundance of pink short-spined sea stars.</p> 
<p>Photo C. Boulder with anemones (<i>Urticina</i> sp.), hydroids and other encrusting fauna.</p> 	<p>Photo D. Boulder with bread-crumb sponge (<i>Halichondria panacea</i>) and anemones.</p> 
<p>Photo E. Cobble with anemones indicating that this substrate is largely non-mobile.</p> 	<p>Photo F. Coral bryozoan (left) and clay (right) with anemone and piddock burrows.</p> 

出典 : NaiKun Wind Development Inc. Technical volume 6 of the environmental assessment application for the Naikun offshore wind energy project marine aquatic ecology April 2009

図 3.2.5-23 玉石や砂利基盤における無脊椎動物のドレッジサンプル結果(例)

表 3.2.5-17 底質性状ごとの表生/内生ベントス相の概要

Table 6.3-18 Summary of Key Characteristics of the Three Benthic Habitats

	Cobble-boulder	Gravel-Dominated	Sand-Dominated
Seabed	Largely immobile cobble and boulders often embedded in finer sediment (clay) matrix.	Largely mobile pebbles and small cobble, generally lying above a sand matrix.	Largely fine to medium grained sand with variable pebble and shell fragment content.
Epifauna	Abundant and dominated by a filter/suspension feeding complex including sponges, bryozoans, hydroids and tunicates. Sea stars (pink short-spined sea star) abundant.	Far less abundant than cobble-boulder areas, but similar filter/suspension feeding complex on larger cobbles, with hydroids being most common. Epifauna generally absent on smaller, mobile pebbles. Pink short-spined sea stars common.	Sand dollars extremely abundant in patches. Sessile epifauna generally absent except occasional hydroids on pebbles. Pink short-spined sea stars common. Dungeness and gracile crab. Crangon shrimp abundant.
Infauna	Piddocks, geoducks, large polychaete worms.	Geoducks – but generally a lack of infaunal sampling of this habitat.	Low abundance relative to fine sediment depositional areas. Polychaetes (dominated by <i>S. bombyx</i>), small bivalves (dominated by <i>Tellina nuculoides</i>), geoducks, horse clam, butter clam.

【評価】

影響評価にあたって次の3つのカテゴリーを設定し、それぞれの「基準」や「閾値」等について以下のとおり定めている。

- ・ Mortality/injury (死亡/傷害)
- ・ Alteration of community assemblage (集団の変化)
- ・ Displacement (生息場所等の移動)

[Mortality/injury] (死亡/傷害) の基準や閾値

<表生/内生ベントス>

- ・ 5%以上の現存のコミュニティが一時的（3年以下）に減少。
- ・ 2%以上の現存のコミュニティが永久的に減少。
- ・ 指定された影響の受けやすい種類が消失。

<移動性の無脊椎動物>

- ・ 5%以上の現存量が一時的（3年以下）に減少。
- ・ 長期間に亘って現存量が2%以上減少。
- ・ レッドリストや貴重種などに指定されている種類の死亡。

[Alteration of community assemblage] (集団の変化) の基準や閾値

<表生/内生ベントス>

- ・ 計画地域の2%以上の範囲で新規の生息環境が生成。
- ・ 計画地域の5%以上の範囲で現存の生息環境が変化。

[Displacement] (生息場所等の移動) の基準や閾値

- ・ 5%以上の地域的な現存量の永久的な移動。
- ・ 20%以上の地域的な現存量の一時的（3年以下）な移動。
- ・ 広域ならびに地域的に生存している生物の移動やわたりに対して現存量の5%以上の阻害。

一方、総合評価にあたっては「①影響の大きさ : Magnitude」、「②影響範囲 : Geographic Extent」、「③影響の期間 : Duration」、「④影響の頻度 : Frequency」についてそれぞれスコアを設定し、このスコアの合計で影響の程度を総合的に評価している。表 3.2.5-18～表 3.2.5-19 にそれぞれのスコアを示すとともに、表 3.2.5-20 にこれらをまとめたものを示す。

なお、最終的な評価（スコアの合計）は以下のとおり。

合計スコア : 0–8 Insignificant (非影響 : 影響は少ない)

合計スコア : 9–14 Threshold zone (非影響と影響の境界状態)

合計スコア : 15–24 Significant (影響あり)

表 3.2.5-18 評価項目毎のスコア設定状況

Table 4-3: Ratings and Definitions for Magnitude of Residual Project Effects
[How severe is the effect?]

Score	Term	Definition
8	High	Potential effects are beyond environmental and/or socio-economic standards or tolerance
6	Medium	Potential effects are detectable and approaching, but below environmental and/or socio-economic standards or tolerance
4	Low	Potential effects are detectable, but well within environmental and/or socio-economic standards or tolerance
1	Negligible	Effect is detectable at an extremely small level
0	Nil	Effect is not detectable

Table 4-4: Ratings and Definitions for Geographic Extent of Residual Project Effects
[Over how large an area does the adverse effect occur?]

Score	Term	Definition
8	Provincial	Effect extends beyond Hecate Strait/Dixon Entrance
6	Regional	Effect is within Hecate Strait/Dixon Entrance
4	Study area	Effect restricted to the study area (north Hecate Strait)
1	Local	Restricted to the direct footprint of the Project activity
0	None	No known geographic extent

Table 4-5: Ratings and Definitions for Duration of Residual Project Effects
[Once triggered, how long do the adverse effects last?]

Score	Term	Definition
4	Very long (Irreversible)	Effects persist for the entire length of the Project phase or longer
3	Long	Effects persist for greater than 25% of the time for the Project phase or for more than one generation span of the affected species
2	Medium	Effects persist for 10–25% of the time for the Project phase or for one generation span of the affected species
1	Short	Effects persist for less than 10% of the time for the Project phase or less than one generation span of the affected species
0	None	No effect, no temporal overlap with ecosystem component

出典 : NaiKun Offshore Wind Energy Project vol.1

表 3.2.5-19 評価項目毎のスコア一設定状況（続き）

Table 4-6: Ratings and Definitions for Frequency of Residual Project Effects
[How often do the adverse effects occur within the timeframe of Project activities?]

Score	Term	Definition
4	Continuous	Will occur almost all of the time
3	Common	Occurs on a regular basis, generally greater than 25% of the time during the Project phase and/or chronically during the phase
2	Uncommon	Occurs for 10–25% of the time during the Project phase and/or occurs sporadically or at irregular intervals
1	Rare	Occurs rarely (generally less than 10% of the time)
0	Never	Never occurs, no temporal overlap with ecosystem component

表 3.2.5-20 評価項目毎のスコアのまとめ

Table 4-8: Effects Assessment Scoring

Effect Level	Geographic Extent	Temporal Extent		Magnitude
		Duration	Frequency	
8	Provincial and greater	-	-	High
7		-	-	-
6	Regional	-	-	Medium
5		-	-	-
4	Study area	Very long	continuous	Low
3		Long	Common	-
2		Medium	Uncommon	-
1	Local	Short	Rare	Negligible
0	None	None	Never	Nil

Significance = geographic extent + temporal extent (duration + frequency) + magnitude

- 0–8 = Insignificant
- 9–14 = "Threshold zone"
- 15–24 = Significant

出典：NaiKun Offshore Wind Energy Project vol.1

＜評価結果＞

既往の知見、現地調査結果に基づき影響を評価している。評価結果の一例（表生/内生ベントスと移動性の大型ベントス）を表 3.2.5-21、表 3.2.5-22 に示す。

表生/内生ベントスについては、風車基礎による物理的擾乱 (Row Number 1) の合計スコアが 7 点であり影響は少ない、また、送電ケーブルの場合も合計スコアは 7 点、アンカリング、掘り起こし、プロペラによる擾乱についても合計スコアは 8 点であり、影響は少ないと評価している。

また、移動性の大型ベントスについても、風車基礎、送電ケーブル、洗掘防止設置による物理的擾乱はいずれも合計スコアは 8 点以下であり、影響は少ないと評価されている。

表 3.2.5-21 表生/内生ベントスの影響評価例（抜粋）

Table 7-11: Summary of Potential Residual Effects of the Project on Epifaunal and Infaunal Species and Communities

Potential Effect	Row Number	Project Phase ¹	Contributing Project Activity or Physical Works and Stressor	Proposed Mitigation / Compensation Measures	Residual Environmental Effects Characterization*							Confidence Level	
					Adverse (A) / Positive (P)	Duration	Frequency	Geographic Extent	Magnitude	Reversible Yes (Y) / No (N)	Ecological Context ²		
Direct loss / mortality and damage / injury	1	C	Physical disturbance from foundation footprint (structure forming epibenthos (e.g., bryozoans, hydroids, sponges) and infauna (e.g., tubeworms, piddocks, geoducks))	Avoid cobble/boulder habitat with longer lived epi-biota if possible at the siting phase	A	4	1	1	1	N	ND	NS	H
	2	C	Physical disturbance from transmission cable footprint (structure forming epibenthos (e.g., bryozoans, hydroids, sponge reefs, cold water corals, sea pens) and infauna (e.g., tubeworms, piddocks, geoducks))	Identify and avoid sensitive environmental components (sponge reefs, cold water corals) at Project siting phase	A	1	1	1	4	Y	ND	NS	H
	3	C D	Physical disturbance from anchoring, spudding, prop scour from vessels (structure forming epibenthos (e.g., bryozoans, hydroids, sponges) and infauna (e.g., tubeworms, crustaceans, piddocks, geoducks))	<ul style="list-style-type: none"> Use dynamically positioned vessels to reduce anchor effect Maintaining a minimum clearance of 1.5 m between vessel props and the seabed 	A	1	2	1	4	N or Y	ND	NS	H

表 3.2.5-22 移動性の大型ベントスの影響評価例（抜粋）

Table 7-12: Summary of Potential Residual Effects of the Project on Mobile Macroinvertebrates

Potential Effect	Row Number	Project Phase ¹	Contributing Project Activity or Physical Works and Stressor	Proposed Mitigation / Compensation Measures	Residual Environmental Effects Characterization*							Confidence Level	
					Adverse (A) / Positive (P)	Duration	Frequency	Geographic Extent	Magnitude	Reversible Yes (Y) / No (N)	Ecological Context ²		
Direct loss / mortality and damage / injury	1	C	Physical disturbance from foundation footprint (Dungeness crab, sand dollars)	No measures identified	A	4	1	1	1	Y or N	ND	NS	H
	2	C	Physical disturbance from transmission cable footprint (Dungeness crab, sea urchins, sand dollars, sea cucumbers)	No measures identified	A	1	1	1	1	Y or N	ND	NS	H
	3	C	Physical disturbance (including sediment suspension and re-distribution) from scour protection installation (sand dollars)	No measures identified	A	1	1	1	1	Y or N	ND	NS	H

出典：NaiKun Offshore Wind Energy Project vol.1

⑥ 動物（魚介類）

表 3.2.5-23 魚介類に関する調査・予測・評価手法について

項目	内容	備考
調査	◎工事による影響：工事による騒音や攪乱により生息環境に及ぼす影響 ◎施設の存在による影響：施設の存在により漁業生物を含めた漁業への影響、食物の変化に伴う海洋生物や鳥類の分布変化に伴う影響	
	調査時期 予測時期（工事時、存在・稼働時）を想定した時期	
	調査手法 ◎既往調査資料等による定性的手法 ◎底引き網調査、延縄調査、ビデオ映像調査、魚群探知機調査等	
予測	予測時期 工事時、存在・稼働時	
	予測手法 ◎現地調査結果および既往調査資料等による定性的手法 ◎実施区域への出現、出現密度、種類構成及び餽集パターンから定性的に予測 ◎濁り、騒音および電磁波等による影響を定性的に予測	
評価	評価手法 ◎現地調査、予測結果、既往知見等に基づく定性的手法 ◎対照区と開発区における種類数、個体数等の時系列図に基づく比較による評価	

【概要】

魚介類に関しては 14 事例のうち 13 事例で評価対象として取り上げている。工事中の騒音が魚介類の生息環境に与える影響、及び設備の存在による人工魚礁効果等による変化が想定されるため選定されている。

現地調査は、船舶からの音響探知、トロール調査、釣獲試験等の手法が用いられている。
予測は計画海域と対象地域で、現存量、種類構成、胃の内容物の比較する手法が取られている。
評価は、風車稼動後の胃の内容物の減少から、風車稼動時の影響が評価されている事例があった。

【調査】

・項目の選定理由

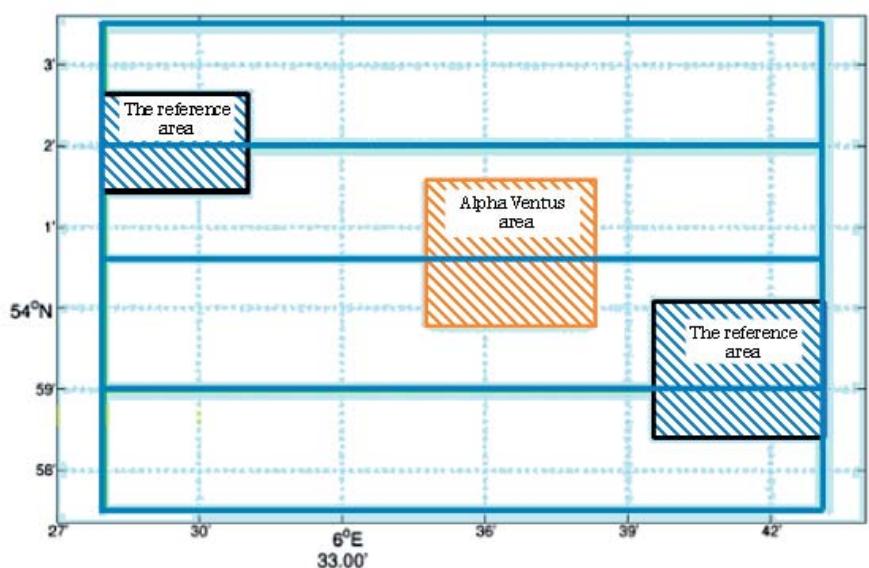
風力発電施設の建設工事に伴うパイル打込み騒音、あるいは稼働中に発生するブレード音、海底ケーブルからの電磁界、設備の存在による人工礁効果、人工礁に伴うえさ場効果など、魚類に対してプラス面とマイナス面のインパクトが想定されたため、その実態を明らかにするために選定されている。

・実施されている調査手法の事例

<現地調査>

対象海域一帯に分布する主要な魚種として mackerel(サバ)、horse mackerel(ニシマアジ)、herring(ニシン)、sprat(イワシ)を取り上げ、これらの種類に注目して調査を実施している。

Alpha ventus (以下 AV) 洋上風力の事例では、現地調査地点は 2008 年 8 月から 2012 年 4 月の間で、風車建設工事前、建設工事中、稼働中を対象としている。対象海域は図 3.2.5-24 に示すとおりで AV 海域と同様な海底底質を呈する対照区を 2 海域設定した。なお、AV 海域、対照海域の広さはいずれも 200 k m²となっている。

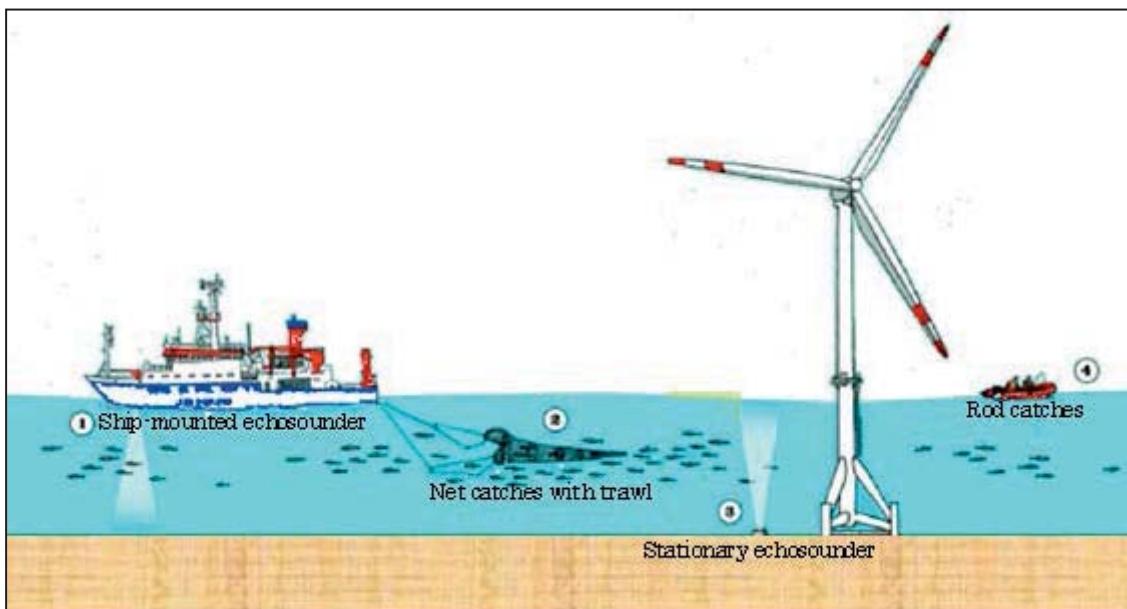


出典：Ecological Research at the Offshore Windfarm alpha ventus: Challenges ,Results and Perspectives を基に加筆・修正

図 3.2.5-24 魚類の調査対象海域（青線はトランセクトライン）

調査方法については以下の 4 種類の方法を採用している。

- ①船舶からの音響探知（広域における全体量の把握）
- ②トロール調査（種類の構成や体長の計測、胃内容物確認）
- ③海底固定型音響探知（局所海域の現存量把握）
- ④釣獲試験（風車基部などの魚類の把握、胃内容物確認）



出典：Ecological Research at the Offshore Windfarm alpha ventus: Challenges ,Results and Perspectives を基に加筆・修正

図 3.2.5-25 調査方法の模式図

<影響要因について>

・電磁界

海底ケーブルから発生する電磁界は、ある強度になると魚類に方向認識障害などの生理学的な反応を惹起する。ただ、電磁界は海底ケーブルから離れれば急激に減衰するため、影響は海底ケーブルの直近（直上）に限定される。

・水中騒音

魚類は浮き袋を介して水中騒音を認識するため、サバ (mackerel) のように浮き袋が無い種類では可聴力は低いが、ニシン科の魚 (clupeoids) などは非常に敏感な可聴力を有している。水中騒音の影響は音源からの距離と音の性質、魚類の可聴力に依存している。

水中騒音は魚類が発する信号音などをマスキングすることで行動の障害を及ぼすとともに、音源に近い大きなレベルでは聴覚障害や重度の障害あるいは死亡をもたらす。工事中の騒音ではパイプの打込み音が最も問題となり、これに比べると風車の稼働音は大きな問題にはならないようである。

・海中構築物

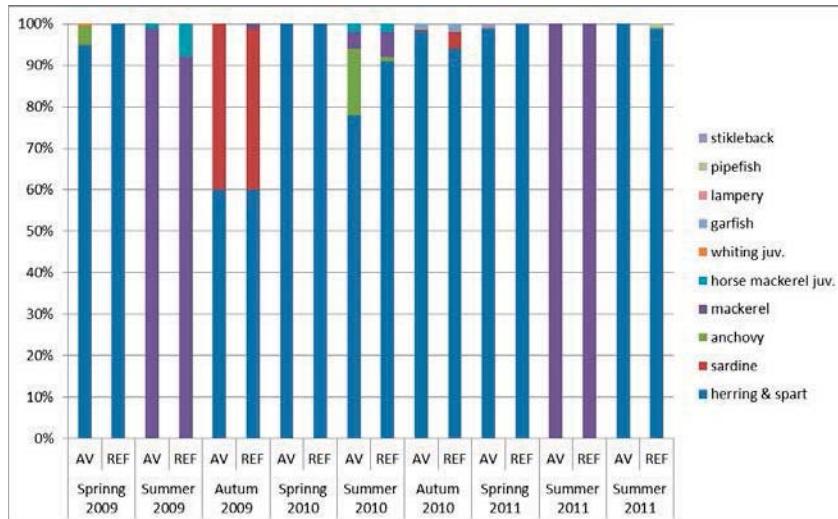
構築物の周辺は、魚類の隠れ場、基礎基盤がもたらす餌料環境、小魚のハンティング環境などで魚類はプラスの効果の下に謂集するが、謂集の原因是これらの要因だけではないようである。また、謂集に伴うエネルギーの消費はマイナスの影響となる。

【予測】

計画海域と対照海域における「現存量指標」、「種類構成」、「胃内容物」の比較などを実施している。

【評価】

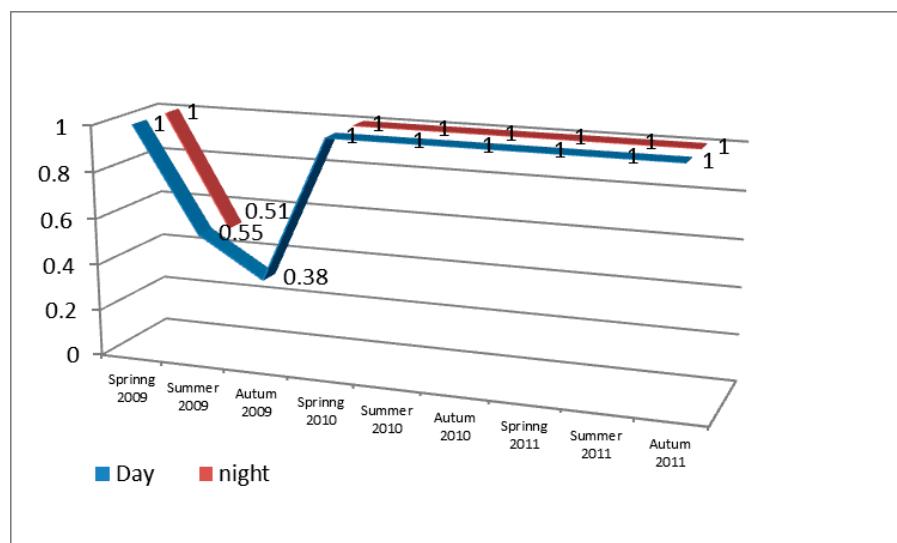
図3.2.5-26はトロール漁法によって採取された魚種についてAV海域と対照海域で比較したもので、両者の構成が殆ど同じことからウィンドファーム建設がAV海域の魚種構成には影響しないことを示唆している。



出典：Ecological Research at the Offshore Windfarm alpha ventus: Challenges ,Results and Perspectives を基に加筆・修正

図 3.2.5-26 AV 海域と対照海域における魚種構成の比較

図3.2.5-27はAV海域内外の相対的な現存量を時系列的に示したもので、工事期間中(2009年夏季、秋季)には現存量が減少したが、ウィンドファーム完成後はAV海域内外の相異は無くなっていることが示されている。



出典：Ecological Research at the Offshore Windfarm alpha ventus: Challenges ,Results and Perspectives を基に加筆・修正

図 3.2.5-27 AV 海域内外の相対的な現存量に時系列変化

また、胃内容物の調査結果では、AV海域の個体は対照海域の個体より胃内容物量が少ないことが確認されており、これは摂餌行動が阻害されたこと、獲物生物の種類や構成が異なったこと、風車の稼働音が摂餌行動に影響していることなどが示唆された。

⑦ 動物（海産哺乳類）

表 3.2.5-24 海産哺乳類に関する調査・予測・評価手法について

項目	内容	備考
調査	調査対象項目 ◎工事による影響：工事による騒音や攪乱により生息環境に及ぼす影響 ◎施設の稼働による影響：施設の稼働に伴い発生する騒音により水中の生息環境に及ぼす影響	
	調査時期 予測時期（工事時、存在・稼働時）を想定した時期	
	調査手法 ◎既往調査資料等による定性的手法 ◎航空機、船舶、フェリー、陸上からの目視観測等 ◎生物音調査（T-POD 調査）、ピンガ一標識調査（衛星利用調査）	
予測	予測時期 工事時、存在・稼働時	
	予測手法 ◎現地調査結果および既往調査資料等による定性的手法 ◎工事中の騒音や攪乱、ケーブルからの電磁波による影響を定性的に予測 ◎生態ニッチ分析（ENFA）を適用して、生息海域を把握し、各種影響要因のレベルを算定	
評価	評価手法 ◎現地調査、予測結果、既往知見等に基づく定性的手法 ◎生息海域における各種影響要因のレベルを算定結果に、環境適応性（水中騒音、懸濁物濃度等）を対応させて影響の有無を評価	

【概要】

海産哺乳類については、14事例のうちすべてが評価項目に取り上げている。工事中の騒音、および稼働時の水中騒音による生息環境に及ぼす影響の可能性があるため取り上げている。

調査手法は、航空機トランセクト、船舶トランセクト、目視、レーダー調査が実施されている。また、工事中の影響を確認するため C-POD（生物音響装置）を使った現地調査が8事例（Egmond Ann Zee、Barrow、HornsRev、Anohlt,Nysted、Kriegers flak II、Alpha Ventus、Beatrice Demonstration）ある。その結果は、影響範囲の推定および一時的な回避時間の推定に使われている。

評価については、工事による影響は一時的なものであり、また、騒音レベルは小さいことから、影響は小さいとしている事例が多い（Egmond Ann Zee、Anholt、Barrow、Horns Rev、Nysted）。また、工事中においては、工事近傍での海産哺乳類への少なからずの影響が発生するが、施設稼働時においては、影響はほとんど無いと評価している（Kriegers flak II）。Alpha Ventus では、C-POD データの解析により 12か所の内、開発区域から 11km 以内の 8か所で影響があると評価し、イルカは杭打ち中に反応閾値の距離まで移動すると評価されている。

【調査】

・項目の選定理由

海産哺乳類の内、harbor porpoise（ネズミイルカ）を対象に工事中や稼働中の影響が想定されたため選定されている。

<工事中の影響>

パイル打込みにはハンマー方式（pile driving）と振動方式（vibratory piling）があるが、特にハンマー方式の方が、影響が大きく、作業海域近傍では聴覚障害や死亡が発生する。harbor porpoise の一時的な聴覚障害の域値（TTS : Temporary Threshold Shift）は 164dB re μ Pa2(SEL)、199.3 dB re μ Pa(Peak)との研究事例があり、ドイツでは事前の警告レベルとして以下の値を推奨している。

160dB re μ Pa2(SEL)

190 dB re μ Pa(Peak)

(出典：BSH (BUNDESAMT FÜR SEESCHIFFFAHRT UND HYDROGRAPHIE) 2012)

<稼働中の影響>

稼働に伴う影響は稼働音と海底基礎等の出現に伴う生物相の変化があげられる。稼働音については特にアザラシ類に対してマスキング効果でコミュニケーションに影響を及ぼすとされている。なお、ウィンドファーム海域では船舶の航行が制限されるため、魚類の保護海域を提供することになり、これが海産哺乳類に影響を及ぼすとも考えられている。

・実施されている調査手法の事例

BACI 法を適用するため、工事前、工事中、稼働中を対象に、以下の調査方法が実施されている。

航空機トランセクト調査：広範囲を対象

船舶トランセクト調査：ウィンドファーム近傍を対象

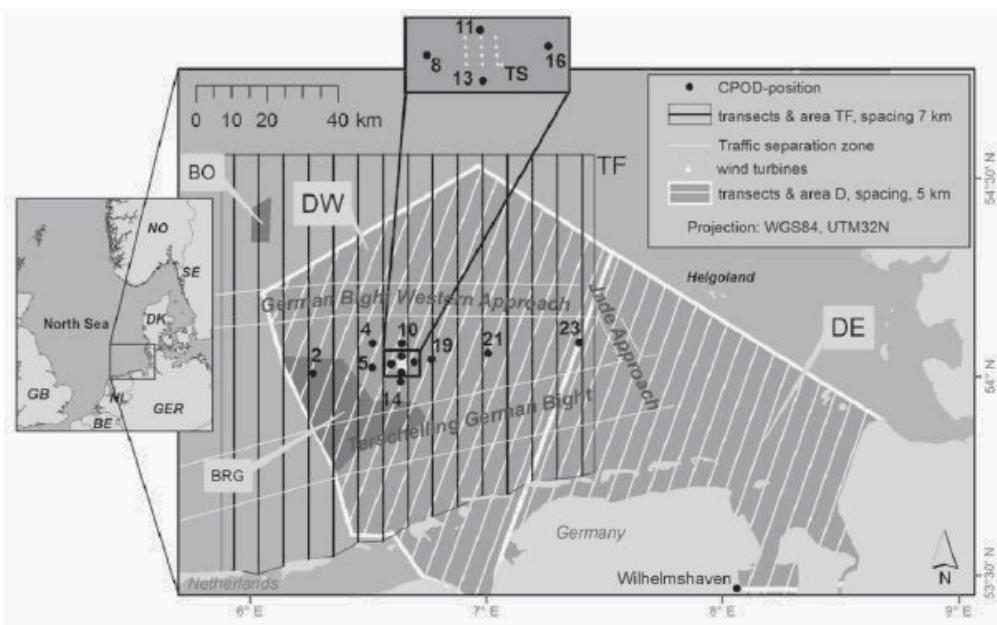
曳航式ハイドロフォン（水中聴音装置）：生物音の確認

SAM (Static Acoustic Modeling) : C-POD

以下に航空機トランセクトと SAM の調査方法の事例について示す。

[航空機トランセクト調査]

対象範囲は alpha ventus を中心に半径約 60km の範囲で、面積は 10,934k m²となっている。トランセクトは 7km 間隔で×15 ライン設定し、総延長は 1780m となっている。飛行高度は 183m、速度は 167～185km/h で、バブル窓を装備した高翼型 Partenavia P68 を採用した。調査はビューフォート階級が 3 以下、透視距離が 5km 以上の時に実施した。なお、視認できない範囲の現存量の推定は DISTANS5.0 にて推定している。



出典 : Effects of pile-driving on harbor porpoises (*Phocaea phocoena*) at the first offshore wind farm in Germany, Michael D'ahne1 et al, Environ. Res. Lett. 8 (2013)

図 3.2.5-28 調査海域（航空機トランセクト、SAM）

[SAM 調査 : C-POD]

海底に音響計測装置を設置し harbor porpoise のクリック音から存在の有無を確認する方法である（図 3.2.5-29 参照）。harbor porpoise は 20~160 kHz のクリック音を発生するのに対して、C-POD では 80~130kHz の範囲周波数を検知可能である。C-POD の設置地点はウィンドファーム周辺で 12 地点としている（図 3.2.5-28）。

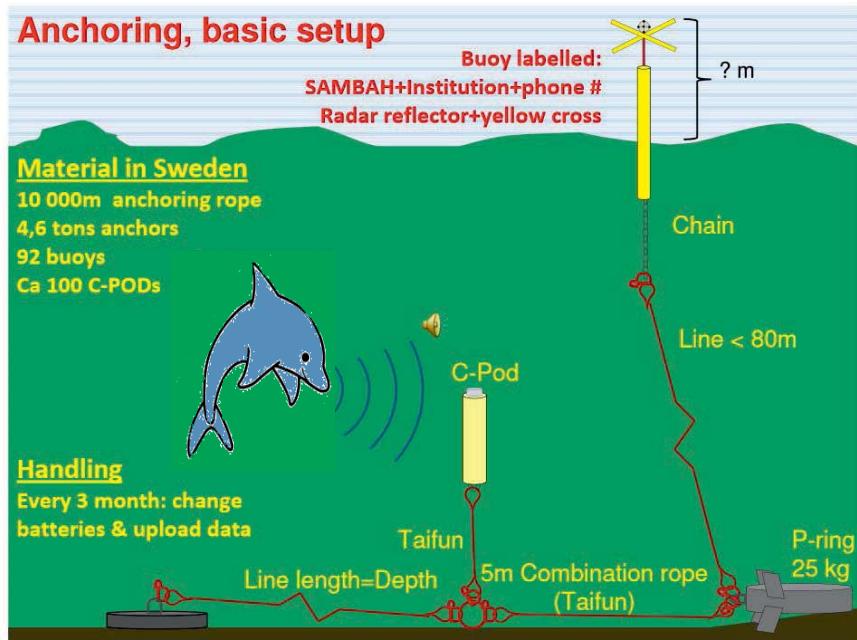


図 3.2.5-29 SAM 調査 (C-POD) の設置模式図

出典 : SAMBAH Static Acoustic Monitoring of the BAltic Harbour porpoise 2010-2014、(LIFE08 NAT/S/000261) Mats Amundin & Daniel Wennerberg Project co-ordinator/Research assistant Kolmården Wildlife Park, Sweden

【予測・評価】

<建設工事時の影響>

- ・空間的な移動

独立変数を「パイル打込みの有無」、従属変数を「10 分間の出現数 : dp10min/h」とした GAM モデルで解析した結果、C-POD を設置した 12 地点のうち 10 地点で明確なインパクトが確認された。

パイルは、はじめに海底下 9m まで 8 分から 20 分かけて振動させて貫入させ、その後油圧ハンマーで打ち込む方式である。その際の水中音は、750m 地点で 154~175dB 変化していると報告されている。保全対策としてはエアバブルカーテンが試みられた。

この 10 地点のうちパイル打込み地点から 11km 以内の地点ではマイナスのインパクト、残りの 2 地点（パイル打込み地点から 23km、50km）ではプラスのインパクトが確認された（表 3.2.3.25）。これらのことからパイル打込み地点近傍では影響があることが推測されている。また、これらのこととは航空機による空間分布調査からも、パイル打込み時には 20km 範囲内で強い回避行動が発生したこととして確認されている。

ネズミイルカの空間分布調査は 2008 年～2009 年にかけて 9 回行われ、そのうちの 2009 年 5 月 1 日の結果を図 3.2.5-30 に示す。左の図は、パイル打ち込みの 1 ヶ月前の調査結果を示し、ネズミイルカは均等に分布している、右の図は、パイル打ち込み時（3 時間 23 分）の調査結果を示しており、調査エリアの西側および北側に高い密度で分布している。工事エリア周辺では分布は見られず、最も近いところの確認場所はパイル工事場所の西側 20km である。

回避行動がどの程度の距離まで起こるかを解析した結果は図 3.2.5-31 に示すとおりで、これによればパイル打込み地点から 23km 以遠になると回避行動がなくなる傾向が確認されている。

表 3.2.5-25 GMA モデルの解析結果

Table 2. Summary of the GAM-models, the intercept represents the modelled mean of the *dp10min/h* and the intercept of singular variables. n.s. = not significant, n = number of samples, Expl. dev. = explained deviance.

Position	Distance to piling site <i>min-max</i> (km)	n	Intercept	Intercept <i>pile-driving</i>	Effect	p <i>pile- driving</i>	p <i>year</i>	p <i>month</i>	p <i>hour</i>	Expl. dev. (%)
2	25.2–26	6 848	0.99	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	<0.001	<0.001	8.23
4	8–10.8	13 315	0.88	-0.42	—	<0.001	<0.001	<0.001	0.025	10.87
5	7.4–9.8	12 039	-0.66	-1.24	—	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	17.08
8	2.3–4.6	12 838	0.42	-1.36	—	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	10.54
10	3.0–4.2	5 602	1.08	-0.61	n.s.	n.s.	<0.001	<0.001	<0.001	19.84
11	0.5–2.5	14 226	0.00	-1.16	—	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	13.92
13	2.3–4.7	12 823	-0.55	-0.86	—	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	6.46
14	4.5–7.0	12 846	2.22	-0.81	—	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	8.90
16	2.5–4.5	11 286	0.76	-1.67	—	<0.001	<0.001	<0.001	0.003	20.07
19	7.2–9.2	14 970	1.28	-1.51	—	<0.001	<0.001	<0.001	0.095	16.81
21	23–25	7 283	-1.81	0.25	+	0.005	<0.001	<0.001	<0.001	13.81
23	48.7–50.5	9 406	-0.62	-0.54	+	<0.001	n.s.	<0.001	<0.001	3.84

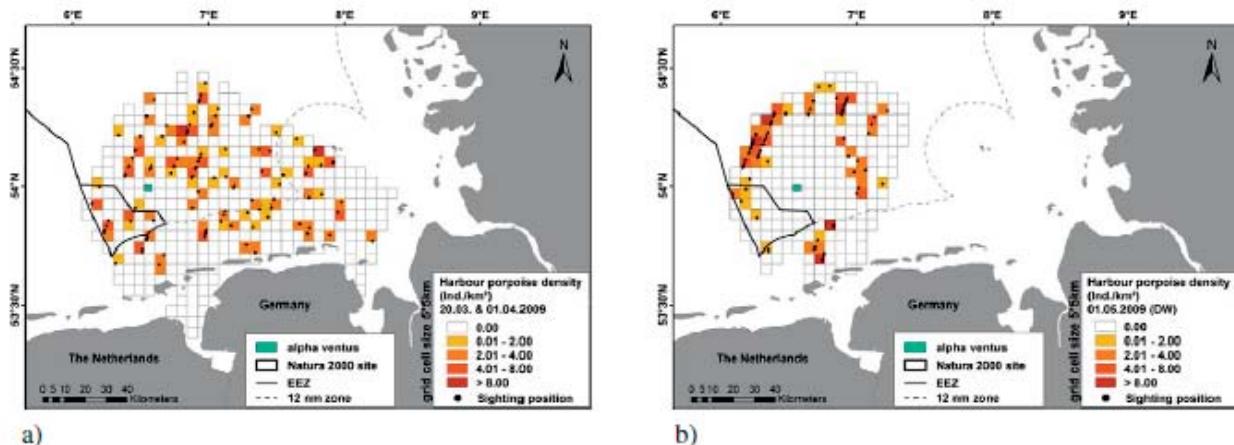
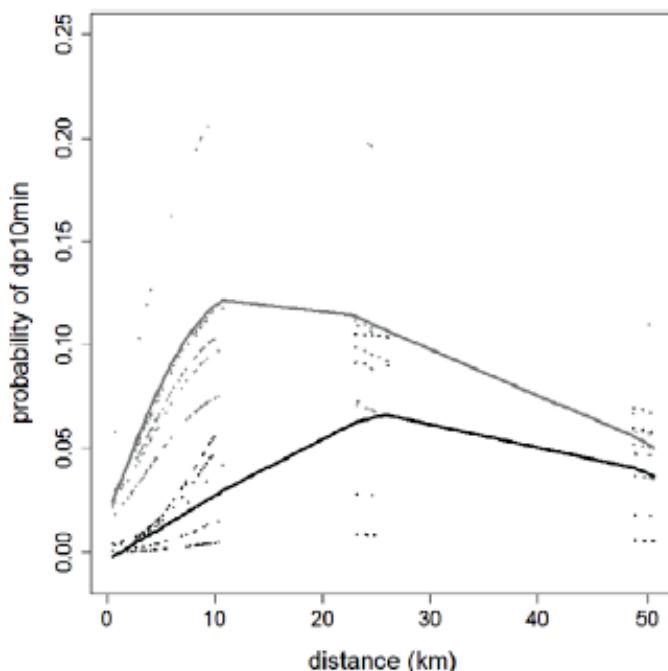


Figure 3. Spatial distribution of harbour porpoise density and sightings. (a) Pre-pile-driving in March/April 2009 and (b) during pile-driving in DW (1st May 2009; DE was not surveyed during pile-driving at that particular time). Projection: WGS84, UTM Zone 32N.

図 3.2.5-30 ネズミイルカの空間分布調査の結果（左：パイル打ち込み前、右：パイル打ち込み時）



出典 : Effects of pile-driving on harbor porpoises (*Phocaea phocoena*) at the first offshore wind farm in Germany, Michael D'ahne1 et al, Environ. Res. Lett. 8 (2013)

図 3.2.5-31 回避行動が発生する距離の検討結果

- ・一時的な移動

パイ爾打込み以降に harbor porpoise が戻ってくるまでの時間 WT (Waiting Time) を検討している。WT は地点により異なるが、最小値は 81 分、最大値は 141.1 時間、中央値は 16.8 時間であった（図 3.2.5-32）。ちなみにパイ爾打込みがない場合には WT は 0.8~1.1 時間である。また、パイ爾打込み時間が長ければ長いほど WT が長くなり、パイ爾打込み時間が短いと harbor porpoise は音を回避するための十分な距離にまで到達することができない。

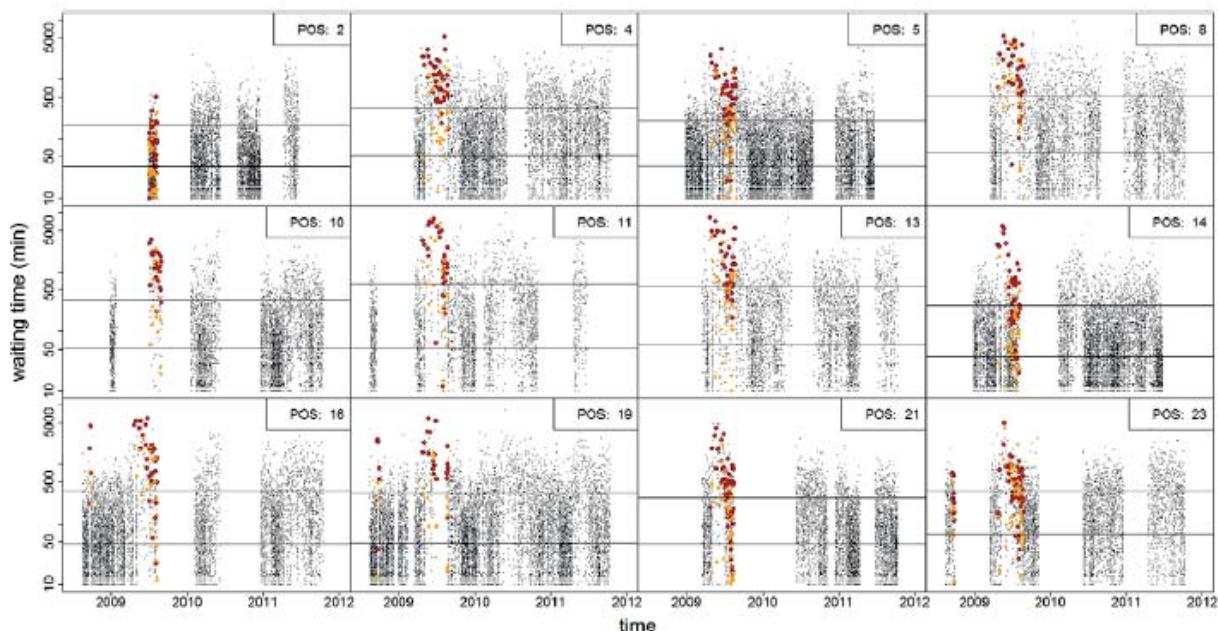


Figure 7. Analysis of waiting times (WT) for each C-POD-position. Grey dots mark WT without pile-driving and red dots mark 1st WT after pile-driving was commenced, orange dots are 2nd WT after pile-driving. The horizontal black line and grey line indicate respectively the median and the median + standard deviation of all WT at that position. Y-axis is log scaled.

出典 : Effects of pile-driving on harbor porpoises (*Phocaea phocoena*) at the first offshore wind farm in Germany, Michael Dähne1 et al, Environ. Res. Lett. 8 (2013)

図 3.2.5-32 C-POD の結果に基づく 12 地点のネズミイルカが戻ってくるまでの時間

- ・参考：嫌忌音の利用

嫌忌音によりパイ爾打込み地点から harbor porpoise を事前に遠ざける方法が検討された。その結果、seal scares（アザラシから海産物の被害を防止するために、大きな音を出す装置）が harbor porpoise にも有効なことが分かった。この音の到達距離は 2.4~7.5km である。

<稼働時の影響>

2008 年～2012 年の間に 19 回の航空機トランセクト調査を実施し、その範囲は合計で 23,338 km²、その中で 2,392 個体（内 107 個体は幼獣）の harbor porpoise を確認し、密度分布などを掌握した。図 3.2.5-33 は生息密度の時系列変化で生息密度は 2009 年のウィンドファーム建設時が最も少ないことが確認された。また、生息密度の季節変化も確認できた。

周辺海域の統計データからは 2005 年以降 alpha ventus の建設・稼働前までは harbor porpoise の

増加傾向が確認されているが、alpha ventus のような小規模なウインドファーム建設が影響しているとは考えられず、先の増加が自然増によるもの、あるいは 2010~2012 年に近傍で開発された BARD OFFSHORE 1 や BWII など、さらには 2009 年に建設された BorWin alpha converter platform が影響している可能性があることも示唆している。

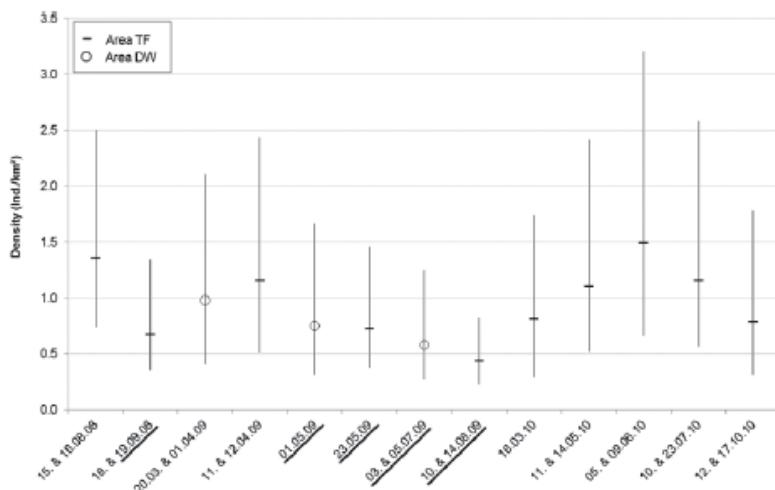


Figure 4. Estimated density of harbour porpoise per survey in the study areas TF and DW. Error bars show 95% confidence limits. Area TF is indicated by short dashes for the estimated density, area DW is represented by open circles. Dates of surveys conducted during pile-driving or within 48 h following pile-driving at AV are underlined in black.

出典：Effects of pile-driving on harbor porpoises (*Phocaea phocoena*) at the first offshore wind farm in Germany, Michael D „ ahne1 et al, Environ. Res. Lett. 8 (2013)

図 3.2.5-33 harbor porpoise の生息密度の時系列変化

⑧ 動物（鳥類）

表 3.2.5-26 鳥類に関する調査・予測・評価手法について

項目		内容	備考
調査	調査対象項目	<ul style="list-style-type: none"> ◎工事による影響：工事に伴う騒音等により生息環境に及ぼす影響 ◎施設の稼働による影響：施設の存在・稼働に伴い、飛行経路の変更、休息地や採餌場に及ぼす影響 	
	調査時期	予測時期（工事時、存在・稼働時）を想定した時期	
	調査手法	<ul style="list-style-type: none"> ◎既往調査資料等による定性的手法 ◎航空機、船舶、フェリー、陸上からの目視観測等 ◎レーダーによる観測 	
予測	予測時期	工事時、存在・稼働時	
	予測手法	<ul style="list-style-type: none"> ◎現地調査結果および既往調査資料等による定性的手法 ◎風車への衝突リスク（衝突予測モデル）による定量的な予測 ◎飛翔ルートの妨害（障壁効果）及び休息場・採餌場として利用している鳥類への定性的な予測 	
評価	評価手法	<ul style="list-style-type: none"> ◎現地調査、既往知見等に基づく定性的手法 ◎予測結果による総合的な評価 	

【概要】

鳥類については、14事例のうちすべてが評価項目に取り上げている。工事中の騒音、工事船舶の航行、および稼働時の生息環境の変化、障壁影響およびバードストライクによる影響の可能性があるため選定している。

調査手法は、航空機トランセクト、船舶トランセクト、目視、レーダー調査が実施されている。

予測については、14事例中、定性的予測が13事例、定量的予測が1事例である。定性予測は、施設稼働に伴う生息環境、飛行ルートへの影響を現地観測結果等から予測しており、定量的予測は、衝突リスクをモデルにより予測している。なお、他の文献（野鳥と洋上風力発電、日本野鳥の会 2011年3月）によれば、衝突リスクは、モデルを用いて定量的に評価する場合の方が多いと記載されている。英国の洋上風力のリンクス、グレーターガバート、レース・バンク、サネットのプロジェクトでは、モデルによる定量評価が行われている。

評価については、建設工事中と稼働中の影響を評価している。建設工事中の影響は、工事騒音、船舶航行、底泥の拡散、生息場の移動についていずれも軽微と評価されている。稼働中の影響は、生息場の移動、障壁影響、海鳥と小型の陸鳥のバードストライクに関しては軽微と評価され、大型の陸鳥のバードストライクに関しては中程度の影響があると評価されている。

【調査】

・項目の選定理由

計画海域の周辺が貴重な鳥類が分布することから、ウィンドファームが鳥類に及ぼす影響を把握するために選定している。工事中と稼働中の評価要因を以下のとおり設定している。

＜工事中の影響＞

- ・建設工事中の騒音
- ・工事船舶の航行
- ・海底泥の拡散
- ・生息場所の移動

＜稼働中の影響＞

- ・生息場所の移動
- ・生息環境の変化
- ・障壁影響
- ・バードストライク（海鳥、陸鳥）

・実施されている調査手法の事例

既往文献資料を活用するとともに、これらのデータを補完または確認するために、以下の調査を実施している。

- ・航空機トランセクト調査
- ・船舶トランセクト調査
- ・目視観察とレーダ調査

以下に各調査方法の概要を示す。

[航空機トランセクト調査]

2008年12月～2009年8月にかけて5回の調査を実施している。調査は高翼の双発機（Patenavia P-68）でバブル窓を装着している機種を利用した（図3.2.5-34）。飛行高度は76m、航行速度は185km/hで、ビューフォート階級3以下、透視度5km以上の時を対象に実施している。航空機による調査模式図は図3.2.5-35に示すとおりで、対象範囲は図3.2.5-36に示すとおりである。

なお、未確認の範囲における個体数については、海域の環境条件などをパラメータとしたに予測モデルで推定している。



Figure 3-4 Survey plane Partenavia P68.



Figure 3-5 Aerial survey: measuring the angle to the birds by clinometer.

図 3.2.5-34 調査に使用した航空機

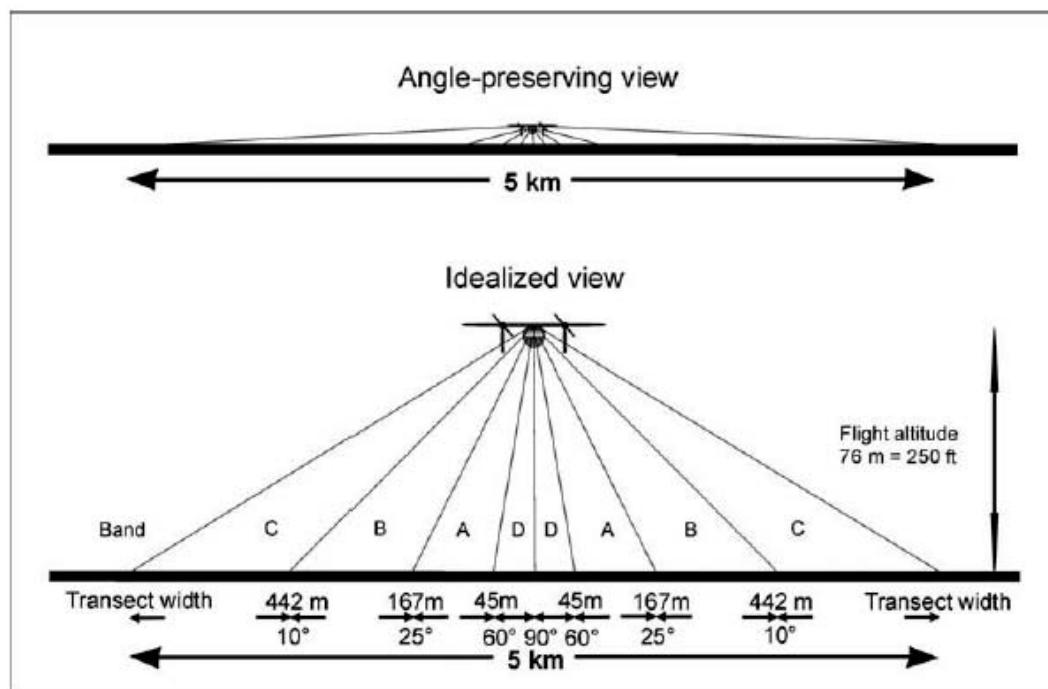
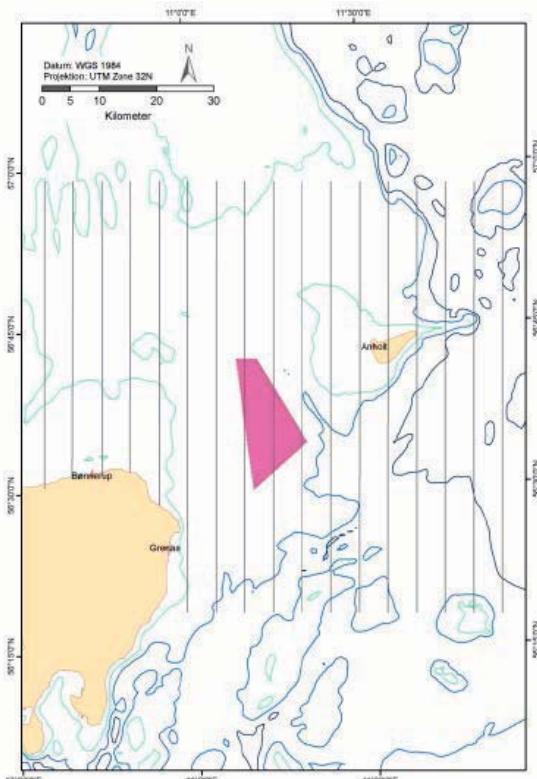


Figure 3-3. Aerial survey method for counting birds, angles and corresponding band widths.

Band C extends to 1000 m perpendicular distance.

出典 : Anholt Offshore Wind Farm、Energinet.dk、Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図 3.2.5-35 航空機による調査模式図



出典 : Anholt Offshore Wind Farm, Energinet.dk, Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図 3.2.5-36 航空機によるライントランセクト調査範囲

[船舶トランセクト調査]

船舶調査は航空機調査の補完的な意味合いと、航空機調査では確認ができない種類の確認など、より詳細な調査を行うことを目的としている。トランセクト幅は船舶の片舷に 300m の範囲を設定し図 3.2.5-37 のような範囲の区分を行っている。計測間隔は 1 分～10 分間の範囲で設定し、飛翔個体についてはスナップショット法を採用している。船舶の航行速度は 10 ノットでビューフォート階級 4 以下、視程 3km 以上の時を対象に実施している。調査対象範囲は図 3.2.5-38 に示すとおり。

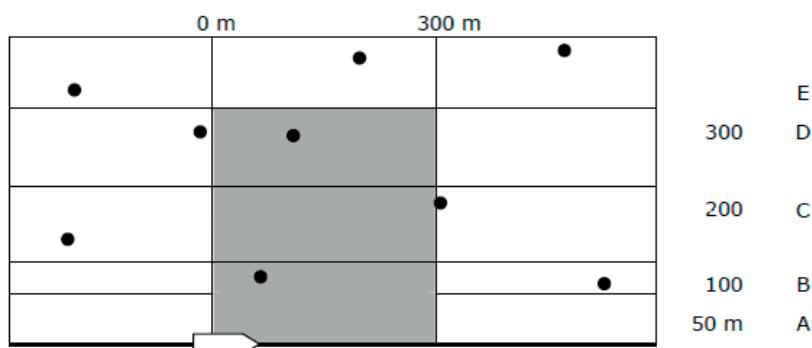


Figure 3-8 Scheme of a strip transect survey by ship speed of 10 kn (flying birds in grey areas at the time of the snapshot are counted as 'in transect', all other flying birds are counted as 'not in transect')

図 3.2.5-37 船舶によるトランセクト調査方法

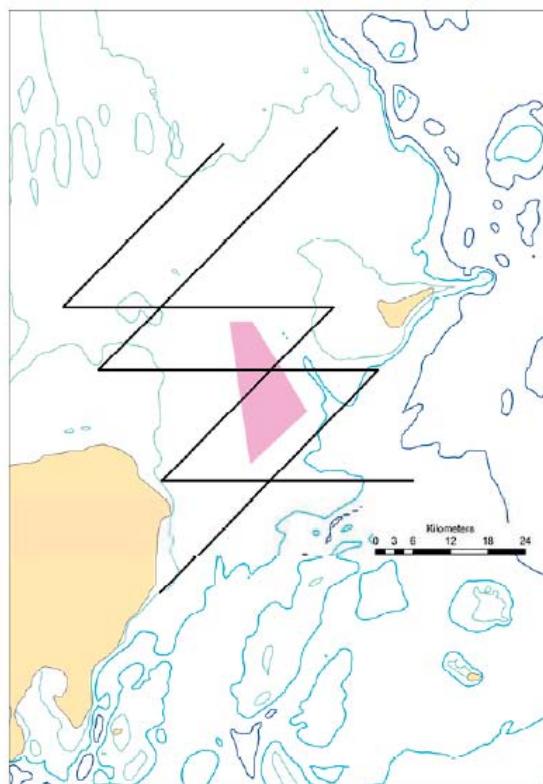


図 3.2.5-38 船舶トランセクト調査の範囲

[目視観察とレーダー調査]

計画海域の両側の 2 地点（陸上）に船舶レーダーを設置するとともに、同じ地点にて目視観察を実施している（図 3.2.5-39、図 3.2.5-40）。目視観察結果はレーダー調査における種類の決定に利用している。レーダーは X-バンドを利用した標準的な船舶レーダーで、その仕様は表 3.2.5-8-1 に示すとおり。



Figure 3-10 The location of the two radar stations (Source: Google Earth).

出典 : Anholt Offshore Wind Farm, Energinet.dk, Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図 3.2.5-39 レーダーと目視観察地点



Figure 3-11 The radar installation at Anholt Harbour and Gjerrild Klint

出典 : Anholt Offshore Wind Farm, Energinet.dk, Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図 3.2.5-40 レーダの設置状況と目視観察状況

表 3.2.5-27 レーダの仕様

Table 3-2 Specifications of radar devices used.

Brand	Furuno
Type	FAR2127
Power output [kW]	25kW
Frequency [MHz]/wavelength [mm]	9.4 GHz (X-band)
Horizontal angle of radar beam [°]	1 degree
Vertical angle of radar beam [°]	10 degree
Rotational speed [min ⁻¹]	24 rpm
Antenna length [mm]	2400

レーダ調査で採用したソフトウェアは以下のとおり。

- RadCtrl2/PolScan : レーダ制御とデータ収集
- BirdWatch/BirdWatchShow : オンラインの検証データ収集システム
- BirdTrack : 鳥類奇跡の判別と抽出システム

[参考 : バードストライク]

バードストライクに関しては特に現地調査は実施しておらず、上記の現地調査結果に既往の知見等を対応させ評価している。

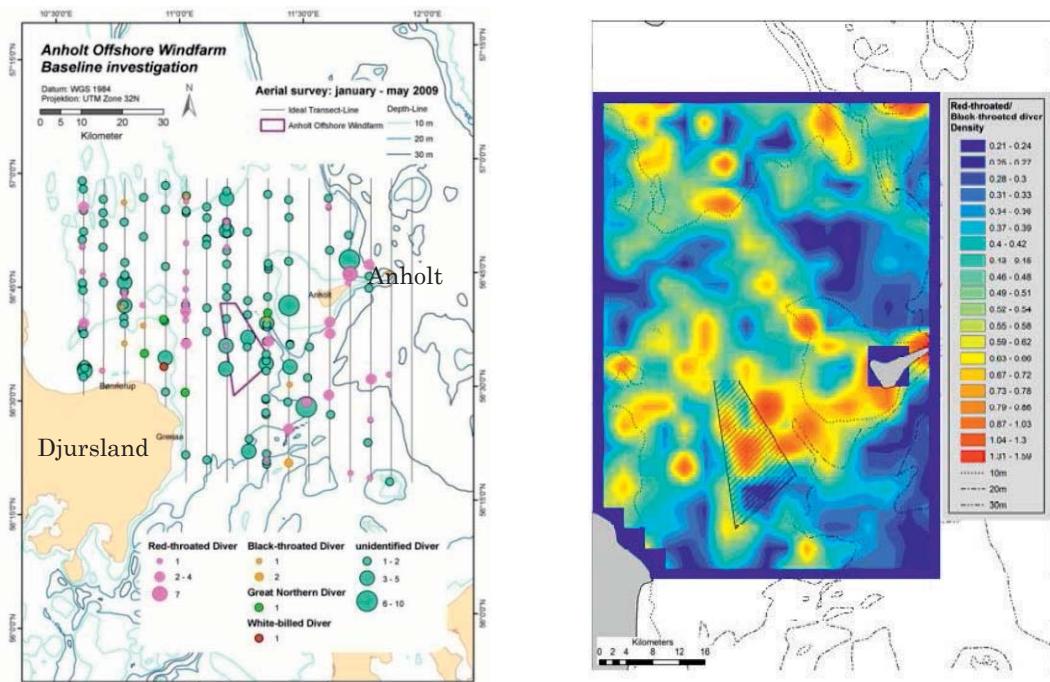
<調査結果>

以下に現地調査結果の一例を示す。

[航空機トランセクト調査と船舶調査結果]

2009年に実施した航空機による事前調査のアビ科 (Red-throated, Black-throated, White-billed, Great Northern Diver) の結果を示す。ウィンドファームのエリアを含む Anholt と Djursland のゾーンで密度の増加が大きいことが確認されている (図 3.2.5-41 左)。

調査結果を元に密度分布を算定した結果を図 3.2.5-41 (右) に示す。ウィンドファームの中心から Anholt の東側の連続する範囲で中～高密度の分布が確認できる。



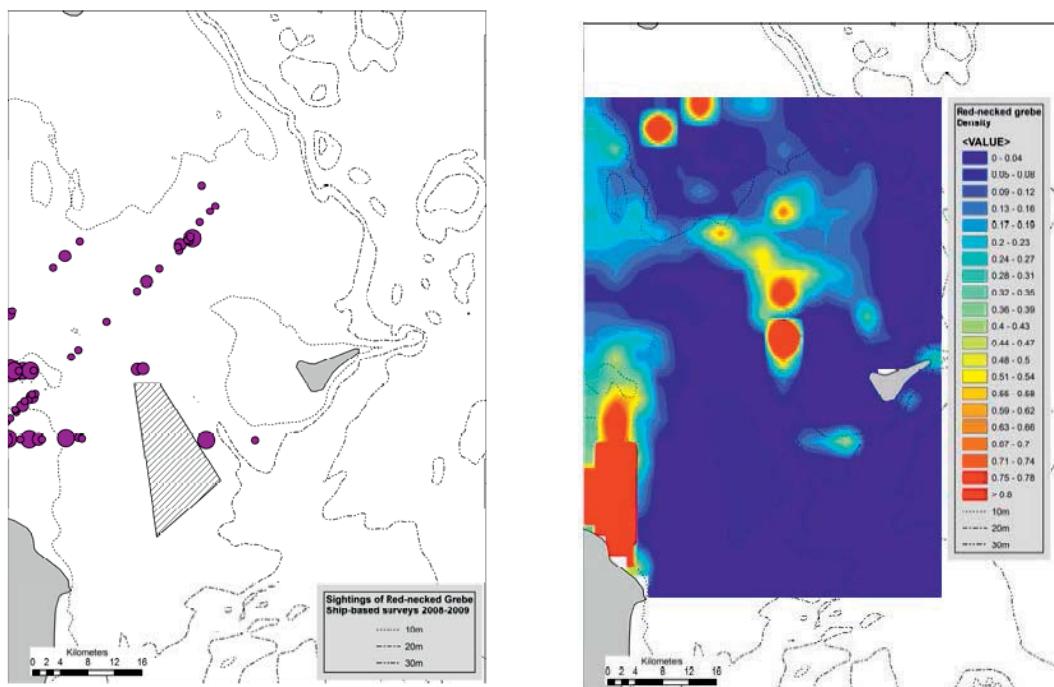
出典 : Anholt Offshore Wind Farm、Energinet.dk、Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図 3.2.5-41 航空機による事前調査結果（左）と調査結果から算定した生息密度（右）

図 3.2.5-42 (左) は、冬季の船舶調査により、カイツブリ (Red-necked Grebes) が、ウインドファームの北部および西部の領域において低密度で分布している状況を示している。

右図は、越冬しているカイツブリの平均密度の分布を空間モデルにより示しており、赤色のパッチの部分は、Djursland の北部、Laso の南部、Anholt の北西部の浅海域の緩い傾斜と関連している。

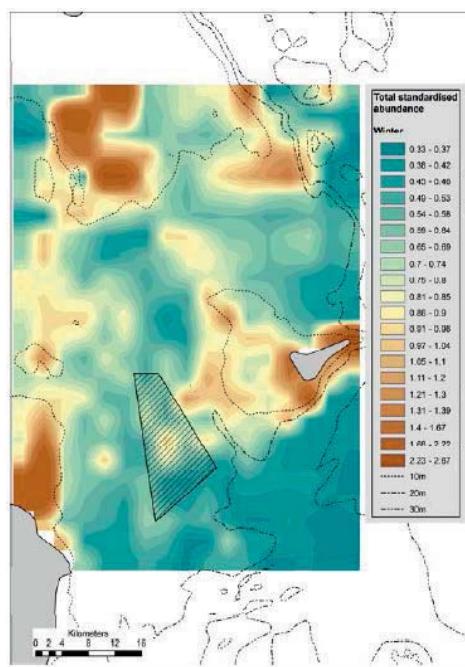
このモデルの結果、ウインドファームを含め 15m より深いエリアは、冬季の間、カイツブリは、ほとんどいないことを示している。



出典 : Anholt Offshore Wind Farm, Energinet.dk, Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology, October 2009

図 3.2.5-42 船舶による事前調査結果（左）と調査結果から算定した生息密度（右）

種の密度モデルに基づき、冬季の全種類の生息密度算定結果の例であり、密度は 0 から 1 に標準化されている（図 3.2.5-43 参照）。ウインドファームの場所は、アビにとって重要ではあるけれど、生息密度は比較的低いことを示している。

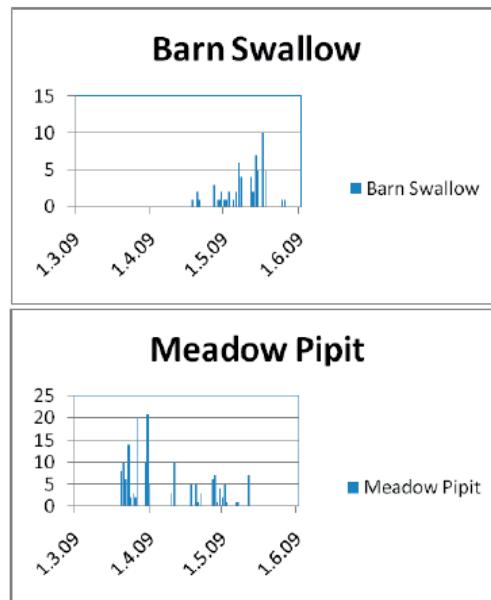


出典 : Anholt Offshore Wind Farm、Energinet.dk、Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図 3.2.5-43 全種類の生息密度算定結果（基準化値）

[目視観察とレーダー調査結果]

早春の3月及び4月はじめは、主要な渡りの時期である。この間、多くの種類の鳥が姿を現す。図は、春の渡りの時期以降（3月、4月、5月、6月）に実施した目視によるツバメとマキバタヒバリの観察例である。

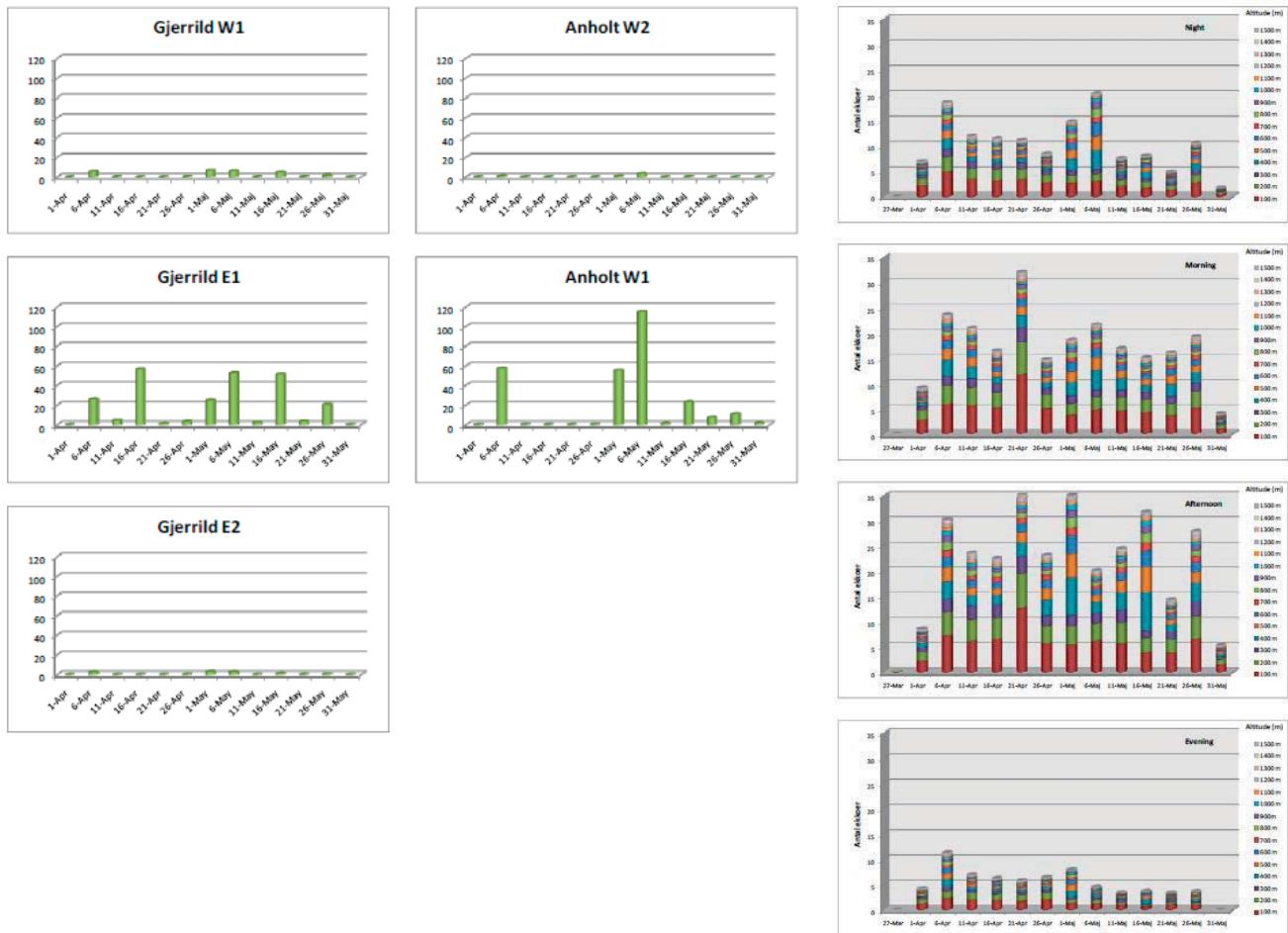


出典 : Anholt Offshore Wind Farm、Energinet.dk、Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図 3.2.5-44 目視観察結果（日単位の個体数）

図 3.2.5-45 (左、中央) は、Djursland と Anholt の間の渡りのルートに沿ってレーダ調査を実施し、5 地点において 4 月～5 月の 2 ヶ月を対象に 5 日ごとに通過個体数を集計してグラフ化した例である。

図 3.2.5-45 (右) は、レーダ調査により、結果を高度別 (1500m まで)、時間帯別 (夜、午前、午後、夕方) にグラフ化した事例である。この例では 100m の高度ごとに区分しており、概ね 200m 以下に全個体数の 1/4 が分布していることがわかる。



出典 : Anholt Offshore Wind Farm, Energinet.dk, Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

図 3.2.5-45 レーダ調査結果 (左、中央 : 海峡の通過個体数、右 : 高度別個体数)

【予測】

予測については、ほとんどの事例が現地観測結果等から推定した定性的な予測であり、定量的予測に事例は少ない。

定性予測は、施設稼働に伴う生息環境、飛翔ルートの妨害（障壁影響）及び休息場・採餌場として利用している鳥類への攪乱に対する影響事象を現地調査から予測（Cape Wind、Egmond and Zee、Barrow、HornsRev1、Nysted）している事例や、また、施設存在による直接的・副次的、短期的・長期的な個体への影響等を既存資料及び調査結果から定性的に予測、渡り鳥については特定種をターゲットに既往資料を基に影響を予測（London Array）している事例が見られた。

また、工事中に関しては既往知見に基づき棲息鳥類の感受性の程度に関する情報ならびに工事に伴うえさ場環境の変化に関する情報を収集し、生息場の移動可能性やえさ場環境の持続性を検討している。稼働中に関しては餌場環境情報、障壁影響に関する既往情報、バードストライクに関する既往情報を収集し当該事例を対象に検討している（Anholt）。

定量予測については、注目種の衝突リスクについてモデルを用いて予測している。以下に、London Array 洋上風力の定量予測の事例を示す。注目する 7 種類（アビ、カモメ、アジサシ、カツオドリ等）の鳥類について、ウインドファーム内の平均個体数、飛翔高度のデータ等から衝突回避率と死亡率の増加を推定している。

予測結果のまとめを表 3.2.5-28 に、アビの衝突リスク評価の事例を図 3.2.5-46 に示す。一般に鳥の衝突を避けるためには、高い回避率が要求される。アビについては、99.6～99.9% という数値が適用されているが、その根拠は、Garthe and Huppop (2004) の研究による。

アビについては比較的高い衝突リスクにあると考えられている。そのため、リスクを低減するために事業エリアの縮小、工事期間の時期をアビの活動時期からこと、航路標識灯、航空障害灯などの鳥を誘引する光を最小限にするなどの環境保全措置が採られた。

表 3.2.5-28 注目種別の衝突リスクの予測

Table 7.12 Collision risk predictions for key species at the London Array Offshore wind farm.

Species	Mean count of flying birds (WF+1km)	% flying at rotor height	Background annual mortality rate *	Threshold avoidance rate to give significant effect
Red-throated diver	48.9	11% (flock flight ht data)	16%	99.9%
--	48.9	4.5% (individual flight ht data)	16%	99.8%
--	48.9	2.5% (individual flight ht data excluding flock of 4,000)	16%	99.6%
Black-throated diver	0.2	11%	15%	99.9%
Herring gull	168	27%	7%	99.8%
Lesser black-backed gull	203	38%	7%	99.9%
Great black-backed gull	27.9	34%	7%	99.9%
Common tern	50.2	9%	12%	99.8%
Gannet	22.5	15%	6%	99.8%
Sandwich tern	22.8	13%	12%	99.4%

Notes:

* from Garthe and Huppop (2004)

出典：Environmental statement, London Array limited, 2005

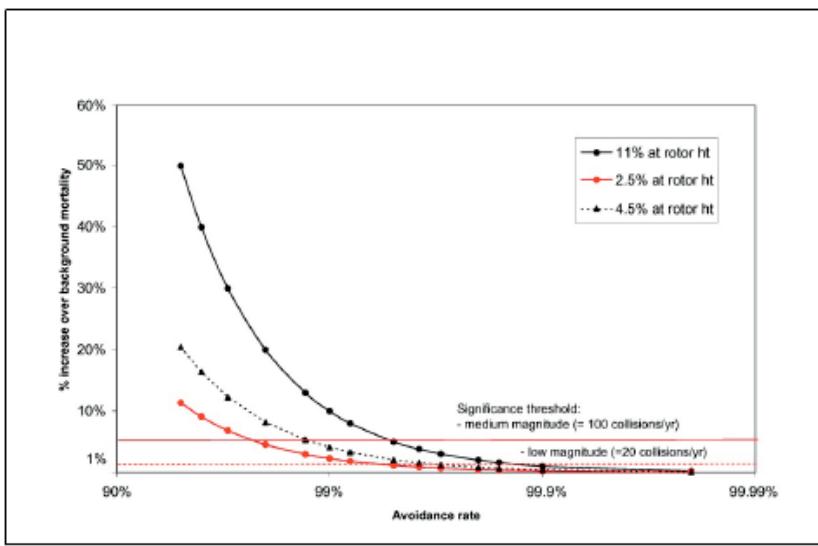


Figure 7.58 Diver collision risk assessment: effect of avoidance rate and the proportion flying at rotor height.

出典 : Environmental statement, London Array limited, 2005

図 3.2.5-46 アビの衝突リスク評価の例

【評価】

評価については、多くの事例で現地調査結果と既往知見に基づき定性的に評価している。以下に Anholt の事例と、鳥の衝突回避について定量予測をもとに評価している London Array の事例を示す。Anholt の評価基準を表 3.2.5-29 (1) のとおり影響の強度、規模、期間、重要度について区分設定し、建設工事中と稼働中の影響を評価している。評価結果を表 3.2.5-30 (2)、(3)に示す。建設工事中の影響については工事騒音、船舶航行、底泥の拡散、生息場の移動のいずれも軽微と評価された。稼働中の影響については、生息場の移動、障壁影響、海鳥と小型の陸鳥のバードストライクに関しては軽微と評価され、大型の陸鳥のバードストライクに関しては中程度の影響があると評価されている。

表 3.2.5-30 にアビの飛翔高度と衝突回避率の関係から衝突リスクを評価している。飛翔高度がハブ高さ 11%、かつ回避率が低い場合 (95%) で、リスクは高いと評価されている。それ以外の高度が低い場合、あるいは回避率が高い場合は、リスクは中程度以下の影響となっている。最終的には、ほかの鳥についても同様に評価し、総合的に重要な影響はないとしている。

表 3.2.5-29 (1) 環境影響評価基準

Table 3-4 Criteria used in the environmental impact assessment for the off-shore wind park.

Intensity of effect	Scale of effect	Duration of effect	Overall significance of impact ¹
No	Local	Short-term	No impact
Minor	Regional	Medium-term	Minor impact
Medium	National	Long-term	Moderate impact
Large	Transboundary		Significant impact

¹: Evaluation of overall significance of impact includes an evaluation of the variables shown and an evaluation of the sensitivity of the resource/receptor that is assessed.

表 3.2.5-29 (2) 建設工事中の評価結果

Table 3-5 Summary of impact on birds during construction.

Impact	Intensity of effect	Scale/geographical extent of effect	Duration of effect	Overall significance of impact
Construction noise	Minor	Local	Medium-term	Minor
Traffic	Minor	Local	Medium-term	Minor
Sediment dispersal	Minor	Local	Short-term	Minor
Habitat displacement	Minor	Local	Long-term	Minor

表 3.2.5-29 (3) 稼働中の評価結果

Table 3-7. Summary of impact on birds during operation.

Impact	Intensity of effect	Scale/geographical extent of effect	Duration of effect	Overall significance of impact
Habitat displacement	Minor	Local	Long-term	Minor
Habitat change	Negligible	Local	Long-term	Negligible
Barrier effects	Minor	Transboundary	Long-term	Minor
Collision risks – waterbirds and smaller landbird species	Minor	Transboundary	Long-term	Minor
Collision risks – large landbird species	Medium	Transboundary	Long-term	Moderate

出典 : Anholt Offshore Wind Farm、Energinet.dk、Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology. October 2009

表 3.2.5-30 衝突回避率の評価例 (アビ)

Table 7.13 Risk assessment for collision risk for red-throated divers at the proposed London Array Offshore Wind Farm.

% Flights at Rotor Height:			
Avoidance Rate	11%	4.5%	2.5%
95%	High	Medium	Medium
99%	Medium	Low	Low
99.5%	Low	Low	Low
99.9%	Negligible	Negligible	Negligible

Notes:

Magnitude in each cell is described, colour of cell represents significance level (green = not significant, amber = potentially significant, red = significant).

出典 : Environmental statement, London Array limited, 2005

⑨ 植物（海草藻類）

表 3.2.5-31 海草藻類に関する調査・予測・評価手法について

項目	内容	備考
調査	◎工事による影響：工事に伴う濁り、堆積、掘削に伴う生育環境に及ぼす影響 ◎施設の存在による影響：施設の存在に伴う生育場の消失および堆積物の侵食、改変等による生息環境への影響	
	調査時期 予測時期（工事時、存在時）を想定した時期	
	調査手法 ◎既往調査資料等による定性的手法 ◎ビデオ映像調査、採泥器によるサンプリング	
予測	予測時期 工事時、存在時	
	予測手法 ◎現地調査結果および既往調査資料等による定性的手法 ◎工事の濁りについて堆積物の移動範囲を予測することにより生育環境への影響を定性的に予測	
評価	評価手法 ◎現地調査、既往知見等に基づく定性的手法	

【概要】

海藻草類については 14 事例のうち 7 事例が取り上げている。なお、植物プランクトンや藻場の評価事例は少ない。海底ケーブル敷設工事に伴う、濁りの発生や、施設の存在により生育場の消失が海域植物に与える影響が懸念されるため影響評価項目に選定されている。

現地調査は、サイドスキャッソナーによる海底調査、ダイバーによる目視観察や TV システム等観察、グラブ採泥器によるサンプリング調査が実施されている。

予測は 7 事例のうち全てにおいて定性的な予測である。浸食などによる生育環境への影響を現地調査結果等から定性的に予測している。評価については濁りの拡散シミュレーション結果と生息条件、現地調査結果と比較して評価している。

【調査】

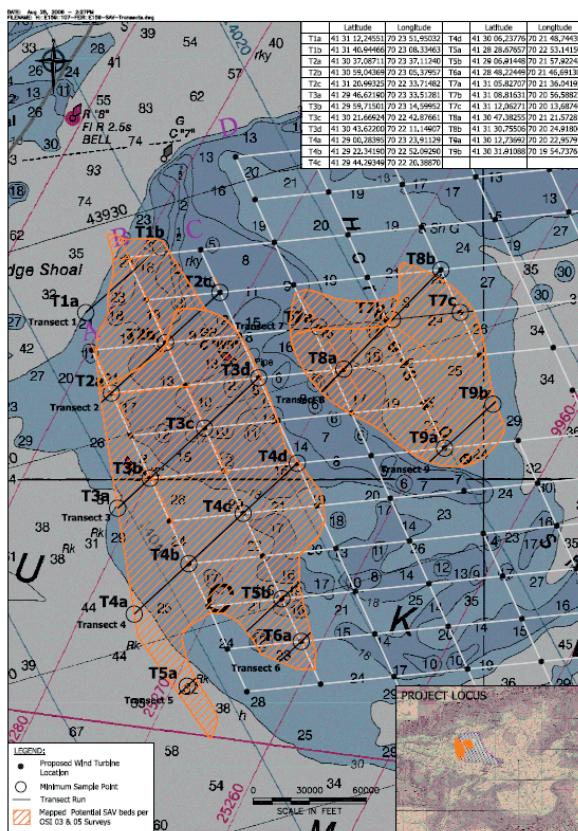
・項目の選定理由

当該海域の北方にアマモの繁殖地があるため、海底ケーブル（サイト内と連系ケーブル）の敷設に伴う海底泥の拡散が影響する可能性がある。

・実施されている調査手法の事例

<調査方法>

既往データの結果を補完するため、サイドスキャンソナーを利用した海底調査を実施している。ウインドファーム近傍を対象とした調査海域は図 3.2.5-47 に示しとおりで、対象海域内に 9 本のトランセクトラインを設定している。



出典 : Submerged aquatic vegetation investigation, cape wind energy project, August 23.2006

図 3.2.5-47 トランセクト調査位置とポイント調査地点の配置

各トランセクトラインには風車設置地点を考慮して 1 ~ 4 地点の調査ポイントが設定されており、これらの地点ではダイバーTV システムが適用された (図 3.2.5-48)。カメラの撮影範囲は 3 × 3 フィートで、撮影時間は 5 分間としている。

カメラを回収した後、撮影結果の検証のために VanVeen Grab によるサンプリングを実施している (図 3.2.5-49)。ダイバーによる目視観察も海底ケーブルルートを含む 4 地点で実施されている。調査は対象地点で 10 フィート毎に 100 フィートまで設定した同心円上の海草等の出現状況を確認する方法で、写真撮影も併用している。



Figure 2. Simrad OE9030/9031 Diver Television System

出典 : Submerged aquatic vegetation investigation, cape wind energy project, August 23.2006

図 3.2.5-48 ダイバーTV システム

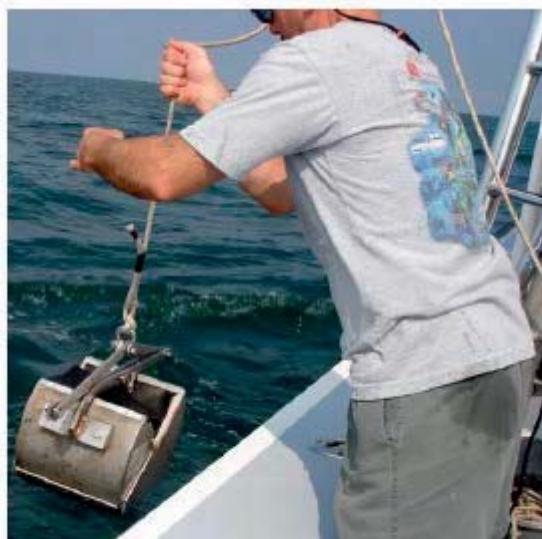


Figure 3. Deployment of VanVeen Grab from the deck of the observation platform

出典 : Submerged aquatic vegetation investigation, cape wind energy project, August 23.2006

図 3.2.5-49 VanVeen Grab によるサンプリング状況

<調査結果>

VanVeen Grab によるサンプリング結果を表 3.2.5-32 に示す。

表 3.2.5-32 VanVeen Grab によるサンプリング結果

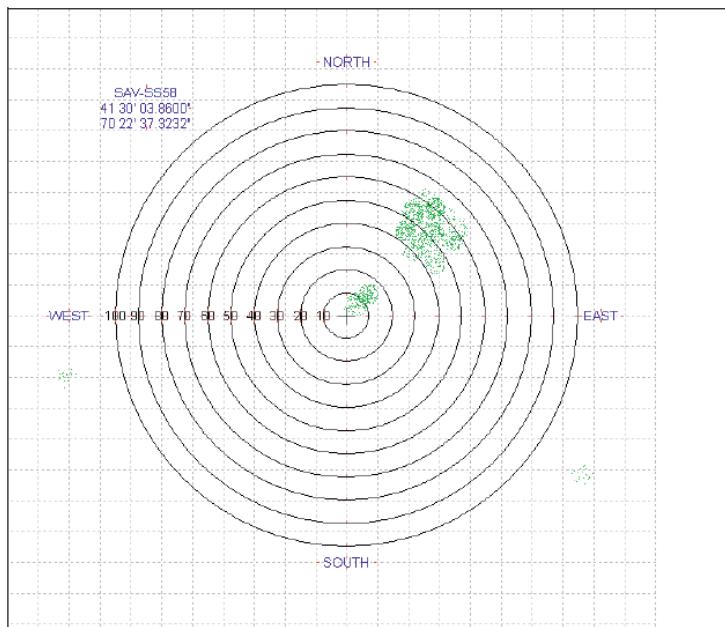
TABLE 1: Species Observed

Location	Depth in Feet*	Species Present
T1A	NS	
T1B	26	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i> , un-identified yellow sponge
T2A	24	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i> , <i>U. lactuca</i> ,
T2B	15	<i>Z. marina</i> , <i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i> , <i>U. lactuca</i>
T2C	15	<i>C. fragile</i> , <i>U. lactuca</i> , <i>G. takvahiae</i>
T3A	NS	
T3B	26	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>
T3C	26	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i> , <i>S. filipendula</i>
T3D	14	<i>C. fragile</i> , <i>S. filipendula</i>
T4A	42	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i> , un-identified yellow sponge
T4B	25	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>
T4C	23	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>
T4D	20	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>
T5A	43	<i>C. fragile</i> , un-identified yellow sponge
T5B	23	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>
T6A	35	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>
T7A	18	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>
T7B	28	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>
T7C	28	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>
T8A	15	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>
T8B	35	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i> , <i>G. takvahiae</i>
T9A	23	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i> , un-identified yellow sponge
T9B	32	<i>C. fragile</i> , <i>G. americana</i>

* Depth reported is as collected on the RV Eastwind

NS = Not Sampled

ダイバーによる目視観測結果の一例を図 3.2.5-50～図 3.2.5-52 に示す。

Figure 1. Location and Extent of Eelgrass (*Zostera marina*) at AV-SS58

出典 : Cape wind Submerged aquatic vegetation diver survey, July 2003

図 3.2.5-50 ダイバーによるアマモの確認結果の例

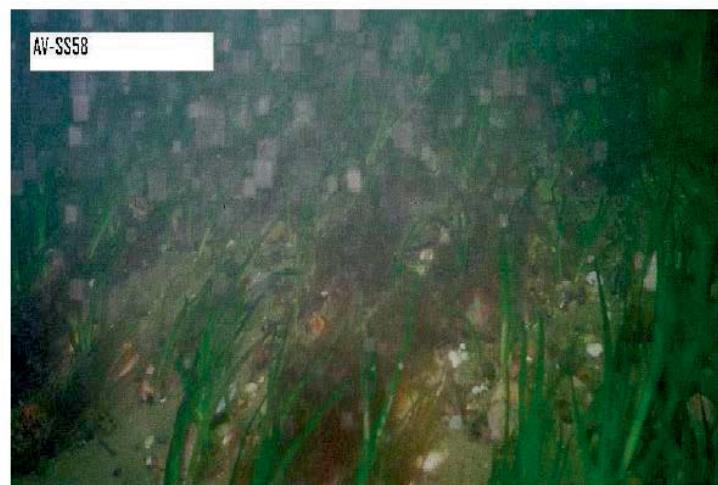


Figure 3. Underwater Photograph of Eelgrass (*Zostera marina*) at AV-SS58

出典：Cape wind Submerged aquatic vegetation diver survey, July 2003

図 3.2.5-51 ダイバーによるアマモの確認結果の例

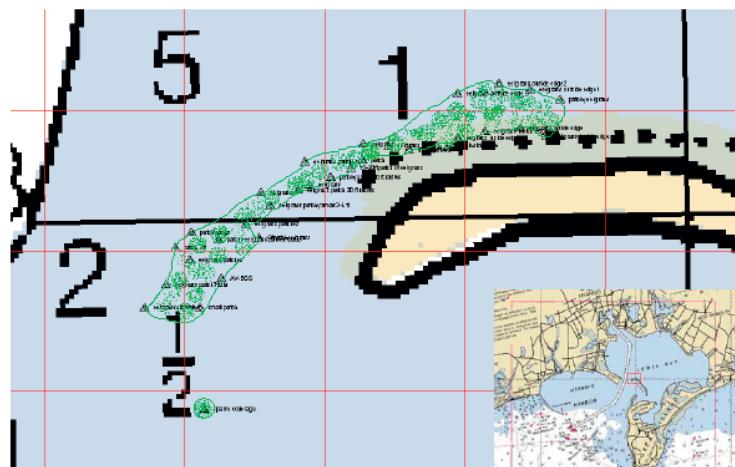


Figure 4. Location and extent of Eelgrass (*Zostera marina*) at AV-EGG

出典：Cape wind Submerged aquatic vegetation diver survey, July 2003

図 3.2.5-52 ダイバーによるアマモの確認結果の例

【予測】

予測はほとんどの事例において、定性的な予測であり、工事中における濁りの発生による影響、施設稼働時における流れの変化による生息環境への影響を定性的に予測している。

【評価】

重要とされるアマモの生息海域を対象に、海底ケーブル敷設に伴い海底泥の拡散予測結果を対応させたところ、生息海域の懸濁物濃度は 50mg/l 以下で生息には影響がないと評価している。また、光合成への影響もないとしている。一方、風車基礎の占有による藻類の消失に関しては、その面積が少ないと問題ないと評価している。

⑩ 景観

表 3.2.5-33 景観に関する調査・予測・評価手法について

項目	内容	備考
調査	調査対象項目 ◎工事による影響：工事に伴う作業船舶等による景観への影響 ◎施設の存在による影響：施設の存在により眺望景観の変化が考えられる。	
	調査時期 予測時期（工事時、存在時）を想定した時期	
	調査手法 ◎写真（船上、陸上）、フォトモンタージュ、景観シミュレーションによる定性的手法 ◎地域住民等（居住者、ビジネスマン、観光客）への意識調査	
予測	予測時期 工事時、存在時	
	予測手法 ◎写真及びフォトモンタージュ等と意識調査による影響を定性的に予測	
評価	評価手法 ◎現地調査、既往知見等に基づく定性的手法 ◎周辺の自然条件や社会条件の感受性を考慮した眺望に基づき評価	

【概要】

14 事例のうち 7 事例が景観を環境影響評価項目に上げている。景観は、主要眺望点から風車までの離岸距離、風車の規模によって実施するかどうか判断されている。

調査はフォトモンタージュ等により設置後の写真を作成し、地域住民に意識調査を実施している。予測は、7 事例のうち全てにおいて、フォトモンタージュ等により影響を定性的に予測している。

評価は、気象条件により、見え方も異なるので、気象統計データも併用している事例もある。評価の視点としては、影響の強度、影響の範囲、影響の期間などである。

【調査】

・項目の選定理由

施設の存在により主要眺望点からの景観の変化が考えられるため選定している。

・実施されている調査手法の事例

計画海域を眺望する主要眺望地点(ここでは Djursland と Anholt)の中からレクリエーション地区、社会的価値がある地域、良好な景勝地域などを選定し、現地調査結果を考慮して 7 地点の評価地点を選定している(図 3.2.5-53)。選定されなかった地域に関しては状況に応じて Visibility 調査を実施し、風車の視認状況を確認した(図 3.2.5-54)。風車の配置に関しては風車規模と基数ならびに配置パターンを変化させた 4 ケースを対象としている(図 3.2.5-55)。



Figure 1-10. The seven observation sites shown as Windpro Camera Objects, together with the Siemens 2.3 (174 turbines) radial layout. For each site the positions of the observer sometimes varied depending on the time of day and other contingent reasons, hence the larger number of Camera Objects (shown as arrows). Pictures from the ferry refer to the distance expected between the ferry and the wind turbines with the used layouts of the turbines.



Figure 1-11. Three view points on the north western part of Anholt of which two are picked out as examples in this report - view point 1 from the stairs and view point 2 from the road to the harbour.

出典 : Anholt Offshore Wind Farm Visualization report December 2009

図 3.2.5-53 景観の評価地点

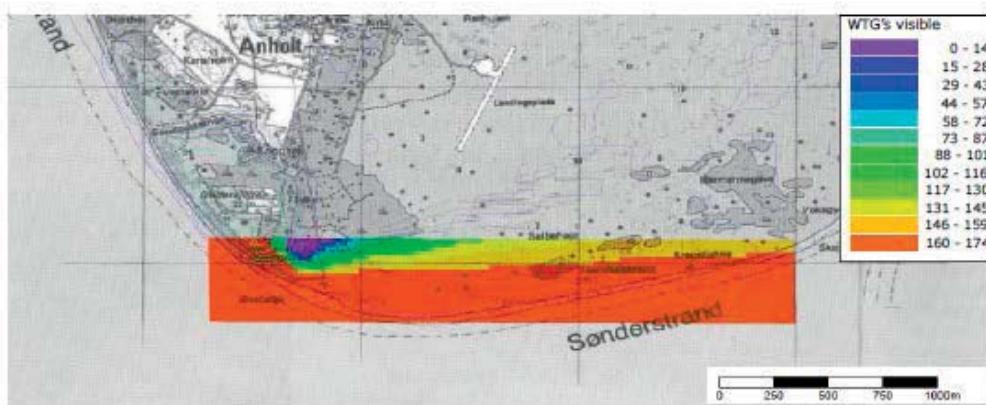
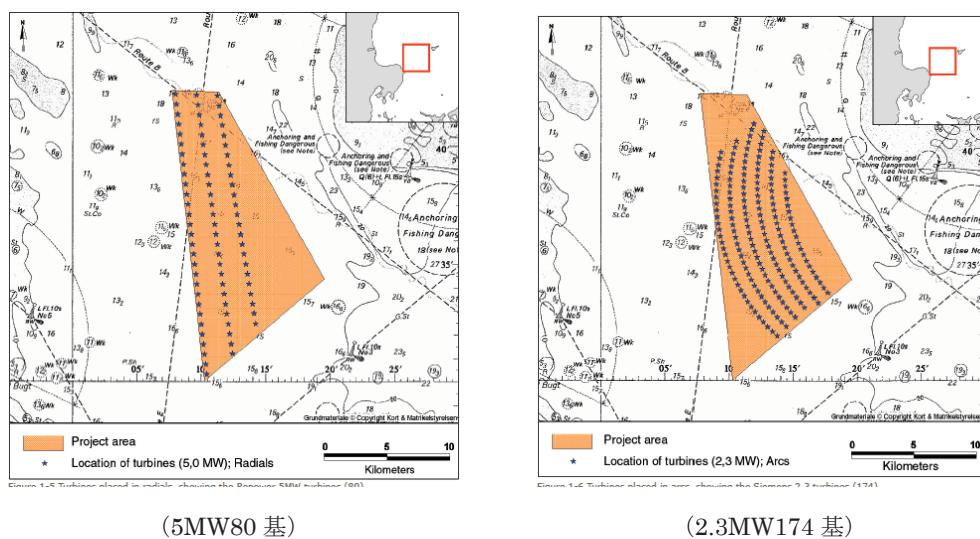


Figure 1-8 Visibility study at the coast of Anholt

図 3.2.5-54 Visibility 調査の例



出典 : Anholt Offshore Wind Farm Visualization report December 2009

図 3.2.5-55 風車配置の例

評価の気象条件等に関しては、「快晴状態 : Very clear」、「晴天状態 : Clear」、「霧状態 : Misty」、「夜間」の4条件を採用するとともに、各月の気象条件の統計結果(図3.2.5-56)も最終評価に適用している。

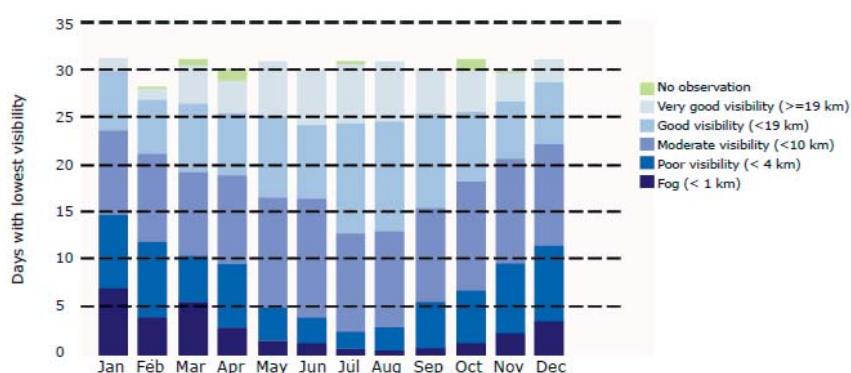


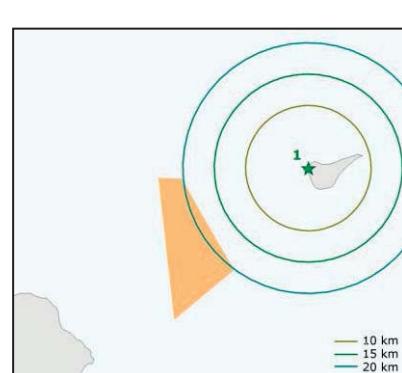
Figure 1-9 Diagram showing the weather conditions in The Kattegat, in terms of visibility (/9/)

出典 : Anholt Offshore Wind Farm Visualization report December 2009

図 3.2.5-56 近傍における気象条件の統計結果

【予測】

フォトモンタージュ手法を適用し建設前後の景観を確認している。その一例を図 3.2.5-57 に示す。



(眺望点)

出典 : Anholt Offshore Wind Farm Visualization report December 2009

図 3.2.5-57 フォトモンタージュ結果

【評価】

Anholt の事例について示す。主要眺望点（ここでは Djursland 地区、Anholt 地区、Seascape の 3 か所）について、影響の強度、影響の範囲、影響の期間の点から評価を行っており、その結果は表 3.2.5-34～表 3.2.5-36 に示す。Djursland 地区ならびに Anholt 地区からの景観に対する影響は顕著であることが示唆されている。

しかしながら、この評価はあくまでも景観上の評価で、環境影響評価ではこの景観の状況がどのような人間活動に影響するかを検討している。具体的には観光やレクリエーション活動が対象で、ここでは建設工事中と稼働中に関して評価されている。

建設工事中については、①期間が短い、②景観を阻害するのは沖合の風車よりも近傍の港湾における作業や機材の集積で範囲が局所的ということで中程度の影響と評価。

稼働中については、①インパクトは長期的、②景観疎外は大きいが局所的で中程度の影響と評価。

最終的な評価を表 3.2.5-37 に示す。景観、騒音、アクセス規制の 3 要因で示されているが最終には景観は moderate（中程度の影響）の評価となっており、ウインドファームは 2011 年末から着工開始し、2013 年に運用開始された。

その他の事例では、工事中の作業船舶等による景観への影響が評価されており、工事期間が限られるため一時的で影響は小さい（Cape Wind）。また、発電施設は沿岸から長距離に位置していることから景観への影響はほとんどない（London Array）。観光船等からの眺望についても限定的な範囲であることから、影響は限られている（Cape Wind）。施設自体が観光資源となることから、影響は小さい（Naikun）。視認域の沿岸部にはほとんど住民の居住がないこと等から、景観への影響はほとんどない（Barrow）。また、仮に視認できたとしても風車の存在は良好で落ち着いた景観として捉えられることから、景観への影響はない（North Wind）などと評価されている。

表 3.2.5-34 Djursland 地区からの評価

Table 8-1 Overall significance of the visual impacts on Djursland.

Impact	Intensity of effect	Scale/geographical extent of effect	Duration of effect	Overall significance of impact
Visual impact on the landscape on Djursland	Large	Regional	Long term	Significant

表 3.2.5-35 Anholt 地区からの評価

Table 8-2 Overall significance of the visual impacts on Anholt.

Impact	Intensity of effect	Scale/geographical extent of effect	Duration of effect	Overall significance of impact
Visual impact on the landscape on Anholt	Large	Regional	Long term	Significant

表 3.2.5-36 Seascape における評価

Table 8-3 Overall significance of the visual impacts at sea.

Impact	Intensity of effect	Scale/geographical extent of effect	Duration of effect	Overall significance of impact
Visual impact on the seascape	Large	Regional	Long term	Moderate

出典 : Anholt Offshore Wind Farm Visualization report December 2009

表 3.2.5-37 人間活動への影響評価

Table 5-1 Summarized effects and significance.

Impact	Overall significance of impact	Quality of available data
OFFSHORE PROJECT		
Impact on tourism and recreation on shore and offshore - during construction		
<i>Visual impact</i>	Moderate	1
<i>Noise impact</i>	Minor	1
<i>Restriction in access</i>	Minor	2
Impact on tourism and recreation on shore and offshore - during operation		
<i>Visual impact</i>	Moderate	2
<i>Noise impact</i>	Minor	2
<i>Restriction in access</i>	Minor	2
TRANSFORMER PLATFORM AND CABLE PROJECT		
Impact on tourism and recreation during construction		
<i>Visual impact</i>	Minor	1
<i>Noise impact</i>	Minor	1
<i>Restriction in access</i>	No/Minor	1
Impact on tourism and recreation during operation		
<i>Visual impact</i>	No/minor	1
<i>Noise impact</i>	No/minor	1
<i>Restriction in access</i>	No/Minor	1

出典 : Anholt Offshore Wind Farm Tourism and Recreational Activities December 2009

4) まとめ

海外の洋上風力に関する調査、予測・評価手法の事例を整理した。その結果、各環境項目に対応した調査手法については、既存の海洋調査技術を組み合わせて利用しているものが見られた。既に日本でも導入事例があるが、海産哺乳類の音響調査や鳥類のレーダ調査は、各要素技術を基に、生物を対象に器機を開発し活用している。

予測手法の事例については、既に確立している水質・底質のシミュレーションモデルや、鳥類の分布調査を基にした空間生息分布モデルや海産哺乳類の水中騒音に対する回避行動の距離を解析する事例が見られた。

評価手法の事例については、生物へ影響する強度、規模、期間、及び重要度を点数化して、総合点で評価しているものが見られた。

これらの手法は日本への導入に向けて参考になると考えられるが、日本の自然・地域特性に応じて手法を順応させていく必要があると考えられる。

現在、英国を中心にヨーロッパでは洋上風力の導入が進められており、今後の調査手法においては、効率化、定量化に向けた新しい技術が開発される可能性もあるので、引き続き海外事例の調査を実施していく必要があると考えられる。

【参考資料】

【評価書】 Beatrice Demonstration洋上風力発電事業

調査名	Beatrice Demonstration(英國)				摘要
実施者	Talisman Energy (UK) Limited、Scottish and Southern Energy (SSE)				
調査の目的	スコットランド(Highland)における洋上風力発電事業の環境影響評価の実施				
候補海域					
風力発電機及び設置基数	風力発電所出力: 10MW (5MW×2基)				
公表時期	2005年				
参考項目	主要な騒音 振動 大気質 水質 流向・流速 波浪 地形及び地質 電波障害 水中騒音・海底振動 底生生物(マクロベントス) 漁業生物(魚介類) 海草・藻類 海産哺乳類 鳥類 主要な眺望点及び観光資源並びに主要な眺望景観 人と自然との 活動の場	調査・下測: 評価手法	予測・評価結果	参考項目を選定した理由	
大騒音	—	—	—	—	
気振動	—	—	—	—	
環境大気質	—	—	—	—	
水質 生活環境項目	—	—	既存資料調査	—	—
水環境 底質・地質	○ ○	【調査・予測対象】底質分布 【調査手法】調査方法: ●採泥器調査、ビデオ映像調査 ①底質の粒径、有機物、重金属、炭化水素 ②風車建設予定地点の1kmの周辺海域内(12地点) ③採泥器(Day grab: 0.1m ²)にビデオカメラとライトを設置し、状況と底質を把握。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から底質への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	海底ケーブル等で底質が乱されるエリアは限られており、また、底質は清浄であることから影響は小さいと評価される。	海底ケーブル等で底質が乱されるエリアは限られており、また、底質は清浄であることから影響は小さいと評価される。	風車及び海底ケーブルの工事及び稼働に際して、底質を乱し影響を及ぼすことが考えられる。
流向・流速	—	—	既存資料調査	—	—
波浪	—	—	—	—	—
その他の環境 地形及び地質	○ ○	【調査・予測対象】海底地形、海底地質 【調査手法】調査方法: ●音波探査調査、ビデオ映像調査 ①地形調査 ②風車建設予定地点の1kmの周辺海域 ③魚群探知器、サイドスキャナーソナー、ビデオカメラにより地形を把握。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から地質への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	撮影した堆積物試料の粒子サイズ分析の結果、壊れたシェル材料ときれいな細かい砂が確認される。シルト/粘土含有量(粒子<63μm)の比率は、約3%から4.5%まで変化している。	撮影した堆積物試料の粒子サイズ分析の結果、壊れたシェル材料ときれいな細かい砂が確認される。シルト/粘土含有量(粒子<63μm)の比率は、約3%から4.5%まで変化している。	風車及び海底ケーブルの工事及び稼働に際して、海底地形に影響を及ぼすことが考えられる。
電波障害	—	—	—	—	—
水中騒音・海底振動	—	—	水中音は実測されていない。 *水中音パワーレベル及び海産哺乳類/魚類の音圧閾値に係る既往知見による影響評価、あるいは簡易な水中音伝播シミュレーションと組み合わせた影響評価。	—	—
海洋生物 底生生物(マクロベントス)	○ ○	【調査・予測対象】表生・内生ベントス相 【調査手法】調査方法: ●採泥器調査、ビデオ映像調査 ①マクロベントスの分布状況を把握 ②風車建設予定地点の1kmの周辺海域内(12地点) ③採泥器(Day grab: 0.1m ²)にビデオカメラとライトを設置し、状況とマクロベントスを把握するとともに、0.5mmフルイ上のサンブルを分析。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から底生生物への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	懸濁物の濁りや底面擾乱に伴う生息場への影響については、工事範囲は限定的であり短期間であることから速やかに環境に適応すると評価されている。	懸濁物の濁りや底面擾乱に伴う生息場への影響については、工事範囲は限定的であり短期間であることから速やかに環境に適応すると評価されている。	アンカーの存在、工事の濁りによる物理的ストレス、懸濁物の濁りや底面擾乱に伴う生息場への影響基盤設置に伴う生息場の損失が考えられる。
海洋生物 漁業生物(魚介類)	—	既往調査資料	—	—	—
海洋生物 海草・藻類	—	—	—	—	—
動物、植物、生態系 海産哺乳類	○ ○	【調査・予測対象】クジラ類の個体数等 【調査手法】調査方法: ●生物音調査、船舶調査(目視調査) ①bottlenose dolphin、ネズミイルカを対象。 ②延<1930kmの側線で調査 ③TPODSおよび目視調査により調査を実施。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から海産哺乳類への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	サイトから25km離れたモレーでは逃避行動は見られなかつた。しかし、杭打ち工事の近辺では影響は避けられないので保全措置を行う。保全措置として、杭打ち音の音源の減少、サイト1km以内にないときに工事を実施、ソフトスタート工法の実施。	サイトから25km離れたモレーでは逃避行動は見られなかつた。しかし、杭打ち工事の近辺では影響は避けられないので保全措置を行う。保全措置として、杭打ち音の音源の減少、サイト1km以内にないときに工事を実施、ソフトスタート工法の実施。	杭打ち工事で発生する水中音による海生哺乳類への影響が考えられる。 (※) 杭打ち工事: 4日間、1日当たり2本の杭打ち、2時間/本
動物、植物、生態系 鳥類	○ ○	【調査・予測対象】鳥類 【調査手法】調査方法: ●陸上目視調査 ①鳥類の種、個体数、風車建設位置からの距離、平均飛翔高度、飛翔方向等を把握 ②プラットホーム(風車(WTG1及びWTG2)予定位から1,581m及び2,331mに設置された観察地点)から風車(WTG1及びWTG2)予定位方向を5段階の幅に分けて目視観察。観察には望遠鏡(20倍接眼)及び双眼鏡(10倍)を使用して90°弧を定期的に観察。 ③(a)2005年の調査: プラットホーム(風車予定位から1,581mと2,331mに設置された観察ポイント)による調査(鳥類の種、個体数、風車建設位置からの距離、平均飛翔高度、飛翔方向、特記事項を記載) 同時調査時に海産哺乳類、漁業活動も併せて調査を実施。 (b)2006年の調査: プラットホームにおいてバードストライクのモデルリングを目的として生息密度調査(昼間に風車ハブ高より低高度で水平距離2km以内の鳥類の種と個体数を毎時調査)を実施。 ・既往調査は航空機調査による。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から鳥類への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	このプロジェクトの鳥への影響は、ほとんど小さい。洋上風車の占める割合は小さく、そこで見られる鳥は緩やかに飛んでおり時々採餌行動をしている。渡り鳥に対して最も大きな壁障とははないといい、採餌エリアから除外されることはもない。北東スコットランドの鳥の数は、約35,000で、風車による死亡率の増加は、約0.5%で自然の死亡率に等しい。	このプロジェクトの鳥への影響は、ほとんど小さい。洋上風車の占める割合は小さく、そこで見られる鳥は緩やかに飛んでおり時々採餌行動をしている。渡り鳥に対して最も大きな壁障とははないといい、採餌エリアから除外されることはもない。北東スコットランドの鳥の数は、約35,000で、風車による死亡率の増加は、約0.5%で自然の死亡率に等しい。	以下の影響が考えられるため選定 ・鳥の移動行動に対する障壁効果 ・生息地の放棄、場所変え ・採餌行動、餌場への悪影響 ・衝突リスク
景観 主要な眺望点及び観光資源並びに主要な眺望景観	—	【調査・予測対象】眺望景観 【調査手法】 ・眺望点は、Scottish Natural Heritage(SNH)及びThe Highland Councilに相談して決定。 ・景観解析マップ(シミュレーションモデルを用いたマップでZones of Theoretical Visibility(ZTV)及びカメラによる景観図を作成。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から景観への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】既往知見に基づく評価	工事中、供用時の景観への影響は僅かであり、重要な影響は見られなかった。	工事中、供用時の景観への影響は僅かであり、重要な影響は見られなかった。	洋上風車の工事中、供用時の景観及び海景観への影響が考えられるため選定されている。
人と自然との活動の場	—	—	—	—	—

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 Dudgeon 洋上風力発電事業

Dudgeon Offshore Wind Farm (英國)			摘要		
調査者	Dudgeon Offshore Wind Ltd.				
調査の目的	イングランドにおける岸上風力発電事業の環境影響評価の実施				
候補海域					
風力発電機及び設置基数	風力発電機出力: 402MW (60MW×67基)				
公表時期	2009年6月				
調査項目	水質、底質、地形、気象、生物、景観、社会経済、人間活動				
騒音	○ ○	既存資料調査	風車までの離岸距離が大きいため影響は無視できる。 工事中の騒音による影響が考えられた。		
振動	○ ○	既存資料調査	陸上工事の車両を削減することで影響を低減できるとしている。 工事中の振動による影響が考えられた。		
大気質	○ ○	既存資料調査	陸上の工事作業によりわざかに影響が見らると評価された。 工事車両の大気質への影響が考えられた。		
水質	生活環境項目	○	<p>【調査・予測対象】水質分布 【調査手法】調査方法 : ●基礎水質との比較検査 ●基礎構造物の影響評価 ●生物活性 : 大腸菌、サルモレラ菌 ●生息場所 : 海洋、水温、水色、SS、塩分、溶存酸素、石油炭化水素、Organohalogenated substances、金属、養殖魚類 ●性別・年齢層など ●底質分析 ①底質 : アルミニウム、カドミウム、クロム、銅、鉛、ニッケル、錫 ②底泥 : 特定種生物結果及び既往知見から水質への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	工事期間中、最終測による影響を受けると考えられるが、海底浴場から遠いことなどから影響は無視できると考えられる。 搬移時はガイドラインに従うため影響は無視できる。撤去時は工事中と類似しており、影響は無視できると考えられる。	以下の要因による底質の擾乱に起因する水質変化が考えられる。 ・風力発電機及び変電所の基礎構造物の設置 ・風車間、海底ケーブルの設置 ・洗掘防止材の設置 ・スパットの足のような工事船の活動
水質	底質・地質	○	<p>【調査・予測対象】底質分布 【調査手法】調査方法 : ●既存資料調査 ●現地調査、現地測定 ①現地測定 : 基礎構造物の位置確認 (サンドウェーブ、傾斜、地滑りなど)、洗刷の監視、堆積物の移動の確認。 ●TEAと現地物理検査 (Gardline Geosurvey, 2007, 2008) ②海底堆積物の試料を採取。 ③その他 ④海底輪流地の検討 ⑤堆積物の輸送はthe HR Wallingford TELEMAC, SANDFLOW and COSMOS modelsを使用して計算。 【予測対象時期】現地調査結果及び既往知見から底質への影響について定性的に予測 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	当該サイトは、砂質の細かい織で占められており、底質の変化は一時的でないと考えられる。また、化学的及び物理的な変化による汚染レベルは低いため、底質の最終測による影響は無視できる。搬移時は工事中と類似しており、影響は無視できると考えられる。	以下の要因による底質の擾乱が考えられる。 ・風力発電機及び変電所の基礎構造物の設置 ・風車間、海底ケーブルの設置 ・洗掘防止材の設置 ・スパットの足のような工事船の活動
水質	流向・流速	○	<p>【調査・予測対象】流れ 【調査手法】調査方法 : ●既存資料調査 ●現地調査、現地測定 ①現地測定 : 流向測定 (潮流を中心とした1時間ごとの流向速度)。 ②現地モデルによる詳細な潮流の解析。 - southern North Sea : グローバルモデル - Dudgeon : ハーベルモデル ③建設と運搬中の影響評価：基礎による流れの変化と基礎による洗掘。 ④流向測定地調査 ⑤現地測定地調査 ⑥既往の検討は3地点。 ⑦モデルの検証用に現地流速を実際に計っている。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から潮流への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	潮流の乱れは航直線の10倍まで拡張される。すなわち直線6.5mの場合、杭の風下側の65mの影響を受ける。	基礎の設置期間、ケーブル敷設、撤去時におけるSSの増加、移動時ににおける基礎周辺の洗掘の進行、サンドウェーブの変化によるケーブルの露出、海岸線の侵食によるケーブルの露出が考えられる。
波浪	-	-	<p>【調査・予測対象】波浪 【調査手法】調査方法 : ●既存資料調査 ●現地調査、現地測定 ①波高波高 (有義波) ②施設による波の変形により生じる影響 : 洗掘、沈殿物の輸送、漁場、生育場等について検討。</p>	波浪の影響は、杭の近傍に限られるとしてある。	基礎の設置期間、ケーブル敷設、撤去時におけるSSの増加、移動時ににおける基礎周辺の洗掘の進行、サンドウェーブの変化によるケーブルの露出、海岸線の侵食によるケーブルの露出が考えられる。
その他の環境	地形及び地質	-	<p>【調査・予測対象】海底地形、海底地質 【調査手法】調査方法 : ●現地調査、既存資料調査 ①詳細な基礎構造物の位置確認 (サンドウェーブ、傾斜、地滑りなど)、洗刷の監視、堆積物の移動の確認。 ②現地モデルによる詳細な潮流の解析。 ③建設と運搬中の影響評価：基礎による流れの変化と基礎による洗掘。 ④流向測定地調査 ⑤現地測定地調査 ⑥既往の検討は3地点。 ⑦モデルの検証用に現地流速を実際に計っている。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から潮流への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	海底ケーブル敷設による堆積物のレベルは小さく、影響は局所的で期間は短い。	基礎の設置期間、ケーブル敷設、撤去時におけるSSの増加、移動時ににおける基礎周辺の洗掘の進行、サンドウェーブの変化によるケーブルの露出、海岸線の侵食によるケーブルの露出が考えられる。
波浪	-	-	-	-	-
地形及び地質	-	-	-	-	-
波浪	-	-	-	-	-
水生環境	水中騒音・海底振動	○	<p>●既存資料を用いたモデルによる予測評価 ①直後3.0m×6.5mのフィールド打ち込んだときの水中音を見積もる。 ②モデル (INSPIRE v13.5) を使用して水中音は実測されていない。</p>	-	-
海洋生物	底生生物(マクロペントス)	○	<p>【調査・予測対象】底生・内ベントス相 【調査手法】調査方法 : ●既存資料調査 ①現下帯のシントス相対 ②既存箇所でサンプルアーム周辺40点(ウィンドファーム外18点、内22点(ウィンドファーム境界上の点を含む。))、ウインドファームから岸の間に13点。 ③0.1mのHamon grab ④既存調査結果 ⑤現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	ケーブルルートの稼働地は、丸石が多く、底生生物の生息環境には適していないと考えられ、影響はないと考えられる。重要な種は確認されておらず、また、工事期間は想いのけで影響はないと言えあらざる。また、工事現場は想いのけで影響はないと言えあらざる。また、工事現場では影響を受けないところから群衆を作ることの移動時の影響はないと考えられる。 撤去時は、杭打ち以外の工事中と同じであるから影響はないと考えられる。	工事、稼働および撤去によるベントスへの影響を考えられるため選定している。
動物・植物・生態系	漁業生物(魚介類)	○	<p>【調査・予測対象】魚介類 【調査手法】調査方法 : ●底曳網調査 ①魚類類別対象 ②現地調査結果 ③現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	調査では重要な魚介類は確認されなかった。工事中の音は、敏感な魚には影響を与えると予測されるが、ソフトスタートや杭打ち式採集法を採用することにより影響は軽減されるとして評価される。 また、人工魚礁効果によりプラスの影響も期待される。	水中音による魚介類への影響が考えられるので選定している。
海草・藻類	-	-	-	-	-
海藻・哺乳類	海藻・哺乳類	○	<p>【調査・予測対象】ジラフの個体数等 【調査手法】調査方法 : ●船載調査 (目視調査) ①船類型、ジラフの個体数等 ②現地調査と同時実測のため、次の範囲と想定される。 ○ジラフの現地調査範囲の範囲に沿って航行し、その範囲 (6.5km2) 全体を含む蛇行した調査ライン。 調査結果は既往知見も含めて取りまとめていた。</p>	適切な保全措置を講ずることによって影響はわずかとなると評価されている。稼働中の影響は無視できるものと評価されている。この地域に生息する鯨類、アンカ類は小さくまた機動性が高いため、船との衝突の影響は小さいと考えられる。	工事中の水中音の海生哺乳類に対する影響、および工事船等との衝突による影響が考えられるため選定している。
鳥類	鳥類	○	<p>【調査・予測対象】鳥類 【調査手法】調査方法 : ●船載調査 ①鳥類 ②航行機会調査 ③飛行ブロックを5kmに分けた。そのうちの1つにウインドファーム(35km2)の範囲を東西に1km拡張し、その範囲 (65.5km2) 全体を含む蛇行した調査ライン。 調査結果は既往知見も含めて取りまとめていた。</p>	一部の鳥類種で影響が見られると予想されたが、開発を止めるほどの影響ではないと評価された。	バードストライク、生息環境の変化が考えられるため選定している。
景観	主要な眺望点及び観光資源並びに主要な眺望景観	○	<p>【調査・予測対象】眺望景観 【調査手法】調査方法 : ●既存調査結果 ①現地内陸地形図、海図、気象データ、対象区域の景観管轄計畫、既存の環境影響評価書を収集。現地調査は2008年夏季、2009年春季の回実施。 ピークとしてTV's (Zone of Theoretical Visibility)、ワイヤフレーム、フォトモンタージュを使用し、予測景観図を作成している。手法と対象範囲については各関係機関にコメントをもらっている。評議会での意見点の重要度 (Score) で変化の大きさを階級化し、それらの組み合わせで影響の有無を判断している。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から鳥類への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	陸上景観に対する影響を及ぼすものはないと評価された。海景観に対しては影響は非常に小さいと評価された。住民のアメニティに対する影響も小さいと評価された。	洋上風車により以下の影響が考えられるため選定している。 ・海景観に対する直接的な影響あるいは物理的な変化・知覚変化を及ぼすなどの海景観に対する質や特性に関する間接的な影響
人と自然との融和性	主要な人と自然との融和性の場	○ ○	既存資料調査	工事中、稼働時に若干影響が見られる評価されたが、環境保全措置により影響を低減できる。	アメニティに関する直接的な影響

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 Egmond aan Zee洋上風力発電事業

調査名	Egmond aan Zee (オランダ)			摘要	
実施者	Nuon (Vattenfall AB), Shell Wind Energy Ltd				
調査の目的	・オランダ北海沖合における洋上風力発電事業の環境影響評価の実施				
候補海域	 				
風力発電機及び設置基數	風力発電所出力 : 108MW (3MW×36基)				
公表時期	2005年5月				
参考項目	主事 小並 類	土壤及 地盤 物理 的性質	調査・予測・評価手法	予測・評価結果	
大騒音	—	—	—	—	
気振動	—	—	—	—	
環境大気質	—	—	—	—	
水生活環境項目	—	—	—	—	
水環境	底質・地質	○ ○	<ul style="list-style-type: none"> ●採泥器調査 <ul style="list-style-type: none"> ①ボックスコアサンプラー（採泥器）で採泥後、底質の粒度組成・有機物量・炭酸塩を分析。 ②126測点（風車建設水域68測点及び周辺8測点、対照水域50測点）で採取。採泥面積26×26cm。 ③当該調査は底生生物調査と同時実施。 	—	—
波浪・流向・流速	○ ○		<ul style="list-style-type: none"> ●ADCP流況調査 <ul style="list-style-type: none"> ①流速・流向。 ②気象観測塔に設置されたADCP（ドップラーレーベン計）で測定（1測点）。水深7m・11mの2層で測定。— 	—	—
地形及び地質	—	—	—	—	
その他電波障害	—	—	—	—	
水生騒音・海底振動	○ ○		<ul style="list-style-type: none"> ●水中聽音器調査 <ul style="list-style-type: none"> ①船舶騒音が有る状況（操業時）や無い状況（非操業時）、1～6 Beaufortレベル（至軽風～雄風）とは異なる様々な状況下で水中騒音を測定（日中6:00～20:00）。 ②洋上風車建設水域から300m及び600m離れた位置で、船上から測定（水深4m）。 	—	—
海洋生物	底生生物(マクロベントス)	○ ○	<p>【調査・予測対象】1mm及び6mmメッシュ網以上の底生生物</p> <p>【調査手法】調査方法 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ●採泥器調査: 126測点（風車建設水域68測点及び周辺8測点、対照水域50測点）で採取。採泥面積26×26cm。ボックスコアサンプラー（採泥器）で採取後、1mmメッシュの籠の上のサンプルを対象。当該調査は底質調査と同時実施。 ●底曳網調査: 51測点（風車建設水域25測点及び周辺8測点、対照水域18測点）で採取。ドレッジの仕様: 間口幅1m、6mmメッシュ、長さ5m網、カッティングブレード15cm <p>【予測手法】底生生物の定住及び幼生（二枚貝など）の存在量の把握から、施設の影響を定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>		<p>【工事に伴う一時的な影響】</p> <p>工事において、擾乱や破壊に伴う生息場所への影響が考えられるため選定した。</p> <p>【施設の存在及び供用】</p> <p>施設の存在により堆積物の浸食など、生息環境の変化が考えられる他、鳥類や魚類の変化により食物連鎖を通じた影響が考えられるため選定した。</p>
漁業生物(魚介類)	○ ○		<p>【調査・予測対象】底魚及び浮遊魚類</p> <p>【調査手法】調査方法 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ●底曳網調査: 40測点（風車建設水域13測点、対照水域27測点）で採取（1測点約1.6km。桁網（6mのビームドロール、目合い20mm）で、曳網時間15分で平均船速3.5ノット（6.5km/h）で曳網。桁網にCTDを取り付け、水温・塩分・pH・酸素濃度・時間・水深を記録。 ●計量魚群探知機調査: ドラッグセイフ長さ8～10km、幅0.5～1kmを対象。魚群探知機で魚群を確認後、表・中層（浮遊魚）トロール網で15～20分間曳網し、漁獲魚種ヒエコードーダーから計量魚群探知機法を実施。 <p>【予測手法】実施区域への出現、出現密度、種類構成及び帰集パターンを調査結果から検討することによる施設の影響を定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>		<p>【工事に伴う一時的な影響】</p> <p>工事に伴う騒音や擾乱により生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。</p> <p>【施設の存在及び供用】</p> <p>施設の存在そのものの影響の他、局所的生物の変化に伴う鳥類や海洋生物の分布変化による影響が考えられるため選定した。</p>
動物・植物・生態系	海草・藻類	— —	—		—
海産哺乳類	○ ○		<p>【調査・予測対象】ネズミイルカ、ゼニガタアザラシの分布・個体数等状況。</p> <p>【調査手法】調査方法 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ネズミイルカ : ●生物音調査（T-POD調査）: 風車建設予定水域にT-POD 2機、2箇所の対照水域にそれぞれT-POD 3機設置（合計8地点）。 ●船舶調査（目視調査）: 風車建設予定水域・対照水域含む東西方向約35kmのトランゼクト（10本：間隔2.47km）を対象（調査水域900km²超）。対地速度10ノットで調査を実施。 ゼニガタアザラシ : ●航空機調査: 繁殖期・換毛期・干潮時の上陸場にて個体数調査を実施。 ●ピンガ-標識調査（衛星利用調査）: 分布域・潜水状況等の調査を実施。2005年10月～11月に発信器を取り付けた12頭のゼニガタアザラシを対象。 <p>【予測手法】施設設置に伴う出現への影響を調査結果等から定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>		<p>【工事に伴う一時的な影響】</p> <p>工事に伴う騒音や擾乱により生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。</p> <p>【施設の存在及び供用】</p> <p>施設の稼働に伴い、発生する騒音により、水中の生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。</p>
鳥類	○ ○		<p>【調査・予測対象】鳥類の種類・個体数等</p> <p>【調査手法】調査方法 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ●船舶調査（目視調査）: 風車建設予定水域・対照水域含む東西方向約35kmのトランゼクト（10本：間隔2.47km）を対象（調査水域900km²超）。 対地速度船速10ノットでトランゼクト長300m、幅300m単位（1分間）で調査を実施。 ●衝突影響調査: 風車にネットを設置し衝突死した鳥類を捕足する。（衝突音とビデオカメラ撮影を自動モニタリングする装置を試みた。） ●飛翔ルート妨害影響調査: 目視観測（実施区域における種類構成、分布及び飛行パターンに関する特徴）及びレーダー（鉛直及び水平方向）観測（年間、24時間）にて飛行パターンを観測。 ●休息場・採餌場への影響調査: 上記の船舶調査を設置前及び供用時に実施。 【予測手法】風車への衝突リスク・飛翔ルートの妨害（壁障影響）及び休息場・採餌場として利用している鳥類への擾乱に対する影響事象を現地調査から定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価 		<p>【工事に伴う一時的な影響】</p> <p>工事に伴う騒音等による生息環境を擾乱し影響を及ぼすことが考えられるため選定した。</p> <p>【施設の存在及び供用】</p> <p>施設の稼働による騒音等による影響を受けた生息種も存在するが、対象区域に対する利用及び飛翔する鳥類全体に対する影響は一時的なものであり、また、それらの影響は小さいものと評価された。</p>
景観	主要な眺望点及び観光資源並びに主要な眺望景観	— ○	<p>【調査・予測対象】眺望景観</p> <p>【調査手法】調査方法 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ●写真及びフォトモニタージュ ●地域住民等（沿岸の居住者、ビジネスマン、オランダ及びドイツの休日の方客）への意識調査（インターネットによる） <p>【予測手法】写真及びフォトモニタージュ等と意識調査の併用により影響を定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>		<p>【施設の存在及び供用】</p> <p>施設の存在により海浜と発電施設等の眺望景観の変化が考えられるため選定。</p>
人と自然との触れ合いの活動の場	主要な人と自然との触れ合いの活動の場	— —	—		—

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 Horns Rev洋上風力発電事業

調査名	デンマーク (Horns Rev)			摘要
実施者	DONG Energy社			
調査の目的	・デンマーク西岸沖合における洋上風力発事業の環境影響評価の実施			
候補海域				
風力発電機及び設置基数	風力発電所出力：160MW (2,000kW×80基)			
公表時期	1999年6月			
参考項目	主な調査 方法	調査・予測・評価手法	予測・評価結果	参考項目を選定/非選定とした理由
大騒音	—	—	—	—
気振動	—	—	—	—
環低周波音	—	—	—	—
水質 生活環境項目	—	—	—	—
水環境 底質・地質	○ ○	<p>【調査・予測対象】粒度組成など</p> <p>【調査手法】調査方法：ダイバーによるダンドコーアサンプリングにより87測点(1999年：風車設置計画海域+対照海域)及び52測点(2001年：風車設置計画海域)で実施。調査3回(1999年春季、2001年春季/秋季)。</p> <p>【予測手法】海水の流れが変わることが予測されることによる、浸食や底泥の再懸濁により底質及び地形の変改が生じる影響について定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	<p>施設建設に伴う底質環境の変化が予測された。建設に伴う流れの変化、底質の変化は限られており、その影響は小さいものと評価された。</p>	<p>【工事に伴う一時的な影響】工事に伴う浸食や底土の巻き上げ等により渦りが発生し周辺の底質環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。</p> <p>【施設の存在及び供用】施設の存在及び利用により、海水流の流れの変化等による浸食等により底質環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。</p>
波浪・流向・流速	—	—	—	—
地形及び地質	—	—	—	—
その他 電波障害	—	—	—	—
他 水中騒音・海底振動	—	—	—	—
海 洋 生物	○ ○	<p>【調査・予測対象】内生ペントス・表生ペントスの種類と現存量</p> <p>【調査手法】調査方法：潜水士によるハンドコーアサンプリング及び写真・ビデオ撮影により87測点(1999年：風車設置計画海域+対照海域)及び52測点(2001年：風車設置計画海域)で実施。調査3回(1999年春季、2001年春季/秋季)。</p> <p>【予測手法】擾乱や破壊に伴う生息場への影響を現地観測結果等から定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	<p>施設建設に伴う底生生物の減少が予測されたが、その影響は設置区域の底生生物全体の1%に満たないと評価された。</p>	<p>【工事に伴う一時的な影響】工事において、擾乱や破壊に伴う生息場所への影響が考えられるため選定した。</p> <p>【施設の存在及び供用】施設の存在により堆積物の浸食など、生息環境の変化が考えられる他、鳥類や魚類の変化により食物連鎖を通した影響が考えられるため選定した。</p>
動物 植物 生態系	○ ○	<p>【調査・予測対象】魚介類の種類、現存量、分布状況</p> <p>【調査手法】調査方法：</p> <ul style="list-style-type: none"> ●水平計量魚群探知機調査：1-3knotsの船速で水平距離100mまでの魚群の数と密度を計測(南北方向：3測線、東西方向：1測線)、調査1回/年(1999年：1昼夜調査) ●底曳網・刺網調査：底曳網と刺網を同地点(4箇所)で実施、調査1回/年(1999年：1昼夜調査) <p>【予測手法】騒音や擾乱による生息場への影響を現地観測結果等から定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	<p>施設建設に伴う海水の渦り、底層水の移動、騒音およびその他の建設活動によって逃避等の影響が予測されたが、現地調査結果及び既往知見から影響は小さいと評価された。</p>	<p>【工事に伴う一時的な影響】工事に伴う騒音や擾乱により生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。</p> <p>【施設の存在及び供用】施設の存在そのものの影響の他、局所的な食物の変化に伴う鳥類や海洋生物の分布変化による影響が考えられるため選定した。</p>
海 草 ・ 藻 類	○ ○	<p>【調査・予測対象】種類と現存量</p> <p>【調査手法】調査方法：ダイバーによるダンドコーアサンプリングにより87測点(1999年：風車設置計画海域+対照海域)及び52測点(2001年：風車設置計画海域)で実施。調査3回(1999年春季、2001年春季/秋季)。</p> <p>【予測手法】擾乱や破壊、浸食などによる生育環境への影響を現地観測結果等から定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	<p>施設建設に伴う海水の渦り、底層水の移動等による影響が予測されたが、現地調査結果及び既往知見から影響は小さいと評価された。</p>	<p>【工事に伴う一時的な影響】工事において、擾乱や破壊に伴う生育場所への影響が考えられるため選定した。</p> <p>【施設の存在及び供用】施設の存在により堆積物の浸食など、生育環境の変化が考えられるため選定した。</p>
海 產 哺 乳 類	○ ○	<p>【調査・予測対象】ネズミイルカの個体数、分布状況及びアザラシ類の移動状況と滞留時間</p> <p>【調査手法】調査方法：</p> <ul style="list-style-type: none"> ●生物音調査(TPODs)：TPODs(100-1200mの範囲内の生物音を記録可能)を6箇所(2箇所：風車設置計画海域、4箇所：5-15km離れた対照海域)に設置して実施(TPODs調査時には水温、塩分、深度、潮汐データを併せて取得) ●船舶調査、調査1-3日/回(少なくとも夏季と冬季に実施、1999-2006年間で30回調査) ●ピンガーラベル(衛星利用)調査・船舶調査：風車設置計画海域から50km離れた所から21頭のゼニアタガザラシにピンガーラベル(衛星)を利用して、その行動をモニタードした。調査は周年。船舶調査による分布状況の立証観測を随時実施。 <p>【予測手法】騒音や擾乱による生息環境への影響を現地観測結果等から定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	<p>施設建設に伴う海水の渦り、底層水の移動、騒音およびその他の建設活動によって逃避等の影響が予測される。対象区域の個体数は低く、また、建設に伴う騒音はイルカ類が受信する音レベルではないことから、影響は小さいと評価された。</p>	<p>【工事に伴う一時的な影響】工事に伴う騒音や擾乱により生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。</p> <p>【施設の存在及び供用】施設の稼働に伴い、発生する騒音により、水中的生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。</p>
鳥 類	○ ○	<p>【調査・予測対象】鳥類の種類、個体数、分布・行動状況</p> <p>【調査手法】調査方法：</p> <ul style="list-style-type: none"> ●航空機調査(目視調査)：飛行航路は南北方向30本のトランゼクト(2km間隔で77km)を設定して実施。 ●レーダー観測：事業時には対象エリア内の観測塔にて鳥類のレーダー観測を実施。 <p>【予測手法】騒音や施設稼働による生息環境、飛行ルートへの影響を現地観測結果等から定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	<p>施設建設に伴う鳥類への影響は極限られていると予測された。また、魚の群れへの採集行動中にブレードへのバードストライクが予測された。現地調査結果及び既往知見より発電施設及びケーブルルート建設に伴う影響は一時的で限られており、極小ないと評価された。</p>	<p>【工事に伴う一時的な影響】工事に伴う騒音等により生息環境を擾乱し影響を及ぼすことが考えられるため選定した。</p> <p>【施設の存在及び供用】施設の存在及び稼働に伴い、休息地や採餌場の減少に影響を及ぼすこと、さらにバードストライク等が考えられるため選定した。</p>
景観 人と自然 との 触れ合いの 活動の場	- ○	<p>【調査・予測対象】眺望景観</p> <p>【調査手法】調査方法：</p> <ul style="list-style-type: none"> ●写真及びフォトモニタージュ ●地域住民、関係機関等への意識調査(聞き取り、インターネット等) <p>【予測手法】写真及びフォトモニタージュ等と意識調査の併用により影響を定性的に予測</p> <p>【予測対象時期】施設稼働時</p> <p>【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価</p>	<p>風力発電施設の存在により眺望景観が変化し、周辺住民への影響等が予測される。発電施設は沿岸から長距離に位置していること等から景観への影響はほとんどないと評価した。</p>	<p>【施設の存在及び供用】施設の存在により眺望景観の変化が考えられるため選定。</p>
主要な人と自然との 触れ合いの活動の場	- -	-	-	-

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 Nysted洋上風力発電事業

調査名	Nysted (英國) DONG Energy社			摘要		
実施者	DONG Energy社					
調査の目的	・デンマーク東部海域における洋上風力発電事業の環境影響評価の実施					
候補海域						
風力発電機及び設置基数	風力発電所出力：165.6MW (2.3MW×72基)					
公表時期	2001年					
参考項目	上場 実施 又は 工作	土地 又は 工作	調査・予測・評価手法	予測・評価結果		
大騒音	—	—	—	—		
気振動	—	—	—	—		
低周波音	—	—	—	—		
水質	一般項目	—	○ 【調査・予測対象】栄養塩、溶存酸素濃度など 【調査手法】既往現地調査結果による知見を収集 【予測手法】既往調査結果等から影響を定性的に予測、夏季における栄養塩、溶存酸素濃度をモデルによる計算から定量的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	施設及びケーブルルート建設区域において水質悪化が予測された。対象海域は低栄養塩海域で一次生産能力は小さいため、施設建設に伴う栄養塩、溶存酸素濃度等へ与える影響はほとんど無いものと評価された。	【施設の存在及び供用】 施設の存在に伴い、水質環境への影響が考えられるため選定した。	
水環境	底質 粒度組成等	—	○ 【調査・予測対象】粒度組成等 【調査手法】Vam Veen採泥器(採集面積: 1~2m ²)により採泥。 調査時期：春季及び冬季を2カ年実施。 【予測手法】調査結果及び流動解析等から施設稼働における影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	施設建設に伴う堆積物の浸食や再堆積の影響が予測された。影響範囲は10m以内であり、影響はほとんどないものと評価した。	【施設の存在及び供用】 施設の存在に伴い洗掘等による影響が考えられるため選定した。	
波浪、流向・流速	—	○	【調査・予測対象】施設周辺の海水の流れ 【調査手法】既往現地調査結果による知見を収集 【予測手法】既往現地調査結果等からモデル計算等により施設設置後の流れを定量的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う流れの変化が予測されたが、モデル計算の結果、発電施設区域の流れの変化は最大3~4%であり、影響は小さいものと評価された。	【施設の存在及び供用】 施設の存在により、潮流への影響が考えられるため選定した。	
地形及び地質	—	—	—	—		
の電波障害	—	—	—	—		
他	水中騒音・海底振動	—	—	—		
底生生物(マクロベントス)	○ ○	○ ○	【調査・予測対象】内生ペントス・表生ペントスの種類と現存量 【調査手法】調査方法：Vam Veen採泥器(採集面積: 1~2m ²)および写真・ビデオ撮影(観察範囲: 1~2m ²)により69測点(採泥器調査)および106測点(写真・ビデオ撮影調査)の採泥を実施。春季及び秋季を2カ年実施。 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う堆積物の懸濁等による生息場の擾乱が予測された。影響範囲はきわめて局所的小さく、工事期間は短期間であるため、建設工事に伴う影響は限定的ではほとんど無いものと評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う底生生物への影響が考えられたため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在により生息環境への影響が考えられるため選定した。	
海洋生物	漁業生物(魚介類)	○ ○	【調査・予測対象】魚介類の種類、現存量、分布状況 【調査手法】調査方法： ●水平計量魚群探知器調査：1-3knotsの船速で水平距離100mまでの魚群の數と密度を計測。(南北方向: 5測線(内、2測線は対照海域)、東西方向: 1測線)。 ●底曳網・刺網調査：底曳網と刺網は同じ場所(5箇所)で実施。調査は年1回、1昼夜調査を2カ年実施。 【予測手法】施設建設における濁りや電磁波による影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う生息場の擾乱が予測された。影響範囲はきわめて局所的小さく、工事期間は短期間であること、また、ケーブルからの電磁波は自然レベルより小さいことから、建設工事に伴う影響はほとんど無いものであると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う魚介類への影響が考えられたため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在により漁業生物を含めた漁業への影響が考えられるため選定した。	
動物、植物、生態系	海草・藻類	○ ○	【調査・予測対象】海草・藻類の種類と現存量 【調査手法】調査方法：Vam Veen採泥器(採集面積: 1~2m ²)および写真・ビデオ撮影(観察範囲: 1~2m ²)により69測点(採泥器調査)および106測点(写真・ビデオ撮影調査)において69測点(採泥器調査)において予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う生息場の擾乱が予測された。影響範囲はきわめて局所的小さく、工事期間は短期間であるため、建設工事に伴う影響は限定的ではほとんど無いものであると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う擾乱等により生息環境への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在による浸食等により生息環境への影響が考えられるため選定した。	
海産哺乳類	○ ○	【調査・予測対象】ネズミイルカの個体数、分布状況及びアザラシ類の移動状況と滞留時間 【調査手法】調査方法： ●生物音調査(TPODs: 100~1200mの範囲内の生物音を記録可能)を6箇所(5箇所: 風車設置計画海域、3箇所: 5-15km離れた対照海域)に設置して実施(TPODs: 調査時には水温、塩分、深度、潮汐データを併せて取得) ●ビンガーラベル(衛星利用)調査・風車設置計画海域から6頭のハイロニアザラシと5頭のゼンガタアザラシにビンガーラベルを装着して衛星を利用して、その行動をモニターする。調査は周年。 ●航空機調査：毎月1回実施。 【予測手法】工事中の騒音や擾乱、ケーブルからの電磁波による生息環境への影響を現地観測結果等から定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う水中騒音等の影響により、生息個体への悪影響が予測された。工事区域における海産哺乳類の生息密度は小さいこと、工事期間は短期間であること等から、ケーブルからの電磁波は自然レベルより小さいこと等から、施設建設に伴う影響はほとんど無いものであると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う騒音や擾乱により生息環境に影響を及ぼすことが考えられたため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在及び稼働に伴い、生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。		
鳥類	○ ○	【調査・予測対象】鳥類の種類、個体数、分布・行動状況 【調査手法】航空機調査：飛行航路は南北方向26本のトランゼクト(2km間隔で約25km長)を設定して実施。 【予測手法】施設建設及び既存によるバードストライク、忌避、濁りによる採餌環境への影響等を既存資料及び調査結果から定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う生息環境への影響が予測された。建設区域を利用する鳥類密度が小さいこと、またブレードの高さを飛翔する鳥類が少ないこと等から、影響は小さいと評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う騒音等により生息環境を擾乱し影響を及ぼすことが考えられたため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在及び稼働に伴い、飛行経路の変更、休息地や採餌場の減少に影響を及ぼすこと等が考えられるため選定した。		
景観	主要な眺望点及び觀光資源並びに主要な眺望景観	—	○ ○	【調査・予測対象】眺望景観 【調査手法】写真及びフォトモンタージュ 【予測手法】写真及びフォトモンタージュ等により影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果等に基づく評価	風力発電施設の存在による眺望景観の変化が予測された。発電施設は沿岸から十分に視認できる距離にあるが、色調、デザイン、配置が整っていることから、景観への影響はほとんど無いものと評価した。	【施設の存在及び供用】 施設の存在により眺望景観の変化が考えられるため選定。
人と自然との触れ合いの活動の場	主要な人と自然との触れ合いの活動の場	—	—	—	—	

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 CAPE Wind洋上風力発電事業

調査名	CAPE Wind(米国)			摘要	
実施者	Energy Management Inc社				
調査の目的	・アメリカ合衆国マサチューセッツ州ケープコッド半島南沖合における洋上風力発電事業の環境影響評価の実施				
候補海域					
風力発電機及び設置基数	風力発電出力 : 468MW (3.6MW×130基)				
公表時期	2001年				
調査項目	調査・予測・評価方法	予測・評価結果	参考項目を選定(非選定とした理由)		
騒音 振動 低周波音	— — —	— — —	— — —		
水生活環境項目 質	— 底質・地質	【調査・予測対象】水深及び海底地形 【調査手法】調査方法: ●海底地形調査:船上から測深計(Fathometer)とサイドスキャッソナーによる、海底底質・土質調査と併せて実施。風力対象海域と海底ケーブル敷設海域(2001-2005年)。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から底質及び海底地形の変化について定性的に予測 【予測対象時期】施工工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	風車本体及びケーブルルート建設に伴う底質環境の変化が予測されたが、建設に伴う流れの変化、底質の変化は限られており、その影響は小さいものと評価された。	【工事に伴う一時的な影響】工事に伴う浮遊堆積物による地質変化に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】施設の存在及び利用により、堆積物による地質変化や海岸への影響が考えられるため選定した。	
水環境	流向・流速	○ ○	【調査・予測対象】流速 【調査手法】調査方法: ●船上からADCPにより計測。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から潮流への影響について定性的に予測 【予測対象時期】施工工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	風車本体及びケーブルルート建設に伴う流れの変化が予測されたが、局所的であるため、その影響はないものと評価された。	【工事に伴う一時的な影響】工事に伴う潮流への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】施設の存在及び利用により、潮流への影響が考えられるため選定した。
波浪	— 地形及び地質	— —	— —	— —	
その他環境	電波障害	○ ○	【調査・予測対象】風車本体及び海底ケーブルからの電磁波 【調査手法】調査方法: 既往文献値による調査 【予測手法】既往調査結果から電磁波による影響を定性的に予測 【予測対象時期】施工工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う騒音の影響が予測された。海底ケーブルから発生が想定される電磁波領域は非常に狭く、また、対照海域のバングラウンドから判断して、周辺への影響はほとんどないと評価した。	【工事に伴う一時的な影響】工事に伴う電磁波の影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】施設の存在及び利用により、電磁波の影響が考えられるため選定した。
水中騒音・海底振動	○ ○	【調査・予測対象】水中騒音 【調査手法】調査方法: 水中聴音器とサウンドアナライザーにより水中音を計測。水中聴音器は、海底からパイを立ち上げ、水中に設置。対象海域周辺の航路2点にて実施。 【予測手法】現地調査結果及び既往知見から水中音の影響を定性的に予測 【予測対象時期】施工工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う騒音の影響が予測された。最も大きい騒音は海底掘削によるものと想定されるが、工事中におけるそれらの騒音は一時的なものであり、周辺への影響はほとんどないと評価した。	【工事に伴う一時的な影響】工事に伴う周辺環境への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】施設の存在により、周辺の生物環境への影響が考えられるため選定した。	
海 洋 生 物	底生生物(マクロベントス)	○ ○	【調査・予測対象】岩礁・転石海域における表生ベントス相 【調査手法】調査方法: 音波探査調査、ビデオ・カメラ映像調査、採泥器調査(岩礁・転石海域)、風力対象海域と海底ケーブル敷設海域で実施。風力対象海域:9本のトランゼクトライン(1-4調査地点/トランゼクト)を設定し、サイドスキャッソナーと水中ビデオ、カメラで調査。検証のため教箇所で(エクマーパージ型採泥器)を実施。 【予測手法】生息場の改変に対する影響について現地調査結果等から定性的に予測 【予測対象時期】施工工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	風車本体及びケーブルルート建設に伴う掘削等による消失や濁りの影響が予測されたが、工事区域は局所的であるため、その影響は小さいものと評価された。	【工事に伴う一時的な影響】工事において、搬送や破壊に伴う生息場所への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】施設の存在により生息場の消失と改変が考えられるため選定した。
動物 ・植物 ・生態系	海草・藻類	○ ○	【調査・予測対象】海草・藻類の有無と種類 【調査手法】調査方法: ●音波探査調査(概要調査):海底地質等の調査時にサイドスキャッソナーの結果に表示された海草の分布を確認。 ●ビデオ・カメラ映像・採泥器調査、目視調査(海草精査):地質調査時にサイドスキャッソナーによって海草が確認された2海域とケーブル敷設海域のルイス湾で実施。9本のトランゼクトラインを設定し、船上からの水中ビデオ撮影・カメラ撮影、エクマンバーシー型採泥器によるサンプリングなどによりダイバーによる目視観察 【予測手法】工事の濁りについて堆積物の移動範囲を予測等することにより、生育環境への影響を定性的に予測 【予測対象時期】施工工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	風車本体及びケーブルルート建設に伴う掘削等による消失や濁りの影響が予測されたが、工事区域は局所的であるため、その影響は小さいものと評価された。	【工事に伴う一時的な影響】工事において、濁り、堆積、掘削に伴う生育場所への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】施設の存在により生息場の消失と改変が考えられるため選定した。
海 洋 生 物	海産哺乳類	○ ○	【予測対象】アザラシ類、クジラ類の生息状況 【調査手法】調査方法: 船上からの目視観測 【予測手法】騒音や擾乱に伴う生息環境への影響を現地観測結果等から定性的に予測 【予測対象時期】施工工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	風車本体及びケーブルルート建設に伴う騒音や作業船の往来等による人為活動により、生息環境の擾乱が予測されたが、一時的なものであることから、その影響は小さいものと評価された。また、施設の存在に伴い、生息地の消滅や電磁傷害・騒音等による影響が予測されたが、稼働区域は限られた範囲であることから影響は小さいと評価された。	【工事に伴う一時的な影響】工事に伴う騒音や擾乱により生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】施設の稼働に伴い、発生する騒音により、水中の生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。
鳥類	○ ○	【調査・予測対象】個体数、分布状況、利用海域、飛翔高度、飛翔位置など 【調査手法】●航空機調査、船舶調査(目視調査):調査頻度132回、トランゼクト32本、トランゼクト幅183~400m、総延長約800km。船舶調査は航空機調査の補完として実施。●レーダ調査:洋上のジャケットと陸上の2点から実施。1回当たり30~60分。 洋上風力開発海域に出没する可能性のある鳥類を、陸生鳥類、沿岸性鳥類、仲合鳥類の3種類に分け調査を実施している。 【予測手法】騒音や施設稼働に伴う生息環境、飛行ルートへの影響を現地観測結果等から定性的に予測 【予測対象時期】施工工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	風車本体及びケーブルルート建設に伴う騒音や作業船の往来等による人為活動により、生息環境の擾乱が予測されたが、一時的なものであることから、その影響は小さいものと評価された。また、施設の存在に伴い、生息地の消滅や電磁傷害・騒音等による影響が予測されたが、稼働区域は限られた範囲であることから影響は小さいと評価された。	【工事に伴う一時的な影響】工事に伴う騒音等により生息環境を擾乱し影響を及ぼすことが考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】施設の稼働に伴い、発生する騒音による影響、さらにハーネストライク等が考えられるため選定した。	
景観	主要な眺望点及び観光資源並びに主要な眺望景観	○ ○	【調査・予測対象】眺望景観 【調査手法】写真(陸上、船上)、フォトモンタージュ、景観シミュレーション 【予測手法】写真、フォトモンタージュ、景観シミュレーションにより影響を定性的に予測 【予測対象時期】施工工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	工事中の作業船舶等による景観への影響が予測されたが、工事期間に限られるため一時的なものであり影響は小さいと評価された。また、風力発電施設の存在による眺望景観への影響が予測されたが、発電施設は沿岸から長距離に位置していることから景観への影響はほとんどなく、観光船等からの眺望についても限定的な範囲であることから、影響は限られているものと評価した。	【施設の存在及び供用】工事に伴う作業船舶等による景観への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】施設の存在により眺望景観の変化が考えられるため選定した。
人と自然との触れる	主要な人と自然との触れる活動の場	— —	—	—	—

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 Na iKun洋上風力発電事業

調査名	Nadairi(ガナダ) ENMAX Corporation実施						調査
実施者	カナダ太平洋側Haida Gwaii島北東海嶺における洋上風力発電事業の環境影響評価の実施						
候補海域							
風力発電機及び設置基盤	風力発電所出力: 396MW (3.6MW×110基)	公表時期	2002年	調査手順	調査手順	調査手順	調査手順
候補海域	候補海域	主な調査対象	候補海域	調査手順	調査手順	調査手順	調査手順
天候予報	天候予報	調査手順	調査手順	調査手順	調査手順	調査手順	調査手順
気圧動	気圧動	—	—	—	—	—	—
風速・波浪	風速・波浪	—	—	—	—	—	—
生物	生物	—	—	—	—	—	—
生活環境項目	生活環境項目	—	—	—	—	—	—
底質・地質	底質・地質	○ ○	【調査・予測対象】海底地形、底質分布、海底地質 (25-50m) 【調査手順】調査方法: ●遠隔地質調査法:エアーガン、Huntec DTS、Seister surface-towed boomer、Unihorn surface-towed boomer、エコサウナー、サイドスキャナーバー、マルチビームなどによる調査。風力対象海底域を含む180km ² の範囲、水深は10~30m ●探査器装置:IKONグラフサンプラー、バイプロコアサンプラーによる調査。風力対象海底域でグラブサンプル約100地点、バイプロコア約20地点	—	—	—	—
水質	水質	—	—	—	—	—	—
底質・地質	底質・地質	○ ○	【調査・予測対象】海底地形、底質分布、海底地質 (25-50m) 【調査手順】調査方法: ●DTS等底質調査 (10m) ●底質調査 (10cm)、底質分析 (10cm)による底質の現況動植物状況等のモデルにより定量的に予測 【予測対象時間】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	—	—	—	—
流向・流速	流向・流速	○ ○	【調査・予測対象】流速・流向 【調査手順】調査方法: ●DTS等底質調査 (10m) ●底質調査 (10cm)、底質分析 (10cm)による底質の現況動植物状況等のモデルにより定量的に予測 【予測対象時間】現地への影響について現地調査結果やモデル等により定量的に予測 【予測対象時間】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	—	—	—	—
波浪	波浪	—	—	—	—	—	—
地形及び地質	地形及び地質	—	—	—	—	—	—
風波露西	風波露西	—	—	—	—	—	—
その他	その他	—	—	—	—	—	—
水中騒音・海底振動	水中騒音・海底振動	○ ○	【調査・予測対象】水中騒音、海底振動 【調査手順】調査方法: ●水中騒音器調査:OBR(Ocean Bottom Hydrophone)により水中音を計測。 ●底質調査:IKONグラフサンプラー(Bottom Seismometer)により海底の現況動植物状況を計測。 【予測対象時間】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	—	—	—	—
底生生物(マクロペシスト)	底生生物(マクロペシスト)	○ ○	【調査・予測対象】底生・内生・シント相 【調査手順】調査方法: ●ビデオ映像調査:採泥器調査、底曳網調査、延縄調査:風力対象海底33地点、対照海底10地点、潮下帯2箇所。海底調査地点は鳥類と海底底質に採用されたトランゼクトライイン上に4km間隔で設定し、調査範囲は直角500mの円域内。潮下帯は125~50m間隔で汀線と直角にトランゼクトを設定。海底にはトランゼクトを設け、海底底質はドライ撮影 (500m曳網)、Van Veenオフラグサンプル (0.1m ²)、大型ベントス・底層魚類調査 (100m ²)、底魚延縄 (200m、3~4m間隔×50フック)、底曳網 (開口部4m×1.6m、3.8cm ² m ⁻²)、ゴッドエンドトラップ (0.6m ²) ●目視調査:ビデオ、芦荻映像調査:潮下帯は350m±1.3kmの範囲を対象。潮下帯: 25~50m間隔で汀線と直角にトランゼクトを設定。潮下帯は芦荻と現況動植物を観察。動物は生態量の相対的下限法で採用。芦荻撮影併用。 【予測対象時間】現地への影響について現地調査結果等から定性的に予測 【予測対象時間】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	—	—	—	—
海洋生物(魚介類)	海洋生物(魚介類)	○ ○	【調査・予測対象】底魚 【調査手順】調査方法: ●底曳網調査:延縄調査、ビデオ映像調査:風力対象海底33地点、対照海底10地点、潮下帯2箇所。海域調査地点は鳥類と海底底質に採用されたトランゼクトライイン上に4km間隔で設定し、調査範囲は直角500mの円域内。調査方法は小型オッタートロール (開口部4m×1.6m、3.8cm ² m ⁻²)、大型ベントス・底層魚類調査 (100m ²)、底曳網 (500m、3~4m間隔×50フック)、ビデオ撮影 (500m曳網) ●目視調査:ビデオ、芦荻映像調査:潮下帯は350m±1.3kmの範囲を対象。潮下帯: 25~50m間隔で汀線と直角にトランゼクトを設定。潮下帯は芦荻と現況動植物を観察。動物は生態量の相対的下限法で採用。芦荻撮影併用。 【予測対象時間】現地への影響について現地調査結果等から定性的に予測 【予測対象時間】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	—	—	—	—
海草・藻類	海草・藻類	○ ○	【調査・予測対象】表層の藻類 【調査手順】調査方法: ●ビデオ映像調査:風力対象海底33地点、対照海底10地点、潮下帯2箇所。海域調査地点は鳥類と海底底質に採用されたトランゼクトライイン上に4km間隔で設定し、調査範囲は直角500mの円域内。調査方法は小型オッタートロール (開口部4m×1.6m、3.8cm ² m ⁻²)、大型ベントス・底層魚類調査 (100m ²)、底曳網 (500m、3~4m間隔×50フック)、ビデオ撮影 (500m曳網) ●目視調査:ビデオ、芦荻映像調査:潮下帯は350m±1.3kmの範囲を対象。潮下帯: 25~50m間隔で汀線と直角にトランゼクトを設定。潮下帯は芦荻と現況動植物を観察。動物は生態量の相対的下限法で採用。芦荻撮影併用。 【予測対象時間】現地への影響について現地調査結果等から定性的に予測 【予測対象時間】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	—	—	—	—
動物・植生生態系	動物・植生生態系	—	—	—	—	—	—
海産哺乳類	海産哺乳類	○ ○	【調査・予測対象】タクジ類の個体数等 【調査手順】調査方法: ●航空機調査 ①位置、時間、飛行距離、個体数、行動の内容、降水、海面の散乱状態、海塚状態。 ②対象飛行区域は調査許可申請範囲:風力対象海底域、底曳網八卦輪敷設域、底曳網八卦輪敷設域、海域観測域。 ③トランゼクト法を採用:海域で調査飛行によりトランゼクト線は2km (風力海底)、4km (対照海底)、10km (初期踏査)。飛行速度は144~185km/h、高度は183m、芦荻撮影を併用。 ●船舶調査 ①GPS位置、時間、目標物までの距離方、群れの大きさ、種類、判別の難しさ、行動の内容、降水、水面の散乱、海面状態。 ②対象飛行区域は調査許可申請範囲:風力対象海底域、底曳網八卦輪敷設域、底曳網八卦輪敷設域、海域観測域。 ③トランゼクト法を採用:海域で調査飛行によりトランゼクト線は2km (風力海底)、4km (対照海底)、10km (初期踏査)。 ●フェリーハイ航行域 ①種類の確認、個体数、行動、飛翔方向、気象状況、G P S位置情報 ②フェリーハイ航行域 ③トランゼクト法でトランゼクト幅は250mと2000mを採用し、いずれも3つのサブトランゼクトを設定。 ●フェリーハイ調査 対象海域はフェリーハイ航行路沿いで観測方法は船舶調査と同様。ボイスレコーダ併用。 ●目視調査 (陸上観測):ヨクジの回遊範囲 ①種類、個体数、移動方向、陸際からの距離、日時、行動の内容、海域状態。 ②ヨクジの回遊範囲 ③双眼鏡による観察。 【予測対象時間】施設設置による出現への影響を調査結果等から定性的に予測 【予測対象時間】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	—	—	—	—
鳥類	鳥類	○ ○	【調査・予測対象】鳥類 【調査手順】調査方法: ●航空機調査 ①GPS位置、時間、地形、ウェイポイント、種又は属レベルの識別結果、個体数、初期確認行動、船舶進行方向との偏角、トランゼクト外の個体 ②IUT&TBA:海底 ③トランゼクト法でトランゼクト幅は200m、間隔は1~2km。トランゼクト数は36で延長は730km。無指向性マイクとボイスレコーダー、GPS位置情報 ④IUP:Investigative Use Permit TBA: Turbine Buffer Area 【予測手順】調査結果等から発電施設の影響を定性的に予測 【予測対象時間】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	—	—	—	—
昆蟲	昆蟲	○ ○	【調査・予測対象】跳躍昆蟲 【調査手順】芦草、船上、船下、フォトモンタージュ、景觀シミュレーションにより影響を定性的に予測 【予測手順】芦草、フォトモンタージュ、景觀シミュレーションにより影響を定性的に予測 【予測対象時間】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	—	—	—	—
主要な絶滅点及び観光資源並びに主要な絶滅点	主要な絶滅点及び観光資源並びに主要な絶滅点	○ ○	【調査・予測対象】跳躍昆蟲 【調査手順】芦草、船上、船下、フォトモンタージュ、景觀シミュレーションにより影響を定性的に予測 【予測手順】芦草、フォトモンタージュ、景觀シミュレーションにより影響を定性的に予測 【予測対象時間】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	—	—	—	—

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 London Array洋上風力発電事業

調査名	London Array(英海) DONG Energy社、Masdar社他				摘要
実施者					
調査の目的	・英国南東部海域における洋上風力発電事業の環境影響評価の実施				
候補海域					
風力発電機及び設置基数	風力発電所出力：630MW (3.6MW×175基)				
公表時期	2005年5月				
参考項目	実施 有無	調査 方法	調査・予測・評価手法	予測・調査結果	参考項目を選定し評価した理由
大騒音	—	—	—	—	—
気振動	—	—	—	—	—
環底周波音	—	—	—	—	—
水質	一般項目	○ ○	【調査・予測対象】海水中の水質一般項目等の濃度 【調査手法】海水サンプリングによる採水及び分析 【予測手法】調査結果及び既存資料等から水質の悪化や堆積物からの濁り、栄養塩の溶出等の影響について定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	施設及びケーブルルート建設区域における濁りの発生による水質の悪化が予測された。濁り発生は一時的なものであり、自然環境に与える影響は小さいものと評価された。	【工事に伴う一時的な影響】 工事において、攪乱や破壊に伴う生息場所への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在に伴い洗掘や濁りの影響が考えられるため選定した。
水環境	堆積物中の重金属類及び化学物質等	○ ○	【調査・予測対象】堆積物中の重金属類、化学物質等 【調査手法】グラブ探査器により堆積物を採取し、GC-MS、ICP-OESにより、有機及び無機化学物質等を分析 【予測手法】調査結果等から工事中における影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	施設建設に伴う堆積物の攪乱による影響が予測された。工事区域は狭い範囲であり、短期間であることから影響は一時的ではなくないと評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事において、攪乱に伴う生息場所への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在に伴い洗掘等による影響が考えられるため選定した。
波浪・流向・流速	— ○	【調査・予測対象】施設周辺の海水の流れ 【調査手法】既往資料から知見を収集 【予測手法】施設設置後の流れを定性的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う流れの変化が予測されたが、施設区域の範囲は限定的であるため、流れの変化に対する影響は小さいものと評価された。	【施設の存在及び供用】 施設の存在により、潮流への影響が考えられるため選定した。	
地形及び地質	— —	—	—	—	—
その他の環境	電波障害	— ○	【調査・予測対象】ケーブルからの電磁波 【調査手法】既往資料から知見を収集 【予測手法】既往知見から電磁波による影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	海底ケーブルからの電磁波の影響が予測された。既往知見及びケーブルの埋設深度を考慮すると、周辺への影響はほとんどないものと評価した。	【施設の存在及び供用】 施設の存在により、周辺の生物環境への影響が考えられるため選定した。
水中騒音・海底振動	○ ○	【調査・予測対象】水中騒音 【調査手法】既往資料から知見を収集 【予測手法】既往知見から水中騒音による影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う水中騒音の生物への影響が予測された。既往知見及び水中騒音レベルを考慮すると、周辺への影響はほとんどないものと評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う周辺環境への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在により、周辺の生物環境への影響が考えられるため選定した。	
底生生物(マクロベントス)	○ ○	【調査・予測対象】底生生物 【調査手法】既往資料等により対象区域の底生生物を調査 【予測手法】施設建設における擾乱等による影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う生息場の擾乱が予測された。影響範囲はきわめて局所的小さく、工事期間は短期間であるため、建設工事に伴う影響は限定的ではなくど無いものであると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う底生生物への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在により生息環境への影響が考えられるため選定した。	
海洋生物	漁業生物(魚介類)	○ ○	【調査・予測対象】水産有用種の貝類 【調査手法】既往資料等により対象海域の有用種を調査 【予測手法】施設建設における濁りや電磁波による影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う生息場の擾乱が予測された。影響範囲はきわめて局所的小さく、工事期間は短期間であるため、建設工事に伴う影響は限定的ではなくど無いものであると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う魚介類への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在により漁業生物を含めた漁業への影響が考えられるため選定した。
動物・植物・生態系	海草・藻類	○ ○	【調査・予測対象】海草・藻類 【調査手法】既往資料等により対象区域の海草・藻類を調査 【予測手法】施設建設における擾乱等による影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う生息場の擾乱が予測された。影響範囲はきわめて局所的小さく、工事期間は短期間であるため、建設工事に伴う影響は限定的ではなくど無いものであると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う擾乱等により生息環境への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在による浸食等により生息環境への影響が考えられるため選定した。
海産哺乳類	○ ○	【調査・予測対象】クジラ類、アザラシ類の種類及び量 【調査手法】航空機及び船舶による調査 【予測手法】工事中及び施設稼働の影響を既往知見に基づき定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う水中騒音の影響により、生息個体への悪影響が予測された。工事区域内には海産哺乳類の生息が確認されておらず、工事の騒音を最小限に抑える工法を採用するため、建設工事伴う影響はほとんど無いものであると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う騒音等により生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在及び稼働に伴い、生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。	
鳥類	○ ○	【調査・予測対象】鳥類の分布 【調査手法】船舶調査、航空機調査 【予測手法】施設存在による直接的、副的、短期的・長期的な個体への影響等を既存資料及び調査結果から定性的に予測、渡り鳥については特定種をターゲットに既往資料に基づいて定性的に影響を予測、また衝突予測モデルによるバードストライクについて予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う生息環境への影響が予測された。建設区域を利用する鳥類は避難すること、またプレードへの衝突を避けることが予測されるため、影響は小さいと評価した。また、建設工事期間が鳥類の集積が高密度になる時期を避けることから、影響は低減されると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う騒音等により生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在及び稼働に伴い、飛行経路の変更、休息地や採餌場の減少に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。	
景観	主要な眺望点及び観光資源並びに主要な眺望景観	— ○	【調査・予測対象】眺望景観 【調査手法】写真及びフォトモンタージュ、距離別視認性を試算 【予測手法】写真及びフォトモンタージュ等により影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】調査結果等に基づく評価	風力発電施設の存在による眺望景観の変化が予測された。発電施設が沿岸から長距離に位置していること等により、景観への影響はほとんどないものと評価した。	【施設の存在及び供用】 施設の存在により眺望景観の変化が考えられるため選定。
人と自然との触れ合いの活動の場	主要な人と自然との触れ合いの活動の場	— —	—	—	—

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 Barrow洋上風力発電事業

調査名 実施者		Barrow (英國) Barrow Offshore Wind Ltd社			摘要	
調査の目的		・英国北西部海域における洋上風力発事業の環境影響評価の実施				
候補海域						
風力発電機及び設置基数		風力発電所出力：90MW (3MW×30基)				
公表時期		2002年2月				
参考項目		主調査対象 主調査方法 主調査結果	調査・予測・評価手法		予測・評価結果	参考項目を選定した理由
大気 振動 環境	騒音	— —	—		—	—
	振動	— —	—		—	—
	低周波音	— —	—		—	—
水質	懸濁物質	○ ○	【調査・予測対象】海水中の懸濁物の濃度 【調査手法】光学濁度センサーによるモニタリング及び水質分析による懸濁物質(SS) 【予測手法】調査結果等から工事中におけるモノバイル工事からの堆積物拡散を定性的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価		施設及びケーブルルート建設区域における濁りの発生が予測されたが、建設に伴う堆積物からの濁り発生は小さいものと評価された。	
	底質	— ○	【調査・予測対象】堆積物中の重金属類の濃度 【調査手法】重金属(Al, Ba, Cd, Cr, Cu, Fe, Ig, Ni, Sn, V, Zn)、総石油炭化水素、およびガソリン放出放射性核種の分析、調査地点：施設周辺5地点、ケーブルルート3地点。サンプル採取はグラブ採泥器を使用。 【予測手法】調査結果等から堆積物中の重金属等の物質の蓄積を定性的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価		施設及びケーブルルート建設区域における底質の変化が予測されたが、現地底質調査等から、建設に伴う堆積物からの濁り発生は小さく、底質の変更への影響は小さいものと評価された。	
	波浪、流向・流速	○ ○	【調査・予測対象】施設周辺域の流れ 【調査手法】多層流向流速計ADCPによるモニタリング 【予測手法】施設設置後の流れをモデルにより定量的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価		発電施設建設に伴う流れの変化が予測されたが、施工区域の範囲は限定的であるため、流れの変化に対する影響は小さいものと評価された。	
その他の環境	地形及び地質	— —	—		—	
	電波障害	— ○	【調査・予測対象】ケーブルからの電磁波 【調査手法】ハンディセンサーによるモニタリング 【予測手法】調査結果から電磁波による影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価		施設及びケーブルルートからの電磁波の影響が予測された。周辺へ広がる電磁波の減衰を考慮すると、周辺への影響はほとんどないものと評価した。	
	水中騒音・海底振動	○ ○	【調査・予測対象】水中騒音及び振動 【調査手法】船舶から水中騒音計測装置を下層まで降ろし、船舶の騒音を測定 【予測手法】現地測定結果等から影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価		発電施設建設に伴う騒音や振動の影響が広く予測された。現地海域における水中騒音及び振動レベルを考慮すると、周辺への影響はほとんどないものと評価した。	
海洋生物	底生生物(マクロベントス)	— ○	【調査・予測対象】潮下帯、潮間帯の底生生物、表在性底生生物 【調査手法】施設周辺及びケーブルルート等において3ライン、陸域から高・中・低水深帯においてグラブ採泥器にてサンプリング、採泥面積0.1m ² 、採泥深15cmで評価。 【予測手法】モノバイル工事、ケーブルルート工事等による底生生物の擾乱を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価		発電施設建設に伴う擾乱や底泥の巻き上げにより生息場の消失及び変改が予測された。対象区域は限定的であり、影響は小さいものと評価した。	
	漁業生物(魚介類)	— ○	【調査・予測対象】秋季：カレイ類及び貝類、冬季：タイ、サバ類等、春季：産卵期の魚種 【調査手法】トロール網漁：Beam Trawling (網幅2m、海底面上30cm)、調査は7測線、15分曳航、測線。Otter Trawling (網幅26m)、調査は設置域3測線、周辺域4測線、船速2.0-2.5ノット、調査時期は10月(秋季)、12月(冬季)及び3月(春季) 【予測手法】施設周辺における魚類密度を把握し、影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価		発電施設建設に伴う生息場の消失及び変改が予測された。建設区域には、魚類相が豊富な傾向を避けていたため、施設建設に伴う影響は限定的で小範囲である評価した。	
	海草・藻類	— —	—		—	
動物、植物、生態系	海産哺乳類	○ —	【調査・予測対象】クジラ類、アザラシ類の種類及び量 【調査手法】生物音調査(TPODs)による調査 【予測手法】工事中の影響を調査結果から予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価		発電施設建設に伴う騒音や擾乱により生息環境への影響が予測された。建設区域においては海産哺乳類の生息が多くないと考えられることから、施設建設に伴う影響は小さいものと評価した。	
	鳥類	○ ○	【調査・予測対象】鳥類の分布 【調査手法】船舶調査、航空機調査、渡り鳥調査 【予測手法】施設による障壁に伴う飛行経路への影響、渡りへの影響等を調査結果から定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価		発電施設建設に伴う騒音等により生息環境への影響が予測された。建設工事期間が鳥類が高密度に集積する時期を避けていること、施設稼働区域における鳥類の密度は低く、ブレードの高さにおいても衝突を誘発する高さではないこと等から、施設建設に伴う影響は小さいものと評価した。	
	景観	主要な眺望点及び觀光資源並びに主要な眺望景観	— ○	【調査・予測対象】眺望景観 【調査手法】写真及びフォトモンタージュ 【予測手法】写真及びフォトモンタージュ等より影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】調査結果等に基づく評価		風力発電施設の存在により眺望景観が変化し、周辺住民への影響等が予測される。発電施設は沿岸から長距離に位置しており、また、視認域の沿岸部にはほとんど住民の居住がないこと等から、発電施設は認識はされるが、景観への影響はほとんどないと評価した。
人と自然との触れ合いの活動の場	主要な人と自然との触れ合いの活動の場	— —	—		—	

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 Alpha Ventus 洋上風力発電事業

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 Kriegers flakII洋上風力発電事業

調査名	Kriegers flakII (スウェーデン)			摘要	
実施者	VATTENFALL社				
調査の目的	・スウェーデン南部海域における洋上風力発電事業の環境影響評価の実施				
候補海域					
風力発電機及び設置基数	風力発電所出力 : 640MW (5MW×128基)				
公表時期	2002年4月				
参考項目	水深(水質) 騒音 振動 低周波音	調査・予測・評価手法	予測・評価結果	参考項目を選定/非選定とした理由	
大気環	一般項目	- ○	【調査・予測対象】水温、塩分、溶存酸素濃度 【調査手法】既往現地調査結果による知見を収集 【予測手法】流動モデルにより既往調査結果等から影響を定量的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	施設及びケーブルルート建設区域において海水の流れの変化による水質変化が予測された。施設建設に伴う水質へ与える影響はほとんど無いものと評価された。	【施設の存在及び供用】 施設の存在に伴い、水質環境への影響が考えられるため選定した。
水環境	底質	- -	-	-	
水質	一般項目	- ○	【調査・予測対象】施設周辺の海水の流れ 【調査手法】既往現地調査結果による知見を収集 【予測手法】既往現地調査結果等からモデル計算等により施設設置後の流れを定量的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う流れの変化が予測されたが、モデル計算の結果、発電施設区域の流れの変化は最大3-4%であり、影響は小さいものと評価された。	【施設の存在及び供用】 施設の存在により、潮流への影響が考えられるため選定した。
地形及び地質	- -	- -	-	-	
電波障害	- -	- -	-	-	
水中騒音・海底振動	- -	- -	-	-	
その他	底生生物 (マクロベントス)	○ ○	【調査・予測対象】底生生物 (ペントス) 【調査手法】既往現地調査結果による知見を収集 【予測手法】工事中における堆積物の擾乱による影響、海水の流れの変化による餌環境及び海草類等の変化による影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う堆積物の懸濁等による生息場の擾乱が予測された。影響範囲はきわめて局所的であり、工事期間は短期間であるため、建設工事に伴う影響は限定的でほとんど無いものであると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う底生生物への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在により生態環境への影響が考えられるため選定した。
海洋生物	漁業生物 (魚介類)	○ ○	【調査・予測対象】魚介類 (水産有用種等) 【調査手法】既往現地調査結果による知見を収集 【予測手法】工事中の騒音・振動及び堆積物の懸濁、施設稼働時における光・陰、堆積物の再堆積の変化、油等の汚染、及び餌集に対する影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う騒音振動、堆積環境の変化、構造物設置による餌集効果等による生息環境への影響が予測された。影響範囲はきわめて局所的であり、工事期間は短期間であることから、建設工事に伴う影響はほとんど無いものであると評価した。また、構造物設置に伴う餌集効果、漁業制限区域を設定することから、魚類相環境への変化が予測評価された。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う魚介類への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在により漁業生物を含めた漁業への影響が考えられるため選定した。
動物、植物	海草・藻類	○ ○	【調査・予測対象】海草・藻類 【調査手法】既往現地調査結果による知見を収集 【予測手法】工事中の渦流による擾乱の発生による影響、施設稼働時における流れの変化による生息環境への影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う工事中の擾乱及び施設稼働時における海水の流れの変化による生息環境への影響が予測された。对象域の現存量密度は低いこと、工事期間は短期間であること、流れの変化は起こらないことが示されていることから、生息環境への影響はほとんど無いものであると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う擾乱等により生息環境への影響が考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在による浸食等により生息環境への影響が考えられるため選定した。
生態系	海産哺乳類	○ ○	【調査・予測対象】アザラシ、ネズミイルカ等の分布状況 【調査手法】調査方法： ●生物音調査(TPODs)、ピンガーブロード(衛星利用)調査、航空機調査を実施。 【予測手法】工事中の騒音や擾乱、ケーブルからの電磁波による生息環境への影響を現地観測結果等から定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴う水中騒音・振動の影響により、生息個体への悪影響が予測された。工事中においては、工事近傍での海産哺乳類への少なからずの影響が発生するが、施設稼働時においては影響はほとんど無いものであると評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う騒音や擾乱により生息環境への影響を及ぼすことが考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在及び稼働に伴い、生息環境に影響を及ぼすことが考えられるため選定した。
鳥類		○ ○	【調査・予測対象】鳥類の種類、個体数、分布、飛行高等 【調査手法】調査方法： ●船舶調査(目視調査)：508km ² 範囲を4km間隔トランゼクトを設定して実施。 ●航空機調査：840km ² 範囲を2km間隔トランゼクトを設定して実施。 ●陸域からの目視観測、船舶レーダー(昼夜)を実施。 ●レーダー観測： 【予測手法】施設建設及び存在によるバードストライク、忌避への影響等を既存資料及び調査結果から定性的に予測 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】現地調査結果と既往知見に基づく評価	発電施設建設に伴い衝突、採餌場の擾乱、渡り鳥に対する障壁、生息地の喪失の影響が予測された。現地調査結果及び既往知見より、これらの影響はほとんどないと評価した。	【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う騒音等により生息環境を擾乱し影響を及ぼすことが考えられるため選定した。 【施設の存在及び供用】 施設の存在及び稼働に伴い、飛行経路の変更、休息地や採餌場の減少に影響を及ぼすこと等が考えられるため選定した。
景観	主要な眺望点及び観光資源並びに主要な眺望景観	- ○	【調査・予測対象】眺望景観 【調査手法】写真及びフォトモンタージュ 【予測手法】写真及びフォトモンタージュ等より影響を定性的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】調査結果等に基づく評価	風力発電施設の存在による眺望景観の変化が予測された。発電施設は沿岸からかろうじて視認できる距離にあり、沿岸からの眺望は影響にあるレベルにはならないと評価した。	【施設の存在及び供用】 施設の存在により眺望景観の変化が考えられるため選定。
人と自然との触れ合いの活動の場	主要な人と自然との触れ合いの活動の場	- -	-	-	

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 Anholt 洋上風力発電事業

調査名	Anholt (アンホルト)				調査
実施者	DONG Energy社				
調査の目的	・ユートランド半島のDjurslandとAnholt島における洋上風力発電事業の環境影響評価の実施				
候補海域					
風力発電機及び設置基数		風力発電所出力 : 400MW (3.5MW×111基)			
公表時期		2008年11月			
大気 騒音 振動 低周波音	参 考	工事(土地) の実施状況	調査・予測・評価手法		予測・評価結果
	水質	○ ○	【調査・予測対象】基礎生産量、有機態炭素、溶存酸素濃度 【調査手法】近傍の既往調査結果によりベースライン条件を推定 【予測手法】数値モデルにより上記3項目の濃度変化を定量的に予測 【予測対象時期】掘削工事時、施設稼働時 【評価手法】モデル予測結果とベースライン濃度との比較		風車基盤や観測タワー基盤がもたらす生物環境が基礎生産量、有機態炭素等の堆積・無機化、海底付近の溶存酸素濃度に及ぼす影響を評価した結果、濃度変化は長期化するが、その変化量はベースライン濃度（建設前の状態）と大きく変化することはなく、また、変化の範囲も広くないことから全体的な影響は軽微と評価された。
	底質	○ -	【調査・予測対象】水中懸濁物濃度、底質の粒度組成 【調査手法】近傍の既往調査結果よりベースライン条件を推定 【予測手法】数値モデルにより懸濁物濃度と堆積量を推定 【予測対象時期】掘削工事時、施設稼働時 【評価手法】モデル予測結果と各種底質濃度（魚類、透視度、堆積厚）との比較		風車の基礎工事や海底ケーブルの埋設工事に伴う水中懸濁物濃度の変化や海底堆積量による数値モデルにより予測した結果、水中懸濁物濃度は魚類を対象とした区域を下回り、透視度の基準値については一時的に上回った。また堆積量には風車周辺以外は1mm程度であった。以上のことからこれらの影響は局所的でかつ短期間のものであり全体としての影響は軽微と評価された。
	水環境	- ○	【調査・予測対象】波浪の反射と折れ、風速 【調査手法】代表的な年と強風時（台風時）を対象に解析 【予測手法】数値モデル計算等により施設設置後の波と風の減衰を定量的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】施設建設に伴う波浪・風の減衰割合から評価		風車建設に伴う基礎やパイアルあるいは風車本体がもたらす波浪と風速の減衰について数値モデルにより予測した結果、両者の変化は長期的には直るものであるが、いずれもその減衰率は小さく、変化の範囲も局所的であった。これらのことから全体的な影響は軽微と評価された。
その他の環境	波浪	-	【調査・予測対象】施設周辺の流れと成層状況 【調査手法】代表的な年と強風時（台風時）を対象に解析 【予測手法】数値モデル計算等により施設設置前後の流れと成層状況を定量的に予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】施設建設に伴う波浪・風の減衰割合から評価		流れの変化については台風時の方が顕著であるがその変化量（減速、増速）は小さい。また通常の流れで成層破壊は風車の下流側でわずかに発生する程度であった。以上のことから流れと成層状況の影響は長期的なものではあるが、その強度は少ないのであることから全体的な影響は軽微であると評価された。
	流況と成層	- ○	【調査・予測対象】施設周辺の流れと成層状況 【調査手法】既往資料収集と現地踏査調査 【予測手法】既往の結果に基づく定性的な解釈 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】流れと成層状況について施設設置前後の比較		流れの変化については台風時の方が顕著であるがその変化量（減速、増速）は小さい。また通常の流れで成層破壊は風車の下流側でわずかに発生する程度であった。以上のことから流れと成層状況の影響は長期的なものではあるが、その強度は少ないのであることから全体的な影響は軽微であると評価された。
	海岸地形	- ○	【調査・予測対象】海岸地形、海底泥食 【調査手法】既往資料収集と現地踏査調査 【予測手法】既往の結果に基づく定性的な解釈 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】波浪予測結果と海岸過程との対応を想定		波浪解析結果に現地の海底泥食や海底過程を対応させ、波浪の減衰がもたらす泥食や堆積の変化を定量的に推定した。その結果、海岸地形の変化は長期的には互いぶつかりの強度は少ないが殆どない状況で、対応する範囲も局所的であることから、全体的な影響は軽微と評価された。
	海底地形	- ○	【調査・予測対象】海底地形 【調査手法】水中懸濁物の分散、移動を把握 【予測手法】波浪などに依る流況予測結果に基づく懸濁物移送の定量的な解釈 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】懸濁物移送量に基づく評価		風車設置に伴う波浪・流況の変化が水中懸濁物の移送を変化させることにより、海底地形の変化の発生を確認した。その結果、水中懸濁物移送量の変化が微量であることが分かり、海底地形に影響を及ぼさないと評価された。
生物	電波障害	-	【調査・予測対象】電波障害 【調査手法】既往資料		-
	水中騒音・海底振動	-	-		-
	Benthic Fauna	○ ○	【調査・予測対象】底質、Benthic Fauna（種類、個体数、バイオマス） 【調査手法】底層生物の現地調査と室内分析 【予測手法】現地調査結果と既往地盤に基づく評価基準等の作成。検討事象は重力基礎、浚渫、掘削などのワークステップ。 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】生物種（無脊椎動物）毎にインパクトに対する感受性を設定し、これと設定したインパクト基準に基づき評価。		工事中の影響では直接環境の喪失が影響としては小～中程度と評価されたが、海底のぐあい、懸濁物の拡散や堆積に関しては、その影響は小さく長期的で限定的であるから全般的に影響は軽微であると評価された。
	Benthic Habitats	- ○	【調査・予測対象】現地調査結果（生物相、底質）、予測結果（流況）既往データ 【調査手法】現地調査結果、既往資料 【予測手法】統計モデル（PSL：部分最小二乗法）による予測 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】応答変化を経過食者、堆積物食者、雑食者とし統計解析により建設前後の相違から影響を評価		底質の変化、付着基盤の変化ならびにフードフラックスの変化はいずれも直線的で長期的に影響することが予測されたが、その程度は小さくかつ局所的（フードフラックスは広域）であったことから全体的な影響は軽微と評価された。
動物・植物・生態系	魚類生物（魚介類）	-	-		-
	海鳥類	-	-		-
海産哺乳類	アザラシ	○ ○	【調査・予測対象】アザラシ (Harbour & Grey Seal)、ネズミイルカ (Harbour Porpoise) の分布状況 【調査手法】調査方法：既存データ（衛星、航空機トランセクト、テレメトリー）、現地調査（生物音計測：C-POD、水中騒音計測） 【予測手法】ENFAを使用して上記2種類の棲息海域を把握するとともに、これらの海域における各種影響要因のレベルを算定 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】アザラシやネズミイルカの棲息海域における各種影響要因のレベルの算定結果に、これらの生物の環境適応性（水中騒音、懸濁物濃度、障壁発生事象など）を対応させ影響の有無を評価		【工事に伴う影響評価】 主要な影響要因はバル干打込み時の水中騒音でアザラシもネズミイルカも20km以内では一時的な影響を受けが、工事は一時的なものであることから当地域における種々な移動行動に及ぼす影響は軽微であると評価された。 【施設の存在及び供用】 風車本体、スコアリング防止基盤、海底ケーブルなどが流れる際の騒音や、海底底質、電磁界等が変化させ、これが局所的であることから全般的に影響は軽微と評価された。
	海産哺乳類	- ○	-		-
鳥類	鳥類	○ ○	【調査・予測対象】鳥類の種類、個体数、分布状況、飛行高度等 【調査手法】調査方法：船舶調査トランセクト、飛行機トランセクト、レーダー監視等 【予測手法】工事中に関しては既往に基づき鳥類島嶼類の感受性の程度に問うける情報をもとに鳥類島嶼や船の移動航行等による影響を評価する。 【調査手法】現地調査結果、既往情報 【予測手法】飛行高度計測（C-POD、水中騒音計測） 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】上記予測手法で検討した結果に基づき総合的な評価を行う。		【工事に伴う影響評価】 建設工事とともに鳥類島嶼や船の移動航行等による影響を評価した。これに伴い種類の移動に關しても軽微な影響と評価された。 【施設の存在及び供用】 風車の移動に伴う鳥類島嶼の移動、棲息環境の変化、障壁障害、港の衝突に關するは長期的な影響を及ぼすが、その程度は軽微であると評価された。一方、大型の船の移動に關しては衝突の危険性が高いため、運転中に避難する可能性があることから、大型の船の移動に關するは短期的な影響を及ぼすが、その程度は軽微であると評価された。 【工事に伴う一時的な影響】 工事に伴う鳥類島嶼の移動を惹起することが考えられたため遅延した。
景観	主要な眺望点及び観光資源並びに主要な眺望景観	- ○	【調査・予測対象】眺望景観、周辺社会条件、自然条件（海岸の形状や形態など） 【調査手法】フォトモンタージュ 【予測手法】写真及びフォトモンタージュ等により影響を定性的に予測（風車配置変更、昼夜別） 【予測対象時期】施設稼働時 【評価手法】周辺の自然条件や社会条件の感受性を考慮した眺望に基づき評価		DjurslandとAnholtからの眺景は方位的に局所的ではあるが影響の程度が大きかつ長期的なもので、合体としての影響は重大であると評価された。一方、海景については広大な海域における占有力率が少ないと評価された。これは景観は中程度の影響を及ぼすが、騒音による影響は軽微であると評価された。
	主要な人と自然との触れ合いの活動の場	- -	-		-
人と自然との触れ合いの活動の場	観光・レクリエーション	○ ○	【調査・予測対象】観光・レクリエーションの内容と場所（海岸、海城、陸城） 【調査手法】現地踏査と沿岸地盤における港湾関係の機関から情報収集 【予測手法】利用範囲と当該地域における観景や騒音レベルを検討 【予測対象時期】施設工事中及び施設稼働時 【評価手法】レクリエーションの種類ごとにその範囲と景観や騒音の状況を確認し影響の程度を定性的に評価。		【工事に伴う影響評価】 沖合におけるプレジャーボートやハンティング、釣り、ダイビングに対する影響は軽微と評価。沿岸部のレクリエーションやアドベンチャーツアーやボート等に対する影響は中程度の影響を及ぼすが、騒音による影響は軽微であると評価された。 【施設の存在及び供用】 風車の運転による騒音や景観がDjurslandとAnholtの観光やレクリエーションに対する影響の影響は中程度で騒音と評価された。

3. 環境影響評価手法に係る事例のまとめ (3.2 環境影響評価書の参考となる事例)

【評価書】 Northwind (旧 Eldepasco) 洋上風力発電事業

調査名		Northwind		摘要			
実施者		Northwind社					
調査の目的		・ベルギー沖における洋上風力発電事業の環境影響評価の実施					
候補海域		 					
風力発電機及び設置基数		風力発電所出力：216MW (3MW×72基)					
公表時期		2006年5月					
参考項目		主事の実験	主事の実験	予測・詳細結果			
大気環境	騒音	○	○	<p>【建設中】海上の騒音は杭打ち作業や工事船舶により増大するが、一時的であるため影響は容認できる程度である。</p> <p>【運転中】風車騒音は風車から5kmの地点で確認できなくなった。このため沿岸部や民家への影響はない。</p> <p>【解体時】工事中は騒音が増大するが一時的であるため影響は軽微である。</p>			
	振動	—	—	—			
	低周波音	—	—	—			
水環境	一般項目	○	○	<p>【建設中】建設機械や工事船舶から排出される大気汚染物質の影響はほとんどない。</p> <p>【運転中】点検やメンテナンスの船舶からの大気汚染物質の影響はほとんどない。風車による発電が排ガスを出さないことが有益。</p> <p>【解体時】建設時と同じ</p>			
	水質	一般項目	○	<p>【建設中】</p> <ul style="list-style-type: none"> 当該海域は油類や廃棄物の投棄禁止海域で基礎工事に伴いこれらがまき上がる可能性はない。またTBTは使用が禁止されているので問題はない。 海底のかく乱により栄養塩類がまき上がる可能性はあるが一時的である。なお、工事は静穏な時期に実施されるので、まき上がったまますぐに沈降するので影響は軽微である。 水温、容存酸素、塩分量への影響はない。 <p>【運転中】水質への影響はない。</p> <p>【解体時】建設時と同じ</p>			
	底質	○	○	<p>【建設中】重力式の場合多くの海底残土が出るが、これらはまとめて一か所に集積するよりも個別の風車の周に積み上げ方がよい。</p> <p>【運転中】風車基礎部にはスコアリング対策を施すことと、風車サイトが沖合にあることから底泥の拡散の問題はない。</p> <p>【解体時】底泥の拡散の影響は建設時と同様であるがモニタリング結果が集積されていること、新たな技術が開発されている可能性があることから建設時よりは軽微になると推測。</p>			
その他の環境	波浪、流向・流速	—	—	—			
	地形及び地質	—	—	—			
	電波障害	—	—	—			
海洋生物	水中騒音	○	○	<p>【建設中】水中の騒音は杭打ち作業や工事船舶により増大するが、一時的であるため影響は容認できる程度である。</p> <p>【運転中】水中騒音は風車間など風車の近傍では問題となるが、安全範囲である500m地点では暗騒音にマスキングされるため殆ど問題ない。</p> <p>【解体時】工事中は騒音が増大するが一時的であるため影響は軽微である。</p>			
	無脊椎動物と魚類	○	○	<p>【建設中】</p> <ul style="list-style-type: none"> 重力基礎の場合、モノパイプ等に比較して占有面積が広く棲息環境や生態系に影響がでるが、その範囲はBPNsの約1%程度であり限定的である。なお、風車海城では漁業が制限されるため海底の生態系は良好となる。 工事に伴う渦りは過食者には悪影響となるが、魚類にはえさ場としてのポテンシャルを増大させている。 パイプ基礎の場合、打込みによる水中騒音が魚類に影響を及ぼすとされているが、明確な結論は出ていない。 <p>【運転中】</p> <ul style="list-style-type: none"> 風車基礎やスコアリングの基盤は海底面の消失の面からはマイナスの影響だが、付着生物の新たな棲息基盤の創出面ではプラスのインパクトである。 魚類に対する水中騒音は500m地点で暗騒音にマスキングされること、他のプロジェクトでも魚類に対する影響は確認されていないことから、その影響は軽微と評価された。なお、風車のシャドーフィル効果については不明。 <p>【解体時】基本的には建設時と同じだが、杭打ちがないため影響は件背中より軽微である。</p> <p>【海底ケーブル】当該海域には敏感な魚類は棲息しないこと、海底ケーブルからの熱については局所的であることから影響は無視できる程度である。</p>			
	海草・藻類	—	—	—			
動物・植物・生態系	海産哺乳類	○	○	<p>【建設中】杭打ちの水中騒音が海産ほ乳類に影響を及ぼすと想定されたが、その絶対値が小さく、また動物は順化するので影響はないと評価された。</p> <p>・風車の存在が海域の利用を減少させたり放棄せたりすることが懸念されたが、海産ほ乳類は休息の場や天敵からの隠れ場などとして利用することから影響はないと評価された。</p> <p>・メンテナンス点検に伴う船舶等によるかく乱は一時的であること、海産ほ乳類が耐性を示すとともに影響は軽微と評価された。</p> <p>・風車の基礎部が生着生物やベントスを増大させ、これを餌とする魚類が誘集し、さらに魚類を餌とする海産ほ乳類が誘集することからプラスの影響が惹起される。</p> <p>【解体時】建設中と同様であるが杭打ちがない分、建設時より軽微である。</p> <p>【海底ケーブル】海底ケーブルからの電磁界は底泥中や海底直上での棲息環境に影響を及ぼすことは少ない。</p>			
	鳥類	○	○	<p>【建設中】種類によって異なるが工事によるかく乱により建設サイトを迂回するなどの影響が出るが、対象海域はBPNsの約0.4%と小さいこと、工事一時的であることから影響は軽微と評価。</p> <p>【運転中】</p> <ul style="list-style-type: none"> =渡り鳥と地域の鳥の行動= sensitivity scoreやcollision vulnerability scoreに飛翔高度を対応させた結果、オオカモメ、シセイゴロカモメの衝突率が高いと評価された。 全体としてはかく乱や衝突に対する影響は軽微と評価された。 =休憩中、採餌中= 生態的な敏感性からミツユビカモメが最もかく乱の影響を受けると評価された。 collision vulnerability scoreからミツユビカモメが衝突のリスクが大きかったが、飛翔高度がローカル範囲から外れていることから影響は少ないと評価された。 全体的にはかく乱や衝突の影響は軽微と評価された。 <p>【解体時】建設中と同様</p> <p>【海底ケーブル】ケーブル敷設に伴う海底のかく乱が(渦り)が魚類を逸散させ、これを餌とする鳥類に影響を及ぼすと想定されたが、場所や時期が限定的であることから影響は軽微と評価された。</p>			
景観	主要な眺望点及び観光資源並びに主要な眺望景観	○	○	<p>工事や運転に伴い海上に多くの船舶が航行するが、対象海域は沿岸から35kmの地点にあり殆ど視認できない。また、仮に視認できたとしても風車の存在は良好で落ち着いた景観として捉えられることがから、景観への影響はないと評価。</p>			
人と自然との触れる場	主要な人と自然との触れ合いの活動の場	—	—	—			

【3章の参考文献】

- ・NEDO (2009a) : NEDO 平成 20 年度 洋上風力発電実証研究 F/S 調査 (銚子沖)
- ・NEDO (2009b) : NEDO 平成 20 年度 洋上風力発電実証研究 F/S 調査 (北九州市沖)
- ・NEDO (2012a) : NEDO 洋上ウインドファーム フィージビリティ スタディ (秋田市沖)
- ・NEDO (2012b) : NEDO 洋上ウインドファーム フィージビリティ スタディ (洋野町沖)
- ・NEDO (2012c) : NEDO 洋上ウインドファーム フィージビリティ スタディ (鹿島灘)
- ・NEDO (2012d) : NEDO 洋上ウインドファーム フィージビリティ スタディ (旭市沖)
- ・むつ小川原港洋上風力開発㈱ (2013) : (仮称) むつ小川原港洋上風力発電事業 計画段階環境配慮書.
- ・むつ小川原港洋上風力開発㈱ (2014) : むつ小川原港洋上風力発電事業 環境影響評価方法書.
- ・NEDO 洋上風力発電実証研究 (銚子沖) 資料
- ・NEDO 洋上風力発電実証研究 (北九州市沖) 資料
- ・ウインド・パワー・エナジー (2015) : 鹿島港洋上風力発電事業 環境影響評価報告書
- ・独立行政法人 港湾空港技術研究所ホームページ : 全国港湾海洋波浪情報網波浪観測地点
- ・千葉県農林水産部水産局 (2013) : 千葉県水産ハンドブック, 平成 25 年 8 月.
- ・国土交通省港湾局 (2004) : 港湾工事における濁り影響予測の手引き, 国土交通省港湾局、平成 16 年 4 月.
- ・社団法人日本水産資源保護協会(1997) : 水中音の魚類に及ぼす影響, (社) 日本水産資源保護協会, 平成 9 年 10 月.
- ・Bedford Institute of Oceanography (2000–2001) : Moored current Meter and CTD Observations from Barrow Strait.
- ・BSH (BUNDESAMT FÜR SEESCHIFFFAHRT UND HYDROGRAPHIE) (2012)
- ・DATAWELL:HomePage (<http://www.datawell.nl/products/buoys.aspx>)
- ・Department of Business Enterprise and Regulatory Reform (2008) : Barrow Offshore Wind Farm 1st Annual Report.
- ・Elsam Engineering and ENERGI E2 (2004) : Review Report2003, The Danish Offshore Wind Farm Demonstration Project: Horns Rev and Nysted Offshore Wind Farm Environmental Impact Assessment and monitoring.
- ・Energinet.dk、Anholt Offshore Wind Farm (2009) : Hydrography, sediment spill, water quality, geomorphology and coastal morphology.
- ・ESS Group, Inc. (2006) : Cape wind energy project, Submerged aquatic vegetation investigation.
- ・Kongsberg Maritime Kongsberg Maritime Ltd:HomePage .
[\(<http://www.km.kongsberg.com/renewables>\)](http://www.km.kongsberg.com/renewables)
- ・London Array limited (2005) : Environmental statement.
- ・Mats Amundin, Daniel Wennerberg (2010–2014) : SAMBAH Static Acoustic Monitoring of the Baltic Harbour porpoise.
- ・Michael Dahne, Anita Gilles, Klaus Lucke, Verena Peschko, Sven Adler, Kathrin Krügel, Janne Sundermeyer, Ursula Siebert (2013) : Effects of pile-driving on harbor porpoises (*Phocoena phocoena*) at the first offshore wind farm in Germany, Environ. Res. Lett. 8.

- ・MMS US Department of the Interior Minerals Management Service (2009) : Cape Wind Energy Project, Final Environmental Impact Statement.
- ・Naikun Wind Development Inc. (2009) : Naikun Offshore Wind Energy Project, Executive Summary.
- ・Naikun Wind Development Inc. (2009) : Technical volume 3、4、6 of the environmental assessment application for the Naikun offshore wind energy project marine physical environment.
- ・Neeltje Muselaers, Henk Kouwenhoven (2008) : The environmental monitoring program at the Offshore Wind farm Egmond aan Zee.
- ・NIWA Taihoro Nukurangi, RV Tangaroa's sophisticated multibeam echosounder can trace the image of a seabed 7.5 kilometres beneath the surface,
<http://www.niwa.co.nz/our-science/oceans/bathymetry/further-information>
- ・Ramboll Oil & Gas (2009) : Anholt Offshore Wind Farm Tourism and Recreational Activities.
- ・Royal Haskoning (2009) : Dudgeon Offshore Wind Farm Environmental Statement.
- ・Sweden offshore wind ab, Wind Farm - Kriegers Flak ENVIRONMENTAL IMPACT ASSESSMENT.
- ・Talisman Energy : Beatrice wind farm demonstrator project Environmental Statement.
- ・Vattenfall, alpha ventus / EWE, E.ON, (Matthias Ibelser, 2009-2011)
- ・Woods Hole Group, Inc. (2003) : Cape wind submerged aquatic vegetation diver survey.
- ・住友商事株式会社 (2013) : ベルギーの海上風力発電事業に参画、住友商事 HP ニュースリリース (2013 年 7 月 18 日) .